

跡 遺 下 内
跡 遺 事 行 大

2002年

日 田 市 教 育 委 員 会



大行事遺跡から佐寺原台地を望む

序 文

近年のめまぐるしい経済発展のなか、農畜産物の流通、資材の運搬等の効率的流通体制を整備し、地域農業の振興に寄与する目的で、日田市の各生産団地を結び、高速道路や国道などの主要幹線道路へのアクセス道路として広域農道整備事業が計画・実施されております。

この広域農道は熊本県小国町から大分県日田市を結び、九州横断自動車道日田I.Cへ通ずる路線計画で、昭和57年度から日田市内では事業が開始され、昭和62年度からこれに伴います試掘調査発掘調査を行ってまいりました。

今回報告いたします内ノ下遺跡・大行事遺跡は平成10、12年度にこの広域農道整備事業有田工区の実施に先立ち調査を行った遺跡で、その成果をまとめたものです。

調査では西有田地区での縄文時代から古代に至るまでの人々の生活の足跡を辿ることが出来ました。

本書が、新たなる農畜産物流通体制の確立の代償として、失われゆく地域の歴史を記録した一資料として、教育の普及、啓蒙にご活用いただければ幸いに存じます。

調査にあたりまして、ご指導賜りました諸先生方をはじめ、ご協力を頂きました地元の皆様方、関係者の方々にたいし、心より感謝を申し上げます。

平成14年3月

日田市教育委員会

教育長 後 藤 元 晴

例 言

1. 本書は大分県日田地方振興局より委託を受けて行った「県営日田地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の3である。平成9年度発行の『牧原遺跡』をこのシリーズの1として、平成12年度発行の『川原田遺跡』を2とする。
2. 調査中には、小田富士雄氏（福岡大学教授）、下村智氏（別府大学助教授）に現地において、各分野からのご指導をいただいたほか、坂本嘉弘氏（大分県教育委員会）にご指導を頂いた。また、県耕地課や地元の方々には現場作業にあたり、様々な便宜を図っていただいた。特に、川原田遺跡においては諫山武夫氏にテント設置場所、大行事遺跡においては佐藤道義氏に地下水使用などの便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
3. 調査担当は『内ノ下遺跡』が吉田、「大行事遺跡」が渡邊である。
4. 本書に掲載した遺構写真は、担当者のほか雅企画有限公司 長谷川正美氏の委託によるものを、空中写真については、有限公司スカイサーベイ九州の委託によるものを使用した。また、遺物写真については、雅企画有限公司 長谷川正美氏に撮影委託したものを使用した。
5. 発掘現場での実測作業は各担当者が行ったほか雅企画有限公司 森山敬一郎氏、三浦陽子氏、財津真弓氏の委託による。遺物実測については各担当者が行った。
6. 遺構・遺物の製図は各担当者が行ったほか、雅企画有限公司 財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
7. 図版中の番号は全て挿図番号と一致する。
8. 遺構から出土した遺物及び図面については、すべて日田市埋蔵文化財センターにて保管している。なお、本書に使用した第V章「大行事横穴墓群について」に掲載した遺物は日野正行氏が寄贈された資料を使用した。
9. 本書に使用した遺構図の方位についてはすべて磁北である。
10. 本書の執筆は第III章 内ノ下遺跡を吉田、それ以外を渡邊が行い、編集は渡邊が行った。

本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	3
第II章	地理的・歴史的環境	5
第III章	内ノ下遺跡	9
第1節	遺跡の概要	9
第2節	調査の概要	9
第3節	遺構と遺物	9
1.	竪穴住居跡	10
2.	竪穴遺構	10
3.	土坑	12
4.	溝	15
5.	流路	17
6.	その他の遺物	18
第4節	小結	19
第IV章	大行事遺跡	21
第1節	遺跡の概要	21
第2節	調査の概要	21
第3節	遺構と遺物	21
1.	竪穴住居跡	23
2.	掘立柱建物	34
3.	その他の遺物	36
第4節	小結	37
第V章	付編 大行事横穴墓群について	41
第1節	横穴墓の位置と現状	41
第2節	横穴墓採集の遺物	42
第3節	まとめ	42
第VI章	総括	45

挿 図 目 次

- 第1図 広域農道日田地区路線図(1/30000)
- 第2図 調査区位置図(1/5000)
- 第3図 遺跡分布図(1/20000)
- 第4図 内ノ下遺跡調査区位置図(1/2000)
- 第5図 内ノ下遺跡全体図(1/500)
- 第6図 基本土層図(1/40)
- 第7図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第8図 1号竪穴遺構実測図(1/40)
- 第9図 1号竪穴遺構出土遺物実測図(1/3)
- 第10図 2号竪穴遺構実測図(1/40)
- 第11図 1号土坑実測図(1/30)
- 第12図 1号土坑出土遺物実測図(1/3)
- 第13図 2号土坑実測図(1/40)
- 第14図 3号土坑実測図(1/40)
- 第15図 4号土坑実測図(1/40)
- 第16図 主要遺構配置図(1/200)
- 第17図 1、2号溝土層断面図(1/60)
- 第18図 3、4、5号溝断面図(1/60)
- 第19図 1、2、5号溝出土遺物実測図(1/3)
- 第20図 7号溝土層断面図(1/40)
- 第21図 7号溝出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第22図 8号溝・1、2号流路平面図(1/100)
- 第23図 8号溝土層断面図(1/40)
- 第24図 土層断面図(1/40)
- 第25図 8号溝出土遺物実測図(土器)(1/3)
- 第26図 8号溝出土遺物実測図(石造物)(1/6・1/10)
- 第27図 その他の遺物実測図(1) 竪穴住居跡、溝出土(1/3)
- 第28図 その他の遺物実測図(2) 柱穴出土(1/3)
- 第29図 その他の遺物実測図(3) 包含層、一括出土(1/3)
- 第30図 大行事遺跡調査区位置図(1/2000)
- 第31図 大行事遺跡全体図(1/200)
- 第32図 基本土層図(1/40)
- 第33図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第34図 1号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
- 第35図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第36図 2号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第37図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第38図 3号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第39図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)
- 第40図 4号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第41図 4号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
- 第42図 5号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第43図 4・5号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第44図 6号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第45図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)
- 第46図 7号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第47図 7号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
- 第48図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)
- 第49図 8号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第50図 8号竪穴住居跡カマド実測図
- 第51図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
- 第52図 9号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第53図 10号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第54図 10号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
- 第55図 10号竪穴住居跡出土遺物(1/3)
- 第56図 11号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第57図 12号竪穴住居跡実測図(1/60)
- 第58図 11号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
- 第59図 12号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)
- 第60図 1・2号掘立柱建物跡実測図(1/80)
- 第61図 3・4・5号掘立柱建物跡実測図(1/80)
- 第62図 柱穴出土遺物実測(1/3・1/4)
- 第63図 その他の出土遺物実測図(1/2・1/3・1/4)
- 第64図 大行事横穴墓周辺地形図(1/2000)
- 第65図 大行事横穴墓採集遺物(1/3)

表 目 次

- 第1表 広域農道発掘調査遺跡一覧
第2表 内ノ下遺跡出土遺物観察表
第3表 大行事遺跡出土遺物観察表①
第4表 大行事遺跡出土遺物観察表②

挿入写真目次

- | | | | |
|-----|-------------|------|--------------|
| 写真1 | 内ノ下遺跡発掘作業風景 | 写真8 | 横穴墓現況写真② |
| 写真2 | 大行事遺跡発掘作業風景 | 写真9 | 横穴墓現況写真③ |
| 写真3 | 基本土層 | 写真10 | 横穴墓現況写真④ |
| 写真4 | 基本土層 | 写真11 | 須恵器採集地点現況写真① |
| 写真5 | 3号掘立柱建物出土土塊 | 写真12 | 須恵器採集地点現況写真② |
| 写真6 | 大行事横穴墓採集の貝 | 写真13 | 採取遺物写真 |
| 写真7 | 横穴墓現況写真① | | |

図 版 目 次

巻頭図版 大行事遺跡から佐寺原台地を望む

内ノ下遺跡

- | | | | |
|-----|---|-----|--|
| 図版1 | ①遺跡全景
②遺跡近景 | 図版4 | ①7号溝（北から）
②7号溝完掘（北から）
③7号溝土層断面（南から）
④8号溝、1号流路（西から）
⑤8号溝土層断面（西から）
⑥2号流路（東から） |
| 図版2 | ①1号竪穴住居跡（東から）
②1号竪穴遺構（西から）
③2号竪穴遺構（西から）
④1号土坑（東から）
⑤2号土坑完掘（西から）
⑥4号土坑完掘（北から） | 図版5 | 出土遺物1 |
| 図版3 | ①1号溝完掘（南から）
②1号溝土層断面（南から）
③2号溝完掘（北から）
④2号溝完掘（南から）
⑤3、5号溝完掘（北から）
⑥4号溝完掘（西から） | 図版6 | 出土遺物2 |

大行事遺跡

図版7 ①遺跡遠景(大行事遺跡から葛原遺跡を望む)

②大行事遺跡完掘状況

図版8 ①1号竪穴住居跡(南から)

②1号竪穴住居跡カマド(南から)

③1号竪穴住居跡カマド横土層

④1号竪穴住居跡カマド縦土層

⑤2号竪穴住居跡(南から)

⑥3号竪穴住居跡

⑦4、5号竪穴住居跡(東から)

⑧4号竪穴住居跡カマド(東から)

図版9 ①6、7、8、9号竪穴住居跡(東から)

②6、7、8、9号竪穴住居跡(真上から)

③7、8号竪穴住居跡カマド(東から)

④7、8号竪穴住居跡カマド横土層

⑤7、8号竪穴住居跡カマド縦土層

⑥10号竪穴住居跡(北から)

⑦11号竪穴住居跡(北から)

図版10 ①10号竪穴住居跡カマド

②12号竪穴住居跡(南から)

③12号竪穴住居跡カマド

④12号竪穴住居跡カマド土層

⑤1、2号掘立柱建物

⑥1号掘立P-1土層

⑦1号掘立P-2土層

⑧1号掘立P-3土層

図版11 ①1号掘立P-4土層

②2号掘立P-5土層

③1号掘立P-6土層

④1号掘立P-7土層

⑤1号掘立P-8土層

⑥1号掘立P-9土層

⑦3号掘立柱建物

⑧4、5号掘立柱建物

図版12 出土遺物1

図版13 出土遺物2

図版14 出土遺物3

図版15 出土遺物4

図版16 出土遺物5

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経過

本遺跡の発掘調査は大分県日田地方振興局の委託を受けて、県営広域営農団地農道整備事業日田地区に伴って行ったものである。この県営広域営農団地農道整備事業（以下、広域農道）日田地区は、昭和56年に事業計画決定され、天瀬町から大山町を經由して九州横断自動車道日田I.C.へ通ずる道路網を整備し、日田市の各生産団地間を結ぶことで、今後農業団地の造成の進展に伴った流通量の拡大に対応し、大規模生産機構を確立し、大型機械の促進、労力の節減、集出荷の一元化、運搬のスピード化、荷痛みの防止等、大きく地域農業の振興に寄与することを目的に進められてきた。実施区間は熊本県小国町から大分県日田市を結ぶ県内総延長28.073kmのうち、日田市内8.0103kmにあたる。

事業の工事実施に伴い、昭和62年度に建設主幹課である大分県日田地方振興局耕地課より市教委に対して埋蔵文化財の有無についての照会文書が提出されるようになり、これを受けて協議がなされ、事業の進捗に合わせて随時、事前の試掘調査及び発掘調査を実施してきた。平成5年度には求来里平島遺跡の発掘調査を実施し、縄文時代後期から晩期の土坑、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居跡、土坑などが検出された。また、同年度に、工事実施予定地のうち、周知遺跡にあたる大部遺跡と千人塚2号墳の所在する部分に関して、路線や工法の変更などの協議を行った結果、路線内の一部をトンネル工法とすることになった。平成6年度には塚の周溝が一部路線にかかることを考慮し、掘削予定地を対象とした発掘調査と合わせて、確認調査を実施し、調査区からは古墳時代前期の方形周溝墓、石棺墓、木棺墓、土壙墓などが検出され、また、千人塚2号墳は確認調査の結果、中世の塚であることが判明した。なお、この際に調査の行われた部分に関しては、周知遺跡名は大部遺跡の範囲内に属するものの、調査区を適切に判断できるように牧原遺跡と名称変更し、千人塚2号墳は牧原千人塚に名称変更を行った。

さて、この広域農道は、平成6年度には、有田町までで一旦路線を打ち切り（日田工区）、新たに石松町から財津町へ抜ける路線計画の変更が行われ（有田工区）、この変更に伴って日田地方振興局耕地課から平成9年度に有田工区における埋蔵文化財所在の有無についての照会文章が市教育委員会に提出されるようになり、これを受けて、事業の進捗にあわせて随時、事前の試掘調査及び発掘調査を実施してきた。平成10年度の試掘調査では、石松川と有田川に挟まれた中州と石松川右岸の沖積地部分に遺構の存在が確認された。このため、周知遺跡に「川原田遺跡」、「内ノ下遺跡」と新規登録し、この遺跡の取り扱いについて県振興局耕地課と市教委で協議を行うこととなった。

第 1 表 広域農道発掘調査遺跡一覧

	遺 跡 名	調査年度	調査面積	調査担当者	備 考
1	求来里平島遺跡	平成5年度	530㎡	土居和幸・行時志郎	未報告
2	牧 原 遺 跡	平成6年度	2150㎡	松下桂子	報告済
3	川 原 田 遺 跡	平成10年度	360㎡	吉田博嗣	報告済
4	内ノ下遺跡	平成10年度	1600㎡	吉田博嗣	本報告
5	大 行 事 遺 跡	平成12年度	450㎡	渡邊隆行	本報告
6	堀原遺跡丁区	平成13年度	920㎡	渡邊隆行	未報告

この事前協議では現状での保存が難しいとの結論に達したため、平成10年度に本格的な発掘調査を実施することになった。そこで、平成10年11月24日に大分県日田地方振興局と川原田遺跡・内ノ下遺跡発掘調査に関する委託契約書を取り交わし、平成10年12月17日から平成11年3月10日まで発掘調査を実施した。

その後、有田工区の工事の進捗に合わせて平成11年度に実施した大行事遺跡の立会い調査で、遺跡の存在が明らかになったことから、この遺跡の取り扱いについて県振興局耕地課と市教委で協議を行うこととなった。この事前協議では現状での保存が難しいとの結論に達し、平成12年度に本格的な発掘調査を実施することとなった。そこで、平成12年8月28日に大行事遺跡発掘調査に関する委託契約書を取り交わし、同年8月28日～11月20日まで調査を実施した。

《参考文献》

「求来平島遺跡A・B区」『平成5年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会

1995年

松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集 日田市教育委員会

1997年

吉田博嗣編『川原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第32集 日田市教育委員会

2001年



第1図 広域農道日田地区路線図 (1/30000)



第2図 調査区位置図 (1/5000) ※薄いトーンは試掘により、遺構が確認されなかった場所

第2節 調査組織

年度別の調査関係者は以下の通りである。(職名は当時のままとしている。)

(平成10年度)

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊 (日田市教育長)

調査事務 原田俊隆 (文化課課長)、長尾幸夫 (同課長補佐兼文化財係長)、佐々木豊文 (同主任)

調査員 土居和幸 (文化課主任)、行時志郎 (同主任)、吉田博嗣 (同主事)、若杉竜太 (同囑託)、山路康弘 (同囑託)

(平成11年度)

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊 (日田市教育長)

調査事務 原田俊隆 (文化課課長)、石井英信 (同課長補佐兼文化財係長)、佐々木豊文 (同主査)、美野寿美香 (同臨時職員)

調査員 土居和幸 (文化課主任)、行時志郎 (同主任)、吉田博嗣 (同主任)、若杉竜太 (同主事)、森山敬一郎 (同囑託)、五十川雄也 (同囑託)

(平成12年度)

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長、～平成12年11月14日）

後藤元晴（同教育長、平成12年11月15日～）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、佐々木豊文（同主査）、
江田香織（同臨時職員）

調査員 行時志郎（文化課主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邊隆行（同主
事、大行事遺跡調査担当）

（平成13年度）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（同教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）、石井英信（同課長補佐兼文化財係長）、島崎誠司（同主査）、
原田恭子（同臨時職員）

調査員 行時志郎（文化課主任）、吉田博嗣（同主任）、若杉竜太（同主事）、渡邊隆行（同主事）

発掘作業員

（平成10年度）

秋ヤエ子・穂本文雄・秋吉ミユキ・秋吉タミエ・石井貞美・碓井雅大・猪熊ヨネ・江藤キミ子・小下
一・五反田静子・財津由太・財津利枝・財津真弓・佐藤トシ子・庄内武子・清水忠造・島田松之助・
島田隆幸・園田義雄・高倉美利・高倉富美子・高村笑美子・津江久徳・手嶋トシエ・中嶋カズ子・
中嶋ツネ子・中嶋トミエ・森山カメノ・森島晋太郎・吉弘昇・吉長ハルエ・吉長利夫・渡邊芳五郎

（平成12年度）

石田スズコ・井上美代子・伊藤武文・伊藤キヨ子・荏隈政子・鍛冶屋アサヨ・梶原利徳・後藤フク
エ・財津勲子・財津静子・佐藤カスミ・佐藤トシ子・武内アイ子・中嶋キクエ・中野ヨシコ・仁田
坂シズエ・森本絹子

整理作業員

朝倉真佐子・穴井こずえ・穴井トヨ子・石田紀代子・伊藤一美・伊藤弘子・今井由美子・川原君子・
黒木千鶴子・財津香奈子・佐藤道子・桑野菊美・高倉由佳・田中静香・聖川暢子・安元百合



写真1 内ノ下遺跡発掘作業風景



写真2 大行事遺跡発掘作業風景

第II章 地理的・歴史的環境

内ノ下遺跡、大行事遺跡は日田市東部、有田川と石松川の合流地点に広がる沖積地周辺に存在する。有田川は月出山山岳北方より発し、台地の谷間を縫って西流し、中尾町で有田川支流の石松川と合流し、そのまま西流して、三隈川支流の花月川と合流する。この有田川の侵食作用によって、川筋には谷地形が長大に形成され、特に石松川との合流地点付近は、両河川に挟まれて中州状の沖積地が展開している。このように形成された沖積地とその周辺部の台地上には、数多くの遺跡群が存在し、この地域において現代にいたるまで長期間に渡って生活が行われていたことを示している。

さて、今回報告する内ノ下遺跡、大行事遺跡は、この有田川によって形成される沖積地の入り口付近にあたり、有田川周辺、及び、花月川周辺に形成されてきた遺跡と関連しながら展開していったものと考えられるため、ここでは周辺遺跡の調査成果を時代ごとにまとめておくことにする。

旧石器時代

遺構は確認されていないものの、平島遺跡B地点や馬形遺跡から三稜尖頭器が出土していることから、この時期には少なくとも生活が営まれていたことを示している。

縄文時代

早期の遺跡としては入り組んだ谷地形の奥地に石ヶ迫遺跡があり、集石遺構が出土している。

後期から晩期の遺跡としては、有田川左岸では石ヶ迫遺跡、森ノ元遺跡、有田塚ヶ原遺跡、尾漕遺跡4次調査区などがある。石ヶ迫遺跡では集石遺構が発見され、狩猟地的様相を呈しており、このことを示すように、周辺丘陵上に位置する有田塚ヶ原では落穴状遺構が37基確認されている。この台地一帯は狩猟地として利用されていたものと思われる、この台地縁辺部の尾漕遺跡4次調査区、森ノ元遺跡でも落穴状遺構が発見されている。また、森ノ元遺跡では埋甕が発見されており、集落の存在を窺わせる。有田川右岸にあたる葛原台地上には竪穴住居跡や落穴状遺構が発見されており、また、西有田赤ハゲ遺跡では包含層が検出されている。このことから、有田川両岸には、入り組んだ台地地形を利用して縄文時代の生活跡が形成されていたものと考えられる。

弥生時代

前期の遺跡は佐寺原台地上に位置する佐寺原遺跡があり、前期末から後期終末にかけての竪穴住居跡、貯蔵穴、掘立柱建物、溝状遺構、周溝状遺構、甕棺墓などが検出されており、花月川を挟んで対岸の台地上に位置する後迫遺跡とともに、弥生時代全般にあたってこれらの台地上が利用されて、中心的集落が形成されていたものと考えられる。

中期の遺跡としては、佐寺原遺跡、後迫遺跡のほかに、求来里川と有田川の合流地点の沖積地に向って、舌状に張り出したほぼ平坦な丘陵上に位置する祇園原遺跡1・2次調査区があり、中期後半から後期中頃にかけての竪穴住居跡群、1間×2間の高床倉庫跡群、大型掘立柱建物群、中型掘立柱建物群、1間×1間の小型掘立柱建物群、小児用甕棺墓、方形周溝遺構等が確認されている。この丘陵上の先端部には竪穴住居跡が検出された平島遺跡E区があることなどから、この時期の中心的集落の一つと考えられる。その他、周辺には有田塚ヶ原遺跡、馬形遺跡、尾漕遺跡4次調査区などが見られる。

後期の遺跡としては、佐寺原遺跡、後迫遺跡のほかに、祇園原遺跡の北東にあたる有田川左岸の沖積微高地上に平島遺跡A・B区があり、後期中頃から終末にかけての竪穴住居跡や環濠などが検

出されており、祇園原遺跡から続くこの一帯の中心集落を形成していたものと思われ、近接する平島遺跡D・E区からは大型成人用甕棺墓、石棺墓、石蓋土壙墓などが検出されている。

古墳時代

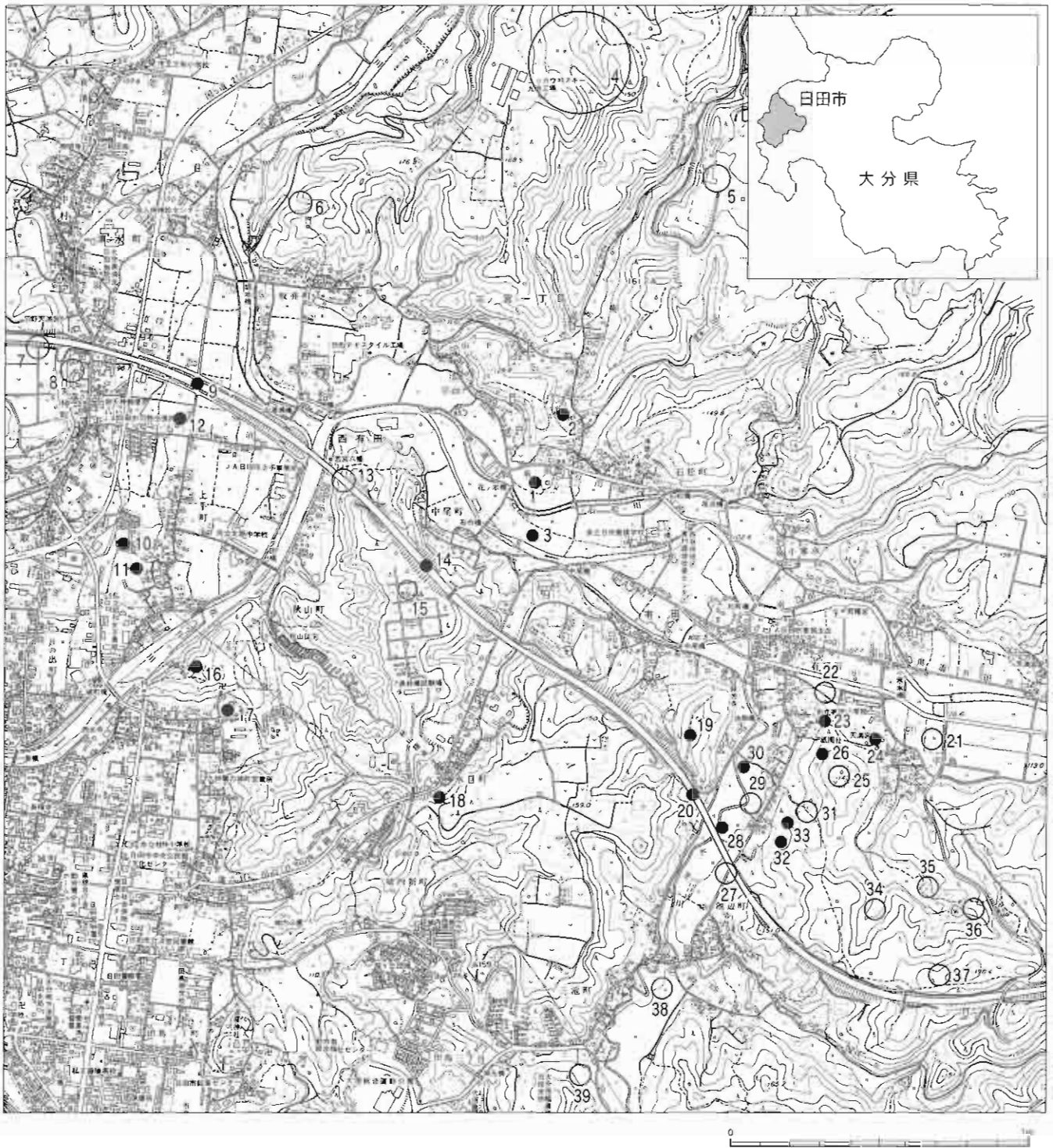
前期の遺跡としては、花月川の沖積地に位置する日田条里遺跡で竪穴住居跡が、夕田遺跡で土坑や掘立柱建物が検出されている。

中期の遺跡としては、5世紀中頃の竪穴住居跡が1軒のみ確認されている石ヶ迫遺跡があり、また、西有田赤ハゲ遺跡で4世紀末～5世紀前半の祭祀遺構が検出されているのみで、大規模な集落の存在は確認されていない。墳墓群は、中尾原台地から北へ向って派生するほぼ平坦な尾根筋上にある大迫遺跡があり、5世紀後半から末にかけての石棺墓1基、土坑墓23基が確認されている。この尾根筋をやや下りた位置には凝灰岩の石棺を主体部にもつ中尾古墳群があり、5世紀代の古墳と考えられる。また、この大迫遺跡、中尾古墳群と求来川を挟んで対岸の丘陵上には、4世紀末から5世紀前半の直径約25mの円墳で、凝灰岩の箱式石棺を主体部にもつ尾漕2号墳がある。さらに求来里川との合流点を少し遡った有田川右岸の台地上には5世紀代の前方後円墳である城山古墳が所在する。また、有田川と花月川の合流地点にあたる佐寺原台地の縁辺部には夕田古墳群があり、5世紀中頃の5期の古墳群が発見されており、対岸には縫ヶ迫古墳群が見られる。

後期になると、有田川と求来里川の合流地点の入り組んだ台地周辺で、長迫遺跡A～C地点、尾漕遺跡1・2・4・5・6次調査区、平島遺跡A・B・D・E地点、祇園原遺跡1次調査区などの大規模な集落の展開がみられ、6世紀後半からの住居跡群、建物群が多く検出されている。これらの多くは丘陵に挟まれた小谷地や丘陵裾部の緩斜面に位置しており、この時期の特徴を示している。また、有田川左岸では、竪穴住居跡が検出された葛原遺跡、西有田赤ハゲ遺跡などがあり、特に、西有田赤ハゲ遺跡では鍛冶関連遺物も出土している。墳墓群は、6世紀前半～中頃代の年代が考えられる平島遺跡D・E地点・塔ノ本古墳の塔ノ本1～3号墳、平島古墳、尾漕遺跡1次調査区の5世紀末の古墳、有田塚ヶ原古墳群等の古墳群が有田川と求来里川の合流地点の入り組んだ台地周辺にまとまって見られる。また、この地域には6世紀中頃から7世紀前半にかけて形成される平島横穴墓群もみられ、後期の大規模集落の展開と同様に、墳墓群の展開も著しい。この地域からやや下った有田川と花月川の合流地点付近では5世紀後半から8世紀にかけて形成される横穴墓の展開が見られ、有田川左岸に佐寺横穴墓群、夕田横穴墓群があり、この台地東南側斜面には水目横穴墓群、花月川右岸には羽田横穴墓が見られる。

古代

古代律令下にあつてはこの一帯は『豊後国風土記』にみられる日田五郷のうち在田郷に否定されている。特に有田川と求来里川の合流地点の入り組んだ台地周辺に集落がまとまって見られる。長迫遺跡A～D地点では、8世紀代の竪穴住居跡が確認され、石ヶ迫遺跡では谷奥のB区で8世紀から9世紀にかけての竪穴住居跡が確認され、谷出口に近いA区では当該時期の水田遺構と水路が検出された。石ヶ迫遺跡より分岐した谷の中央にあるクビリ遺跡では、8世紀から12世紀にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物群が確認され、この中からは鉄滓や鞆羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。有田塚ヶ原遺跡では8世紀代の掘立柱建物群が5棟並んで確認されており、尾漕遺跡1・4次調査区でも8世紀代の竪穴住居跡や建物群が見られる。これらは古墳時代後期と同様に小谷地や丘陵裾部の緩斜面に位置する特徴を有している。



- | | | |
|------------------|---------------|----------------|
| 1 内ノ下遺跡 | 14 佐寺原横穴墓群 | 27 尾漕遺跡1・6次調査区 |
| 2 大行事遺跡 | 15 佐寺原遺跡 | 28 尾漕遺跡2次調査区 |
| 3 川原田遺跡 | 16 大蔵古城跡 | 29 尾漕遺跡4次調査区 |
| 4 葛原遺跡 | 17 慈眼山瀬戸口遺跡 | 30 尾漕遺跡5次調査区 |
| 5 西有田赤ハゲ遺跡 | 18 水目横穴墓群 | 31 長迫遺跡A～C地点 |
| 6 縫ヶ迫古墳群 | 19 中尾古墳群 | 32 長迫遺跡D地点 |
| 7 後迫遺跡 | 20 大迫遺跡 | 33 尾漕2号墳 |
| 8 羽田横穴墓群 | 21 平島遺跡A～C地点 | 34 クビリ遺跡 |
| 9 日田条里遺跡 | 22 平島遺跡D・E地点 | 35 石ヶ迫遺跡 |
| 10 日田条里上手地区1次調査区 | 23 塔ノ本古墳 | 36 平島横穴墓群 |
| 11 日田条里上手地区2次調査区 | 24 平島古墳 | 37 有田塚ヶ原遺跡 |
| 12 日田条里上手地区5次調査区 | 25 祇園原遺跡1次調査区 | 38 森ノ元遺跡 |
| 13 夕田遺跡、古墳、横穴墓群 | 26 祇園原遺跡2次調査区 | 39 馬形遺跡 |

第3図 遺跡分布図 (1/20000)

また、この地域からやや下った有田川と花月川の合流地点付近では、後迫遺跡に古代の建物が見られ、やや花月川を下ると「門」「林」「大」「三」の墨書土器が出土した慈眼山瀬戸口遺跡が見られる。

中世

有田川と求来里川の合流地点付近では、12世紀後半代、15世紀中頃の土壙墓が検出された尾漕遺跡1次調査区、12世紀後半から13世紀にかけての掘立柱建物群、土壙墓が検出された森ノ元遺跡、12世紀後半から13世紀にかけての竪穴遺構が確認されている長迫遺跡、掘立柱建物群が確認されている平島遺跡E区などがみられる。有田川と花月川の合流地点付近では、掘立柱建物、土壙墓が検出された川原田遺跡、11世紀から13世紀にかけての建物群が検出された日田条里上手地区1・2・5次調査区がある。やや花月川を下ると大蔵氏の居城跡である大蔵古城跡がある。また、大行事遺跡の丘陵上には中世日田を治めていた群老8人の一人石松氏の居城跡があったと推測されている。

近世

尾漕遺跡1・6次調査区、祇園原遺跡などがある。尾漕遺跡1次調査区では6棟の掘立柱建物群が確認されている。また隣接する6次調査区内においても近世の掘立柱建物群が数棟確認されている。祇園原遺跡では木棺墓群が確認されている。

《参考文献》

『平成6～11年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996～2001

『平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園原遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次』

日田市教育委員会 2001

『尾漕遺跡』日田市教育委員会 2001

『川原田遺跡』日田市教育委員会 2001

『日田条里上手地区』日田市教育委員会 2000

『日田条里上手地区5次』日田市教育委員会 2001

『西有田赤ハゲ遺跡』日田市教育委員会 1992

『尾漕遺跡2・5次』大分県教育委員会 2000

『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡』大分県教育委員会 1997

『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』大分県教育委員会 1998

『夕田遺跡群』大分県教育委員会 1999

『後迫遺跡』大分県教育委員会 2001

『日田市史』日田市 1991

内ノ下遺跡



内ノ下遺跡全景

第Ⅲ章 内ノ下遺跡

第1節 遺跡の概要 (第4図)

内ノ下遺跡は北側から伸びている独立丘陵とその南側に流れる石松川に挟まれたところに位置している。調査区は北からの緩斜面で標高約97mを測り、南へ緩やかに傾斜した沖積地が有田川によって形成されている。調査以前の現況は水田地であった。

調査区の東側には北から伸びる丘陵の残丘があり、その丘頂部には今でも五輪塔の一部が残っている。

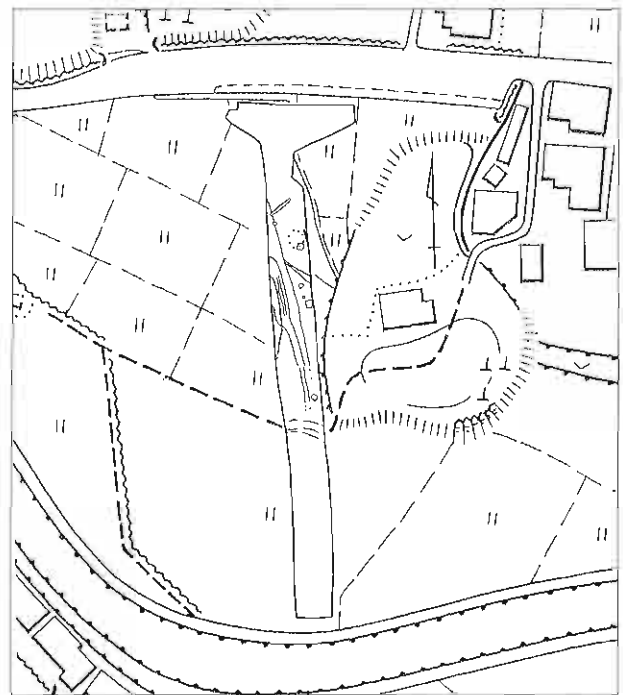
第2節 調査の概要

調査は、事前に行った試掘調査の結果を踏まえて県道白地日田線の現況道路から南側の石松川までの範囲を調査対象地として設定し、平成10年12月17日から機械による表土除去作業を開始した。遺構の密度は北側から残丘までの間に集中しており、竪穴住居跡や溝などが検出された。調査は広域農道路線内の南側に位置する川原田遺跡と同時並行して行われ、内ノ下遺跡では平成11年3月16日に空中写真撮影を行い、平成11年3月26日までにすべての実測作業を終了し、合わせて器材の撤収も完了した。

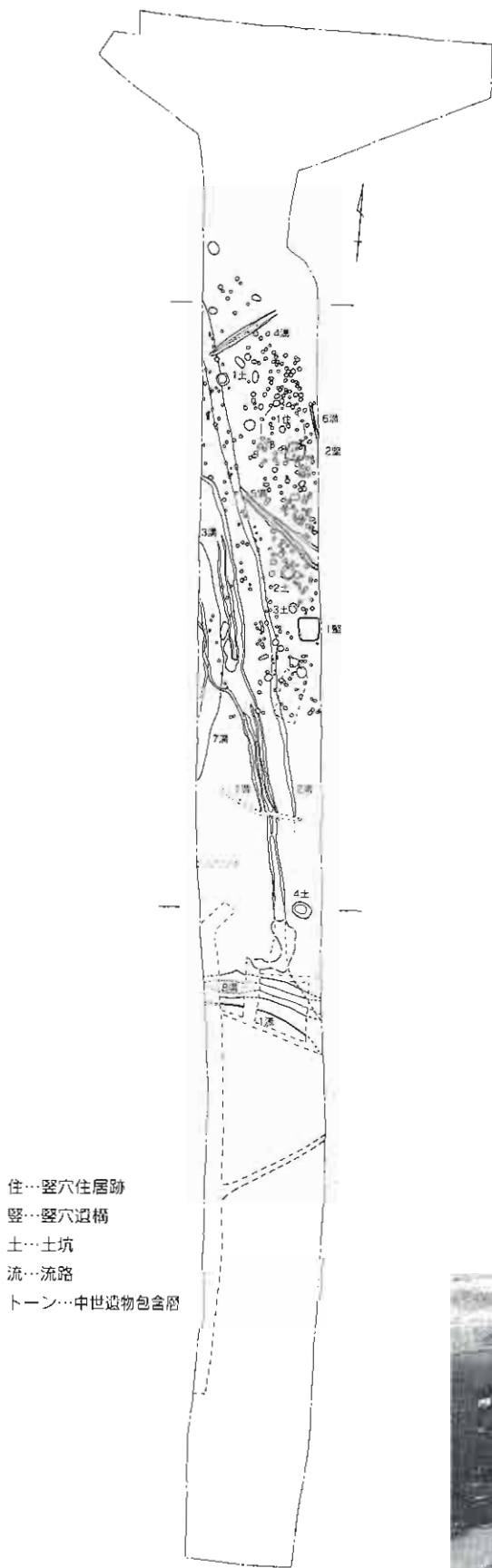
第3節 遺構と遺物 (第5図)

第6図は基本土層図である。第5層の灰褐色砂層を掘り込んで遺構が検出された。この層の下には暗褐色砂層があり、さらにその下には砂礫層が堆積している。第6層上面には遺構の埋土であると考えられる暗灰褐色粘質土(第5層)が堆積しており、その上に灰褐色粘質土(第4層)が堆積し、これらは縄文～弥生時代の土器を含む包含層であった。また、明赤褐色土(第2層)、明灰褐色粘質土(第3層)は水田層であると考えられる。調査区から検出された遺構は竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、土坑4基、溝8条、流路2条、柱穴多数である。

以下、個別の遺構について説明を行う。



第4図 内ノ下遺跡調査区位置図 (1/2000)



第5図 内ノ下遺跡全体図 (1/600)

1. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第7図)

調査区北東側で検出した竪穴住居跡で、壁面など大半は削平を受けているため柱穴しか残存していなかった。柱穴は8基あってほぼ円形に巡ることや深さがほぼ近似値を示していたため、平面形態が円形プランをなす竪穴住居跡と考えた。これらの柱穴の中心にはいくつかの小ピットが存在していたので炉跡と考えたが、周辺を含めて焼土や炭を検出することは出来なかった。また、この竪穴住居跡の規模は、P1からP3までが芯々距離で約4.1m、P2からP4までの芯々距離は約4.3mを測る。

2. 竪穴遺構

1号竪穴遺構 (第8図)

調査区北東側で検出された。確認面での規模は南北方向で約2.1m、東西方向に約1.85mを測り、床面までの深さ約30cmを測り、隅丸方形プランを呈する。

出土遺物 (第9図)

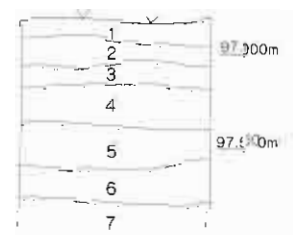
1は袋状口縁壺である。口縁端部は丸みをもちながら内向する。また、内外面は丹塗でミガキが密に施されている。

2号竪穴遺構 (第10図)

調査区北東側で検出された。確認面での規模は南北方向で約1.7m、短軸方向に約1.6m、床面までの深さ約10cmを測り、隅丸方形プランを呈する。出土遺物はなかった。1号竪穴住居跡と切り合い関係にあり、2号竪穴遺構が前者を切っている。

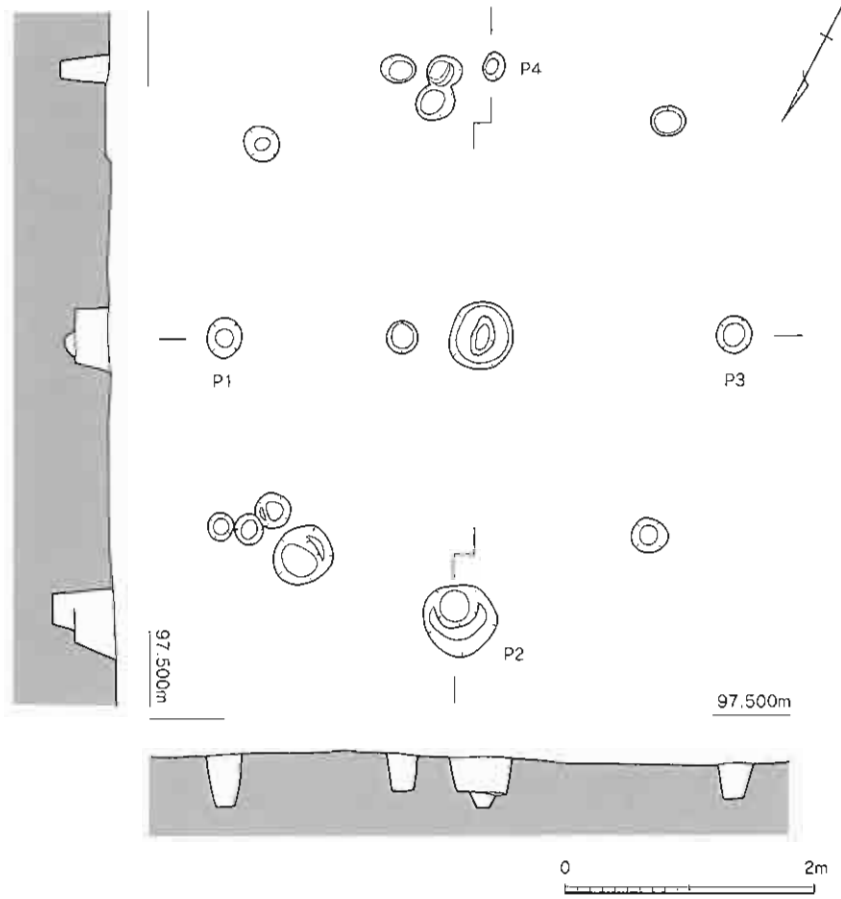


写真3 基本土層

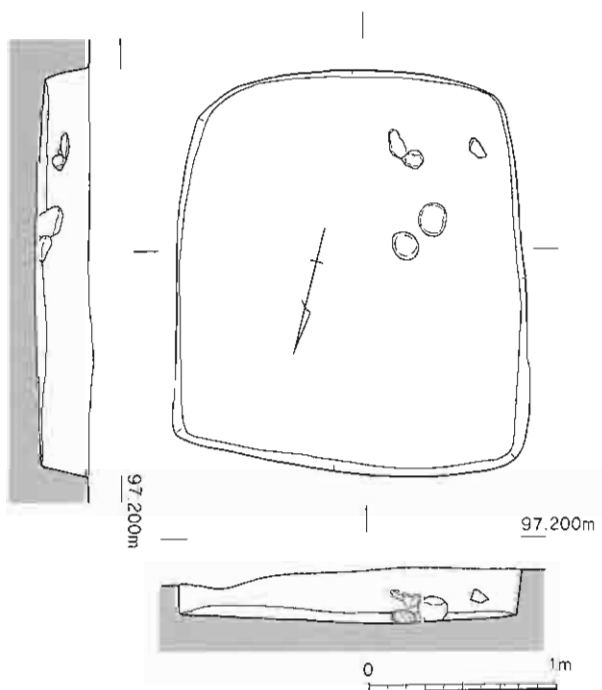


- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗褐色土 | 5. 暗灰褐色粘質土 |
| 2. 明赤褐色土 | 6. 灰褐色粘質土 |
| 3. 明灰褐色粘質土 | 7. 砂レガ層 |
| 4. 灰褐色粘質土 | |

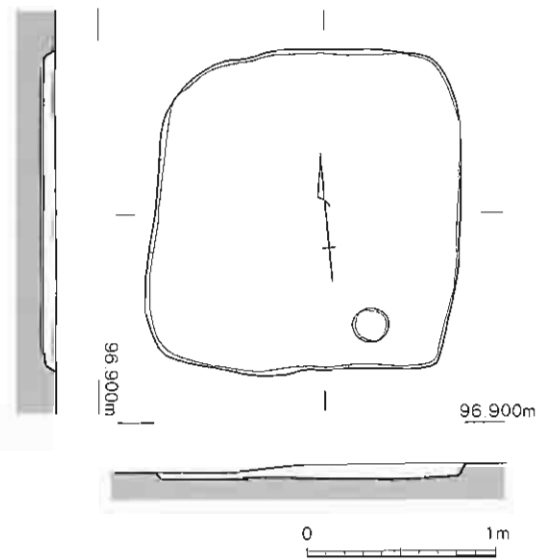
第6図 基本土層図 (1/40)



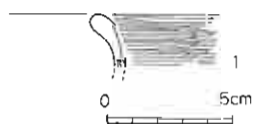
第7图 1号竖穴住居跡実測図 (1/60)



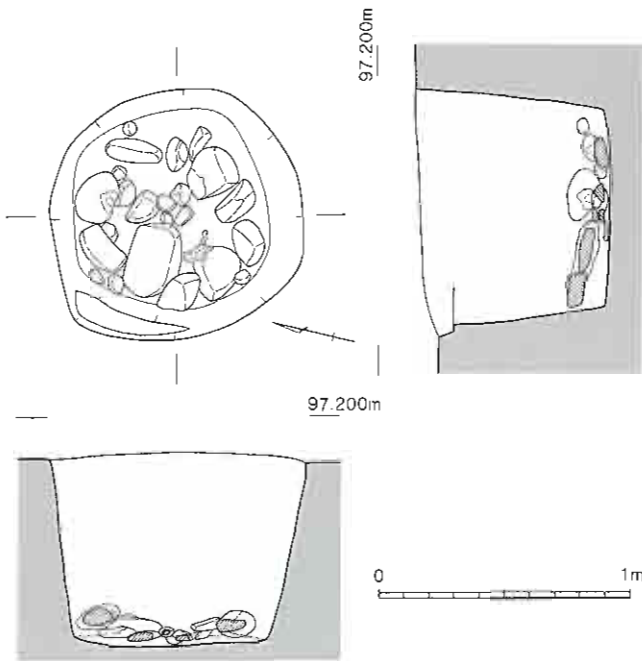
第8图 1号竖穴遺構実測図 (1/40)



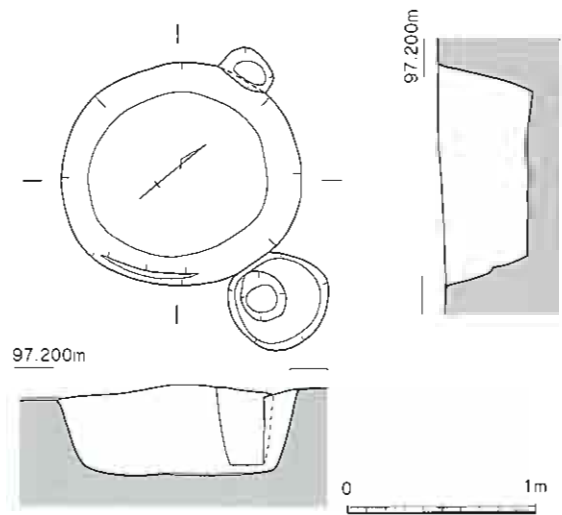
第10图 2号竖穴遺構実測図 (1/40)



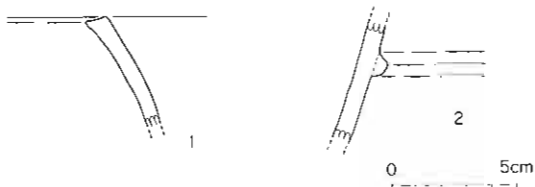
第9图 1号竖穴遺構出土遺物実測図 (1/3)



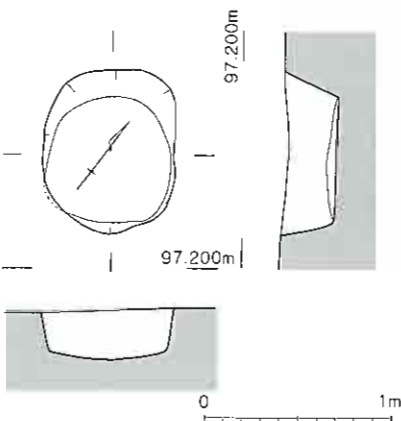
第11図 1号土坑実測図 (1/30)



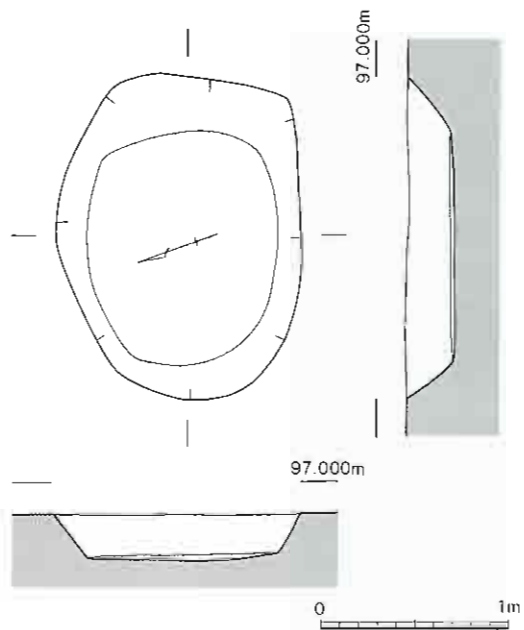
第13図 2号土坑実測図 (1/40)



第12図 1号土坑出土遺物実測図 (1/3)



第14図 3号土坑実測図 (1/40)



第15図 4号土坑実測図 (1/40)

3. 土坑 (第11~15図)

1号土坑 (第11図)

平面はほぼ円形で、大きさは約1m四方、深さは75cmを測る。底部にはこぶし大の礫と粘質土が堆積しており、弥生土器が数点出土した。

出土遺物 (第12図)

1は鉢の口縁部で外面は丹塗である。2は甕の胴部で1条の突帯がつき、内外面ともにナデ調整が残る。

2号土坑 (第13図)

平面は円形で、南北方向に1.30m、東西方向に1.20m、深さ約45cmを測る。出土遺物はなかった。

3号土坑（第14図）

平面は長円形で、南北方向に90cm、東西方向70cm、深さ約25cmを測る。出土遺物はなかった。

4号土坑（第15図）

平面は不定形で、東西方向に1.70m、短軸1.30m、深さ約25cmを測る。出土遺物はなかった。

4. 溝（第16図）

1号溝（第17図）

調査区北側を南北方向に検出されたが、調査区内での確認長は約40mで、段掘りの部分で最大幅1.60m、深さは50cmを測る。溝は南側から北側へわずかに傾斜しており、調査区中央で段掘りが途切れたところから溝幅が乱れている。埋土は砂利が密に詰まっており、わずかに土が混じるほかは特に遺物が混入するわけでもなく、播鉢の小破片が出土したのみである。溝は、調査区北側へと伸びている。

出土遺物（第18図1）

1は陶器の播鉢である。

2号溝（第17図）

調査区北側を南北方向に検出されたが、調査区内での確認長は46mで、最大幅3m、深さは20cmを測る。溝は調査区南側へと伸びている。出土遺物は弥生土器が多数出土した。

出土遺物（第18図2、3）

2、3は弥生土器である。2は甕の胴部で、2条の突帯をもつ。内外面はナデ調整が施されている。3は脚付甕である。胴下部外面にはハケ目調整が施され、外底部内に指頭圧痕が残る。

3号溝（第19図）

調査区北側で検出されたが、調査区内での確認長は11mで、最大幅1m、深さは15cmを測る。出土遺物はなかった。

4号溝（第19図）

調査区北側で東西方向に検出されたが、調査区内での確認長は7mで、最大幅90cm、深さは15cmを測る。この溝は2号溝を切っており、東西方向へ伸びていたと思われる。また、溝の中心には深さ約10cmほどの小ピットが約1m間隔に3基確認され、杭列の可能性も考えられる。出土遺物はなかった。

5号溝（第19図）

調査区中央を東西方向に検出されたが、調査区内での確認長は10mで、最大幅50cm、深さは15cmを測る。溝は調査区の南北方向へと伸びている。出土遺物は1点出土した。

出土遺物（第18図4）

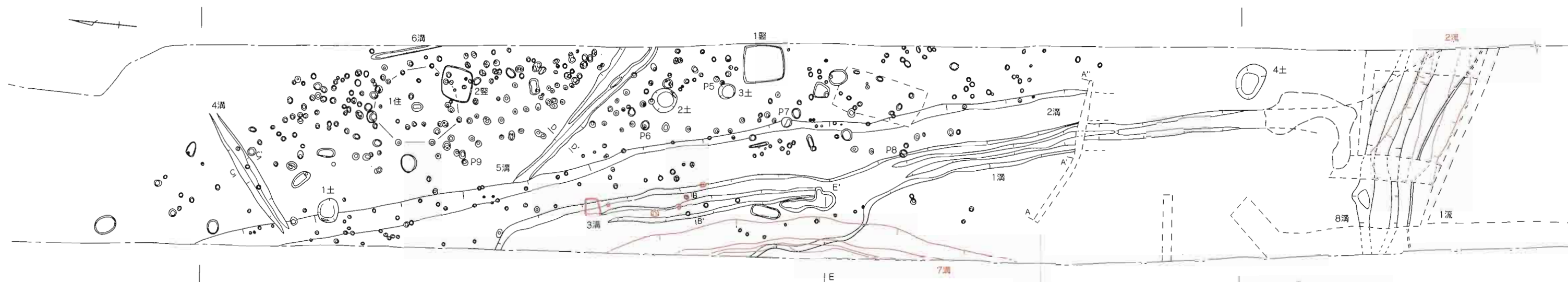
4は弥生土器の壺である。口縁部は大きく外反しながら、端部を内側上方に摘み上げている。

6号溝

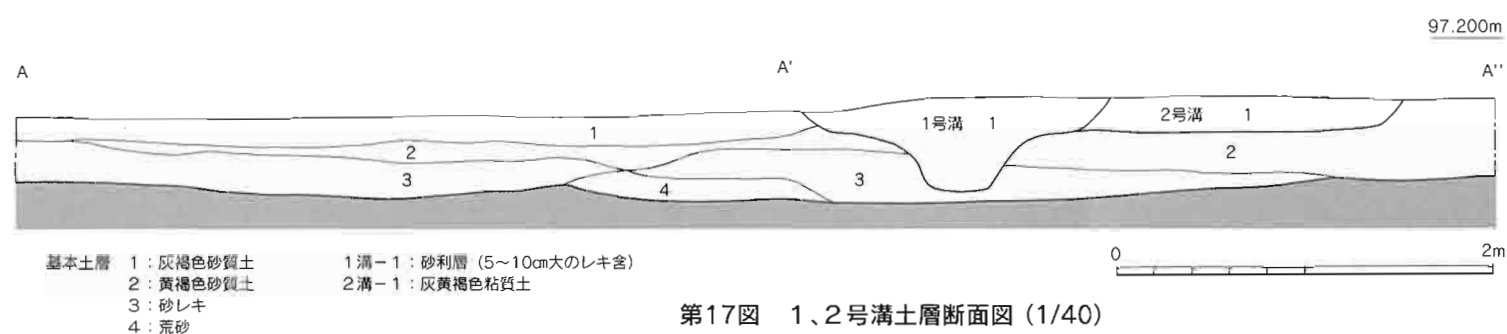
調査区北側で検出されたが、調査区内での確認長は3.5mで、最大幅2.5cm、深さは8cmを測る。溝は調査区南側へと伸びている。出土遺物はなかった。

7号溝（第20図）

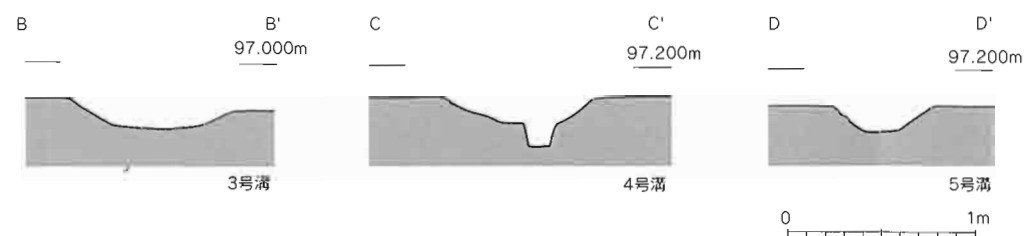
調査区南側で検出されたが、調査区内での確認長は20mで、最大幅2.2m、深さは1mを測る。



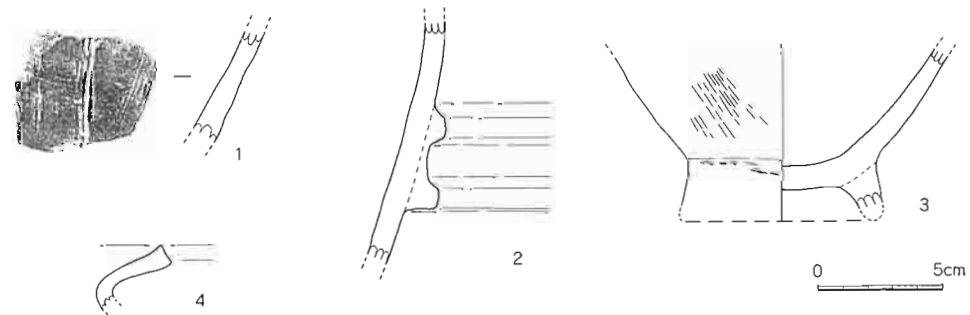
第16図 主要遺構配置図 (1/200)



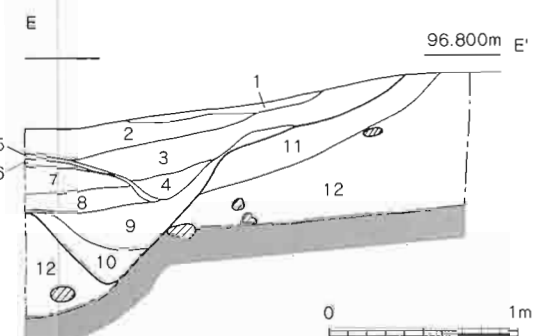
第17図 1、2号溝土層断面図 (1/40)



第18図 3、4、5号溝断面図 (1/40)

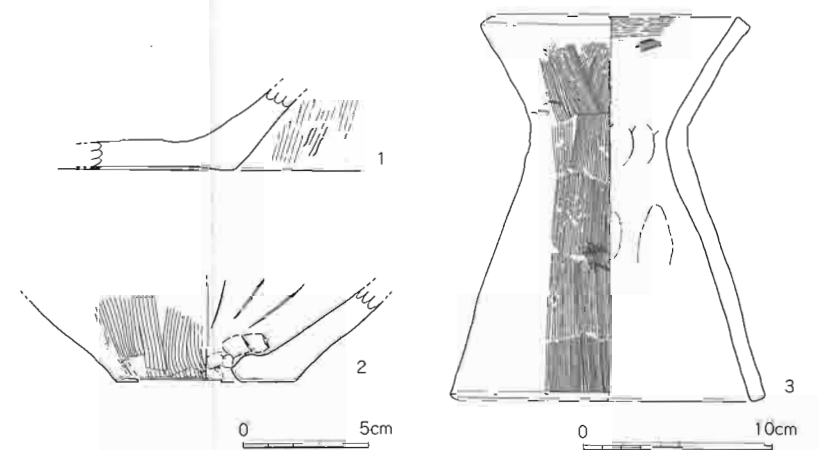


第19図 1、2、5号溝出土遺物実測図 (1/3)

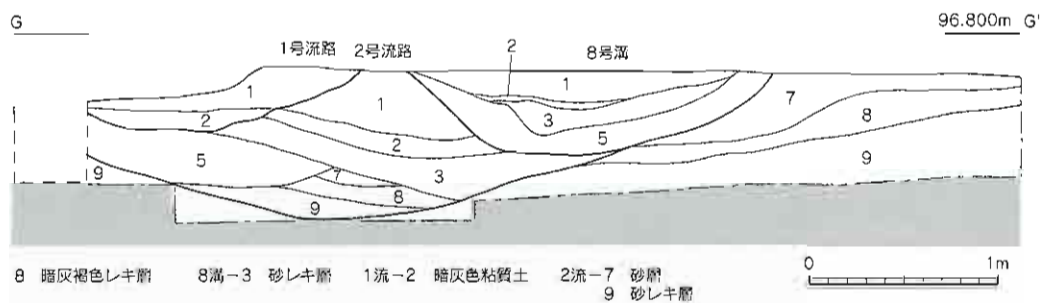
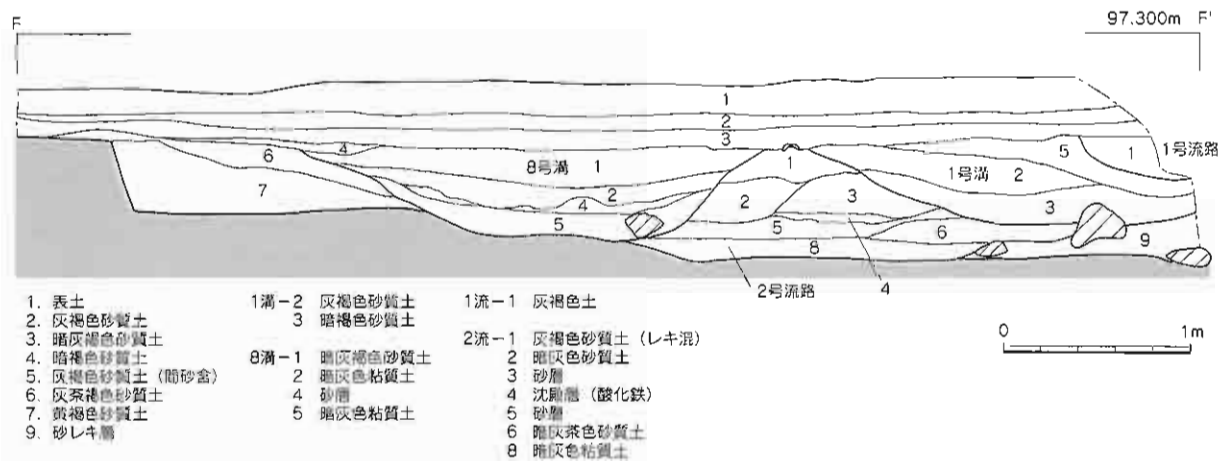
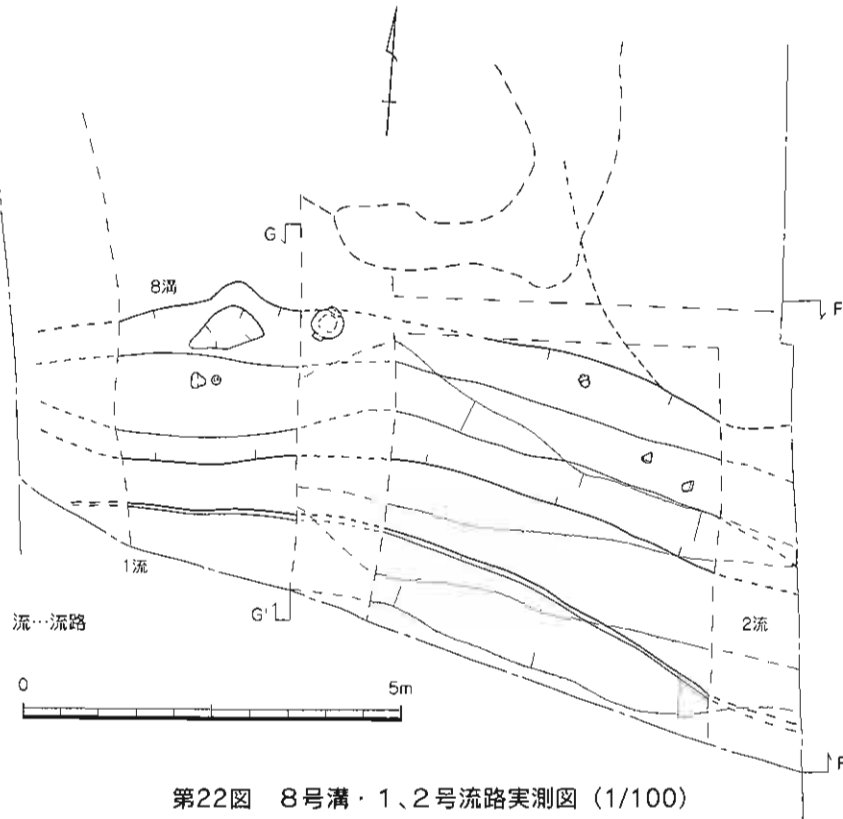


- 1. 淡灰褐色粘質土
- 2. 淡灰茶色粘質土
- 3. 暗灰褐色粘質土
- 4. 暗灰茶色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. マンガン粒沈殿層
- 7. 暗灰色粘質土
- 8. 灰茶色粘質土
- 9. 淡灰茶色粘質土 (土器含む)
- 10. 淡青灰色粘質土
- 11. 灰褐色粘質土
- 12. 灰茶褐色粘質土 (レキ混)

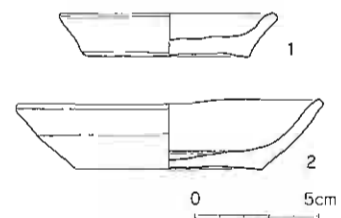
第20図 7号溝土層断面図 (1/40)



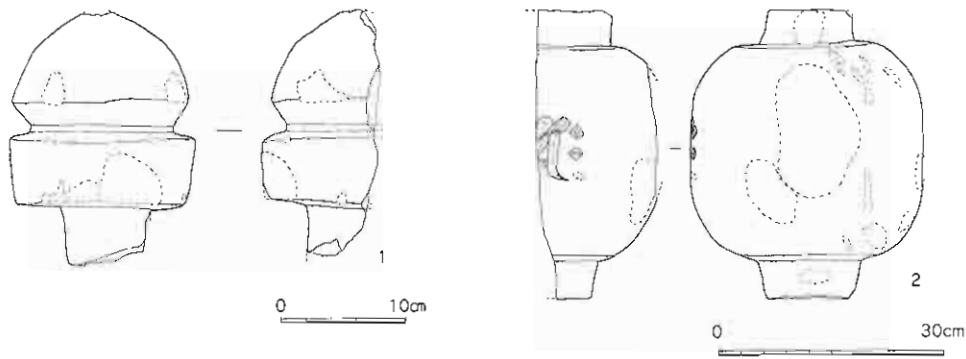
第21図 7号溝出土遺物実測図 (1、2は1/3. 3は1/4)



溝は調査区の端で検出されたため、全容はわかりにくい
が、調査区西側へ伸びていると考えられる。出土遺物は
弥生土器が出土した。



第25図 8号溝出土遺物実測図・土器 (1/3)



第26図 8号溝出土遺物実測図・石造物（1は1/6. 2は1/10）

出土遺物（第21図1～3）

1～3はすべて弥生土器である。1は甕の底部である。外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施されている。2は甑の底部である。下部外面にはハケ目調整が施されているほか、内面底部には穿孔近くに指頭圧痕が残る。3は器台である。外面は全体にハケ目調整が施され、口縁部の内面には横方向のハケ目調整が残る。また、内面の頸部から胴部にかけて指ナデの痕跡も残る。

8号溝（第22・23・24図）

調査区中央を東西方向に検出されたが、調査区内での確認長は約10.3mで、最大幅2m、深さは約50cmを測る。溝は調査区の東西へ伸びていると考えられ、調査区東側の残丘裾部をめぐるということが想定される。平面では確認することができなかったが、調査区東壁面での土層図を見ると、8号溝の南側に上下2層の（2流－1層、2層）の堆積があるが、8号溝の第1層及び第2層と非常に堆積土が似ているため、同方向に同様な溝が走っていた可能性が考えられる。8号溝からは土師質土器のほか五輪塔の一部が出土した。

出土遺物／土器（第25図）

1、2は土師質土器の坏である。1は底部から口縁部にかけて、やや内湾気味に外反し、端部は肥厚し丸く収まる。外底部には糸切り痕と板状圧痕が残る。2は胴部から緩やかに外反し、端部は外へ丸く収まる。外底部には糸切り痕と板状圧痕が残る。

出土遺物／石造物（第26図）

1、2は五輪塔の一部で、いずれも凝灰岩製である。1は宝珠部でほぼ半分に割れている。2は水輪部であるが高い位置から落ちてきたのか、大きく2つに割れているほか細かな傷が多く見受けられる。胴部中央に彫り込まれた種子は勢至菩薩を表す「サク」と思われる。また、この2点のほかに細かく砕け散った凝灰岩の破片が多く出土している。

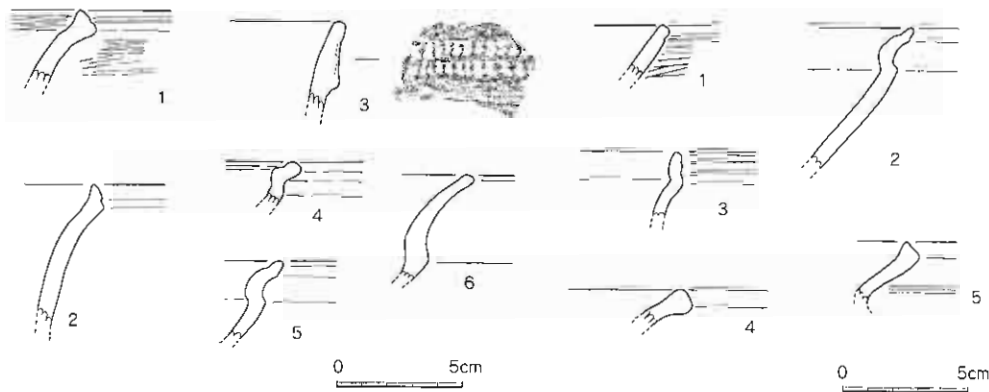
5. 流路

1号流路（第22・23・24図）

調査区中央を東西方向に検出されたが、調査区内での確認長約10mで、幅は遺存部で1.5m、深さは20cmを測る。2号流路を切っているほか、平面では確認できなかったが、東壁土層より1号溝を切っていることがわかった。出土遺物はなかった。

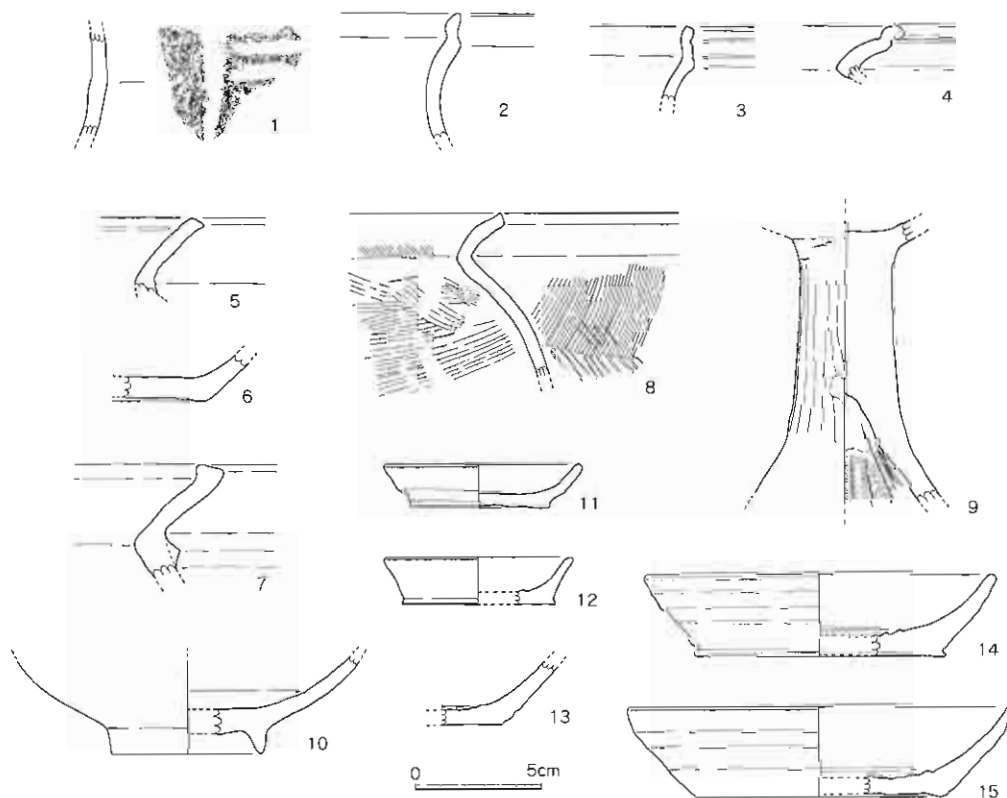
2号流路（第22・23・24図）

調査区中央を東西方向に検出されたが、調査区内での確認長約7mで、最大幅は2.5m、深さは



第27図 その他の遺物実測図(1) 竪穴住居跡、溝出土 (1/3)

第28図 その他の遺物実測図(2) 柱穴出土 (1/3)



第29図 その他の遺物実測図(3) 包含層、一括出土 (1/3)

20cmを測る。1号溝、8号溝に切られている。出土遺物はなかった。

6. その他の遺物 (第25~27図)

(1) 1~6は竪穴住居跡及び溝出土のもので、全て縄文土器である。1は甕で、口縁部は外反しながら端部でわずかに内向している。外端部には1条の沈線を持ち、貝殻条痕が残る。2は深鉢で、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部はわずかに内向する。全体に磨耗が激しいが端部に沈線が入っていたと思われる。3は深鉢である。口縁部は2条の刺突文がある。南福寺~出水式の範疇と思われる。4~6は浅鉢である。4は口縁部下より内湾しながら外反し口唇部で肥厚する。5は肩部から口縁部にかけて凹線が入る。6は鉢で肩部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。(2) 1~5は柱穴出土の遺物で、1~3は縄文土器である。1はP5から出土した浅鉢で、口縁端部下に沈線が1条入る。端部は丸く収まる。2はP6から出土した浅鉢で、肩部から口縁部にかけて凹線

が入る。3はP7から出土した深鉢で、口縁部には2条沈線が入る。4、5は弥生土器である。4はP8から出土した甕の口縁部で外へ向かって肥厚している。5はP9から出土した甕である。口縁部は外反しながら内向し端部をつまみあげる。

次の(3)1～15はトレンチ掘下げ作業や遺構検出時に出土したものである。1～4は縄文土器で、1は後期の鉢と思われる。縦横に沈線文様をもつ。2は深鉢で頸部は緩やかに内湾し口縁部はわずかに内向する。3は深鉢で口縁部に2条沈線が入る。4は浅鉢の口縁部で端部下に沈線をもつ。5～9は弥生土器である。5は甕の口縁部で端部は外につまみ出す。6は甕の底部である。7は甕の口縁部で端部は内側につまみあげ、頸部には突帯がつく。8は甕で内外面はハケ目調整が残る。後期終末頃の所産か。9は高坏の脚部である。10は青磁碗の底部で、高台は厚くケズリだしている。11～15は土師質土器の坏で、底部糸きりで回転ナデ調整である。11、15は底部に板状圧痕が残り、また13～15は内面底部に渦状ナデの痕跡が残る。

第4節 小 結

今回の調査では、縄文時代から近世に至る時期の遺構・遺物が発見され、竪穴住居跡1軒、竪穴遺構2基、土坑4基、溝8条、流路2条が検出された。

本遺跡の生活痕跡は縄文時代後期に属する土器が多数出土していることから、当該期まで遡ることがわかる。調査では遺構は確認されていないが、近くには後期に属する葛原遺跡などが存在するほか、この同路線内で調査された川原田遺跡や大行事遺跡などからも同時期の遺物が確認されていることから、周辺には集落があったと思われる。また弥生時代に入ると中期の丹塗土器が1号土坑や包含層から出土していることから、祭祀関連遺構が存在していた可能性があり、1号竪穴住居跡はこの時期に属する円形住と考えている。また、2号溝や7号溝より弥生時代後期及び終末頃の遺物が出土しているが、この時期の居住遺構は確認することが出来なかった。このほか、古墳時代から古代に属する遺構は確認されなかったが、須恵器の甕などが出土しており、先述の川原田遺跡や大行事遺跡より6世紀及び8世紀代の遺構、遺物が確認されていることから、それらの時期に収まる遺物と思われる。そのほか、13世紀頃の青磁碗が数点確認されているが遺構は見つかっておらず、その後の明確な時期を示す資料は8号溝の時期まで見つかっていない。8号溝では土師質土器と五輪塔の一部が出土しており、土師質土器の特徴から溝の埋没時期は15世紀後半～16世紀代と考えられる^(註1)。また、五輪塔が出土した地点のすぐ側には北から伸びる残丘があり、溝に近い南側先端部には現在もなお五輪塔が並んでいる。8号溝には呈示した資料のほかに、同じ凝灰岩の破片が出土していた点から、何らかの作用により残丘頂上より溝へ転じたのではないかと考えられる。この五輪塔が所在する場所は^(註2)磐戸樂の行われる場所として、現在でも一部利用されていることと何か関係があるのではないだろうか。磐戸樂の開始時期については、地元に残る史料（日野文書）により天文20年（1551）にはすでに始まっていたとされるが、現段階では溝の時期まで遡る史料は見つかっていない。

近世以降は、小石原系陶器の插鉢が出土した1号溝が検出されている。他に遺物の出土がなかったため、溝の時期を特定するまでには至らなかったが、注目されるのは、溝の一部に砂利が填圧された状況がみられたことである。（図版3-②）検出された部分（段のつく掘り方）については、約10mの間で北から南へわずかに傾斜が7～8cm程しかなく、このことは水利以外の利用方法があったのではないかと考えられるが、今後類例を待って検討したい。

また、5号溝は検出面も浅く、遺物の出土もなかったが、現水田のラインと符号することからみて、近世以前に遡ることはないものと思われる。

以上、主な調査成果として、本遺跡が弥生時代の中期及び後期においてすでに集落が形成されていたことがわかり、調査区の南側に位置する佐寺原遺跡でも同様な時期の集落が見つかっている事実と合わせて考え、当時の集落の広がりを理解するという点で貴重な資料である。

また、後期末頃の時期と考えられる7号溝は断面がV字形を呈している。しかしながら、溝の一部分のみの調査であったため、遺構の全体を知ることができなかった。1号住居、1号土坑、1号竪穴が溝の東側にあるのに対し、この溝は西側に傾斜していることから、溝の西側にも集落が存在した可能性も考えられるが、今後の調査を待つて検討を行うこととする。

この他、中世後期に属する8号溝と現代に受け継がれている地域の伝統的な祭事が同時期に存在していた可能性が示唆され、これまで文献史料では知る事の出来なかった地域の人々の生活と祭事がどのように密着していたのか、また、溝内から出土した五輪塔と隣接地に今も残る五輪塔の存在やこの地が如何にして祭事の場として選択されてきたのかを理解する上で、今回の成果が一つの資料となれば幸いである。

(註1) 同時期の土師質土器は、市内の慈眼山遺跡(A地区)や上ノ馬場遺跡などから出土している。

(註2) 磐戸楽…大分県指定無形民俗文化財/通称かっぱ踊り

文献史料…天文20年の石松村日野和泉守入道善慶が書き残した「岩戸楽事実並秘曲」一巻が伝わる。

※故中島市三郎氏の研究によれば、磐戸楽は古来の田楽につながり、11世紀後半、日田郡司大蔵永季が相模の節会の際に京都から持ち帰り、大行事八幡宮に奉納したのではないかとしている。

【参考文献】

『平成6～11年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996～2001

『川原田遺跡』日田市教育委員会 2001

『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』大分県教育委員会 1998

『慈眼山遺跡(A地区)』大分県教育委員会 1991

『上ノ馬場遺跡』日田市教育委員会 2000

第2表 内ノ下遺跡出土土器観察表

※表中には略記号を用いる。

出土位置 際…際穴遺構 土…土坑 種別 縄文…縄文土器 弥生…弥生土器 土師質…土師質土器

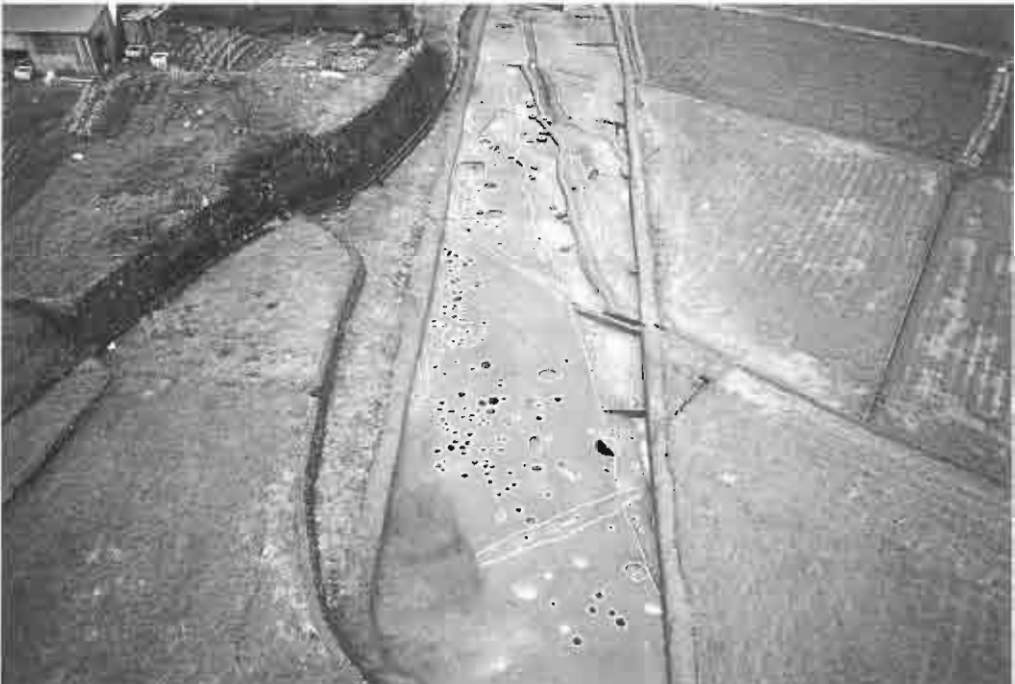
器種 袋状…袋状口縁甕 胎土 a…石英 b…長石 c…角閃石 d…雲母 e…赤色粒子 f…黒色粒子 g…白色粒子

溝	番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	重量(g)	土質				胎土	色	備
									a	b	c	d			
9	1	1号	弥生	高杯	-	-	-	-	ミガキ・丹摩	-	-	-	-	黒	丹摩
	1	1上	弥生	鉢	-	-	-	-	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	黒	丹摩
	2	1下	弥生	鉢	-	-	-	-	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	黒	丹摩
	3	1	弥生	高杯	-	-	-	-	c.e.g	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	黒	丹摩
19	1	2号	弥生	高杯	-	-	-	-	ハケ・ナデ・ツス(高杯)	ナデカ	ナデカ	ナデカ	ナデカ	黒	丹摩
	2	2号	弥生	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	3	2号	弥生	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	4	2号	弥生	高杯	-	-	-	-	a.b.c.e	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
21	1	7号	弥生	高杯	-	-	-	-	ハケ・ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	2	7号	弥生	高杯	-	-	-	-	ハケ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	3	7号	弥生	高杯	-	-	-	-	ハケ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	4	7号	弥生	高杯	-	-	-	-	ハケ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
25	1	8号	縄文	高杯	7.8	6.6	1.7	系群リ、黒色胎土	-	-	-	-	-	黒	丹摩
	2	8号	縄文	高杯	12.0	7.4	2.8	黒色胎土	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	1	1号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	2	1号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
27	1	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	2	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	3	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	4	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	5	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	6	2号	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
28	1	P5	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	2	P6	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	3	P7	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	4	P8	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	5	P9	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
29	1	トレンチ一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	2	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	3	トレンチ一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	4	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	5	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	6	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	7	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	8	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	9	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	10	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	11	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	12	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	13	包古拵一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	14	トレンチ一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩
	15	トレンチ一拵	縄文	高杯	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒	丹摩

内ノ下遺跡写真図版

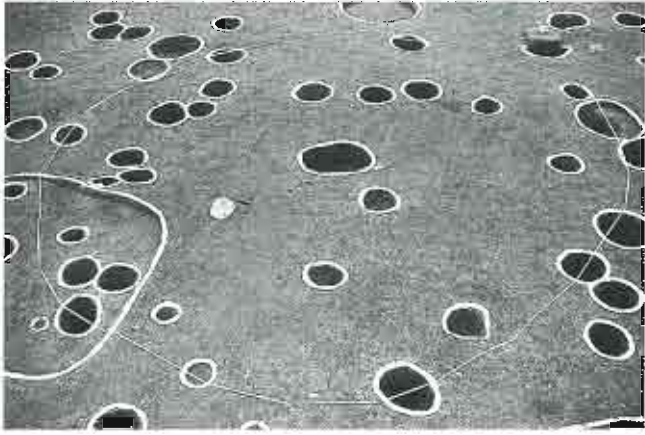


① 遺跡全景



② 遺跡近景

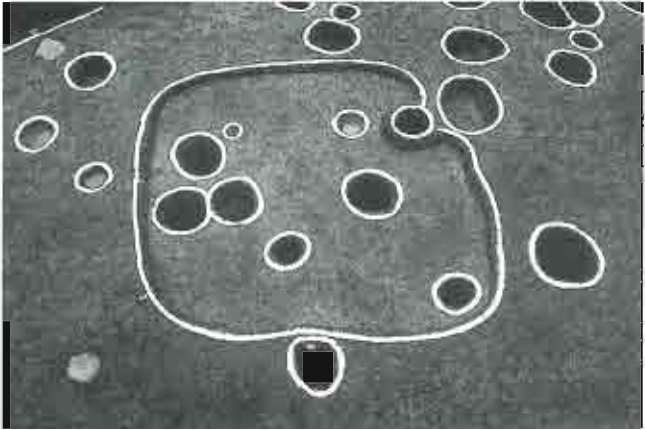
図版2



① 1号竪穴住居跡 (東から)



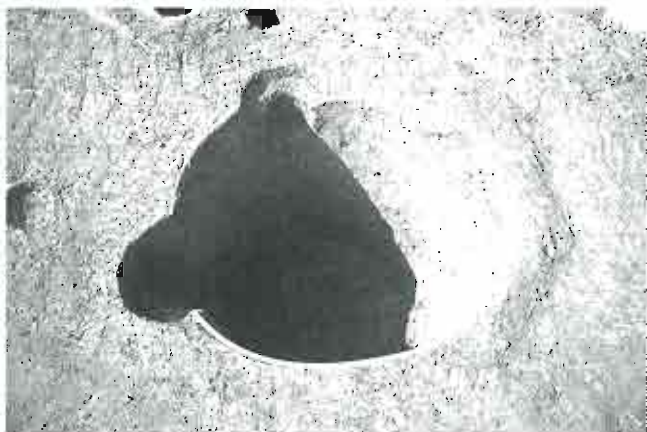
② 1号竪穴遺構 (西から)



③ 2号竪穴遺構 (西から)



④ 1号土坑 (東から)



⑤ 2号土坑完掘 (西から)



⑥ 4号土坑完掘 (北から)



① 1号溝完掘 (南から)



② 1号溝土層断面 (南から)



③ 2号溝完掘 (北から)



④ 2号溝完掘 (南から)



⑤ 3、5号溝完掘 (北から)



⑥ 4号溝完掘 (西から)

図版4



① 7号溝 (北から)



② 7号溝完堀 (北から)



③ 7号溝土層断面 (南から)



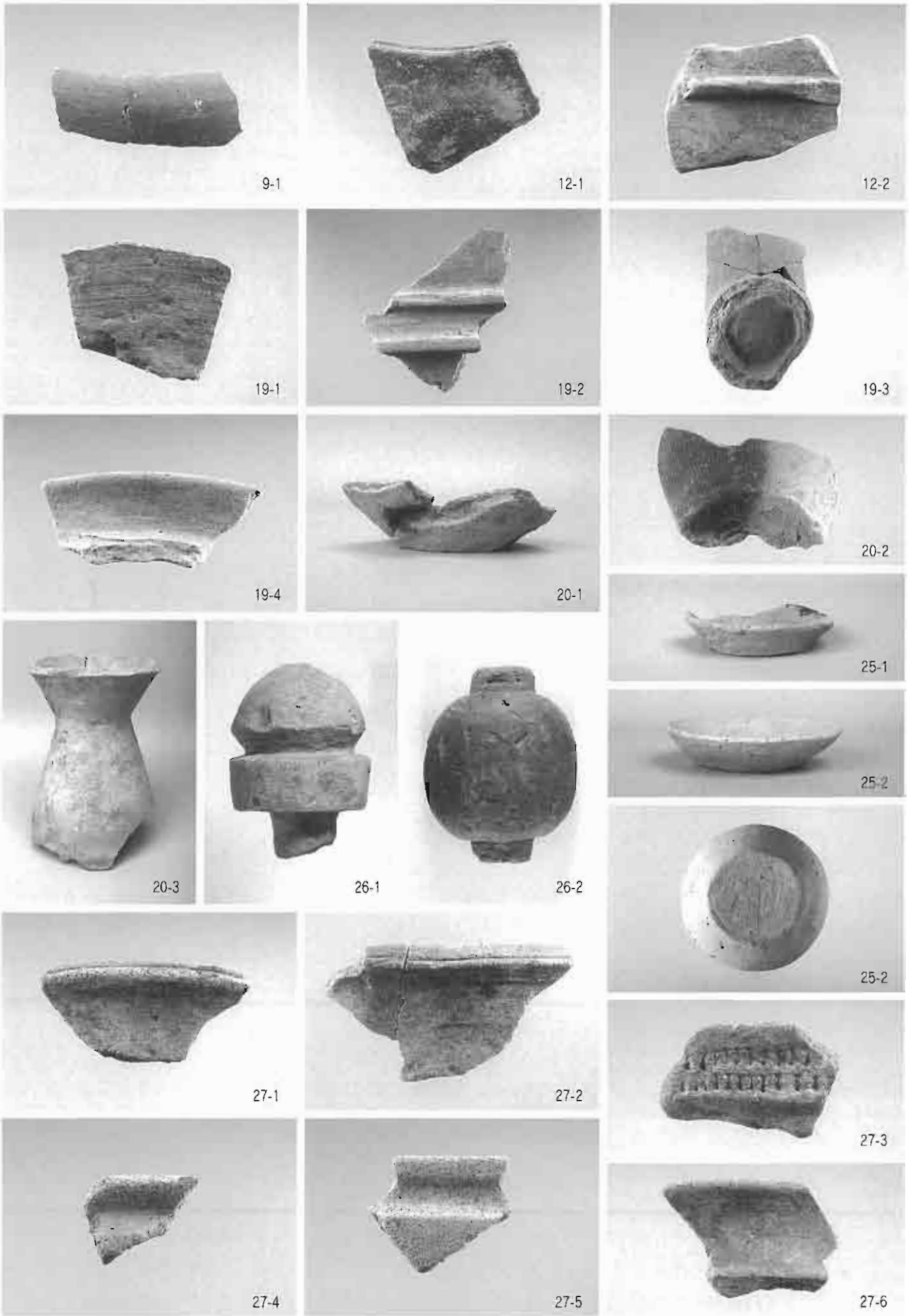
④ 8号溝、1号流路 (西から)



⑤ 8号溝土層断面 (西から)



⑥ 2号流路 (東から)



※遺物の番号は全て挿図番号と一致する（第1図の1は1-1と標記する。）

図版6



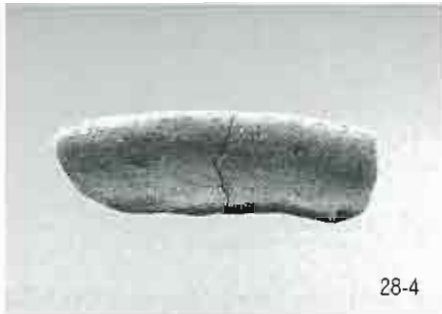
28-1



28-2



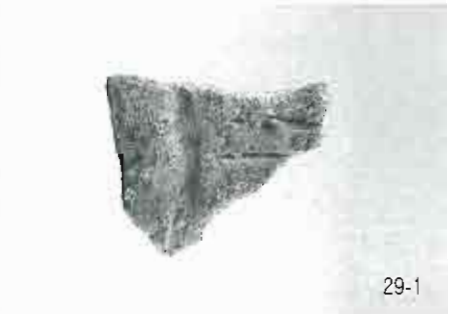
28-3



28-4



28-5



29-1



29-2



29-4



29-5



29-7



29-8



29-9



29-10



29-11



29-12



29-14



29-15

※遺物の番号は全て挿図番号と一致する

大行事遺跡



大行事遺跡全景

第IV章 大行事遺跡

第1節 遺跡の概要

大行事遺跡は石松川と蕪谷川とに挟まれた標高131.5mの独立丘陵の先端部北東側斜面に位置する。調査区は狭い谷地で、標高は105.5～110mを測り、南側には有田川によって形成された沖積地、西側には蕪谷川によって形成された狭い谷地が展開している。調査以前の現況は杉林で、その前は畑地であったと考えられる。地形的には南西側の斜面から北東側にむかって緩やかな傾斜をなし、調査区内の標高105.5m部分で傾斜を変えて反対側の斜面へと緩やかに上る谷地形を形成する。

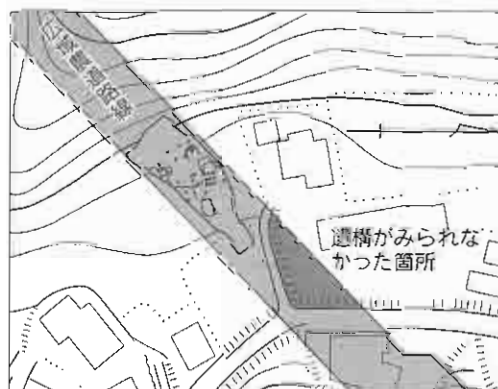
調査区の位置する丘陵は有田川を見下ろす好所に位置しており、丘陵頂部には中世日田を治めた群老の一人である石松氏の居城跡があったと伝えられており、この丘陵の先端部には五輪塔などの中世の史跡が見られる。また、この丘陵斜面を巡って大行事横穴墓群が形成されていることが確認されている。対岸の佐寺原台地周辺には佐寺原横穴墓群、夕田横穴墓群、水目横穴墓群、花月川を挟んだ対岸の山田原台地周辺には羽田横穴墓群が展開していることから、有田川と花月川の合流点であるこの周辺部一帯には横穴墓群が展開していたものと考えられる。

第2節 調査の概要

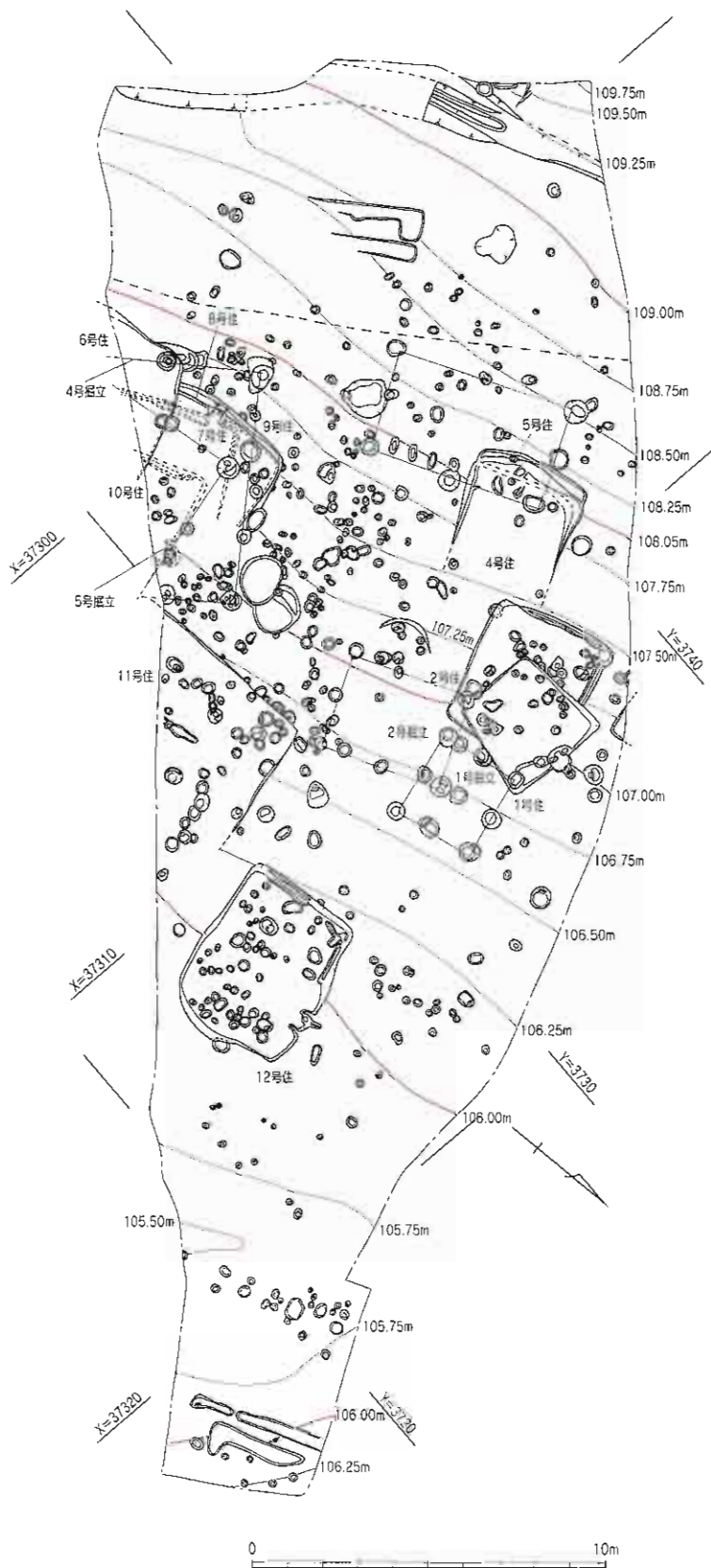
調査は、事前に行った試掘調査の結果を踏まえて丘陵の裾部から里道を挟んで現況の道路までの範囲を調査対象地として設定し、平成12年8月28日から機械による遺構検出を開始した。しかし、里道を挟んだ現況道路までの箇所は既に造成されており、遺構は確認されなかった。そこで、調査位置を里道から丘陵裾部までの450㎡に絞ることにし、表土除去作業を開始した。地山が暗赤褐色ローム土であったため、遺構検出は比較的容易に行えたものの、南東側に遺構の密集が見られたことから、その切り合い関係の検出に時間を要し、また、調査区内が谷になっており、周辺から多量の水が流れ込んでくるため水出し作業に追われた。10月6日には里道の一部に遺構の残存する可能性があるため、仮設道の建設を待って里道部分の一部の表土除去作業を行いこれによって調査区域を確定させた。その後、調査は順調に進み、11月13日に空中写真撮影を行い、すべての実測作業を完了し、11月20日にすべての機材を撤収して調査を完了した。

第3節 遺構と遺物 (第31図)

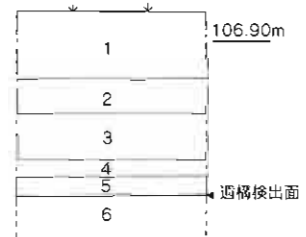
第32図は基本土層図である。第6層黄褐色ロームを掘り込んで遺構が検出された。この層の下部には赤褐色ローム層があり、さらにその下には凝灰岩の風化土層が堆積している。第6層上面には遺構の埋土であると考えられる淡暗褐色土(第5層)が堆積しており、その上に淡褐色土(第4層)、黒褐色土(第3層)、淡暗褐色土(第2層)が堆積し、これらは古墳～古代の土器を含む包含層であった。調査区から検出された遺構は、竪穴住居跡12軒、掘立柱建物5棟、柱穴多数である。それらの埋土は殆どが淡暗褐色土(第5層)であると考えられた。以下それぞれについて説明を加える。



第30図 大行事遺跡調査区位置図 (1/2000)



第31図 大行事遺跡全体図 (1/200)

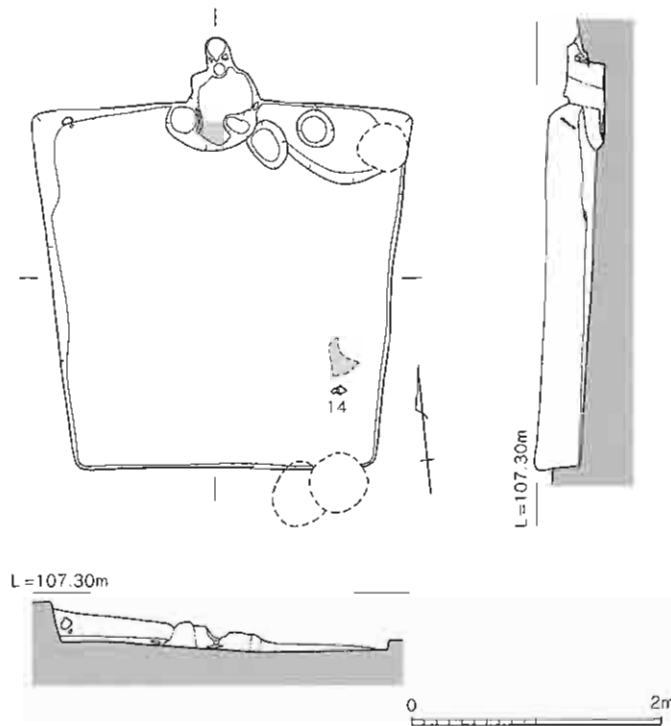


第32図 基本土層図 (1/40)

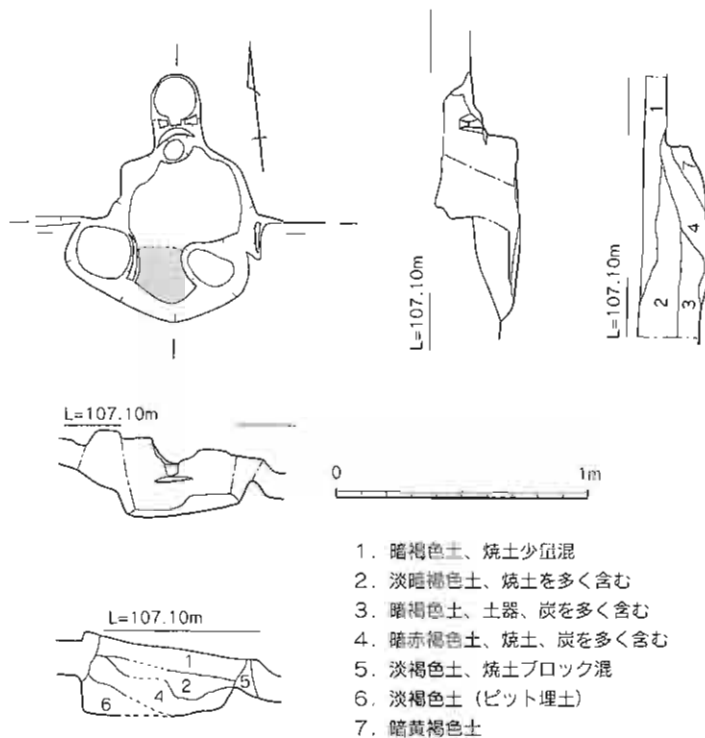
1. 淡黄褐色土 (表土)
2. 淡暗褐色土、土器、炭を含む
3. 黒褐色土、土器、炭を含む
4. 淡褐色土、土器を含む
5. 暗褐色土、土器を少量含む
6. 黄褐色土 (地山)



写真4 基本土層



第33図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第34図 1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

1. 暗褐色土、焼土少混
2. 淡暗褐色土、焼土を多く含む
3. 暗褐色土、土器、炭を多く含む
4. 暗赤褐色土、焼土、炭を多く含む
5. 淡褐色土、焼土ブロック混
6. 淡褐色土 (ピット埋土)
7. 暗黄褐色土

が内側に付き、7、8はやや外側に高台が付く。9、10は須恵器皿である。10はやや底部が丸みを帯び、口縁部の立ち上がり不明瞭である。11は土師器の高台付の坏である。12、13は土師器甕の破片である。14は土師器把手で、住居跡南東側より出土した。

1. 竪穴住居跡

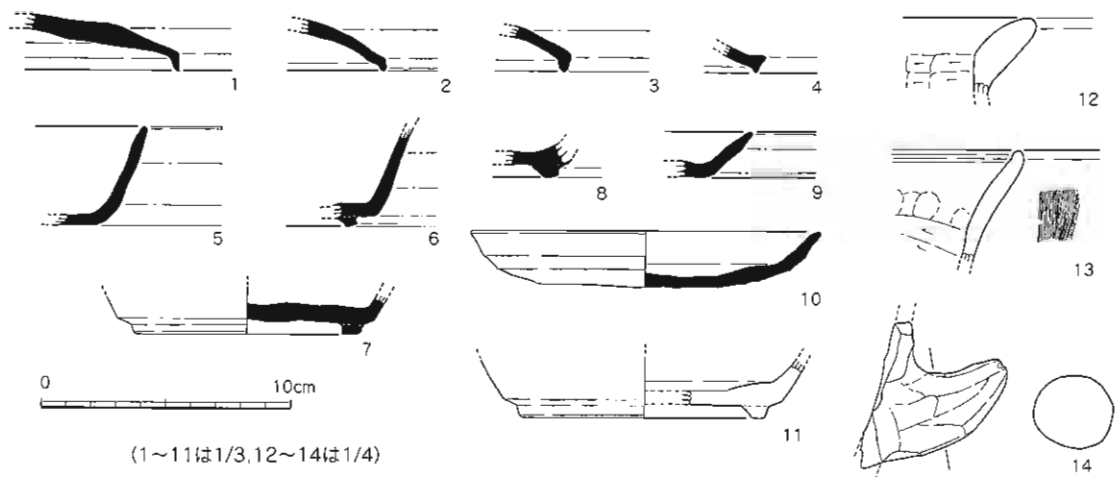
1号竪穴住居跡 (第33図、図版8)

調査区北東側で検出され、東側は削平を受けている。1号掘立柱建物に切れ、2号掘立柱建物、2号竪穴住居跡を切る。確認面での規模は南西方向で約3.0m、南北方向で約2.9m、床面までの深さ約33cmを測り、西側がややすぼまる正方形プランを呈する。支柱穴は確認されなかった。

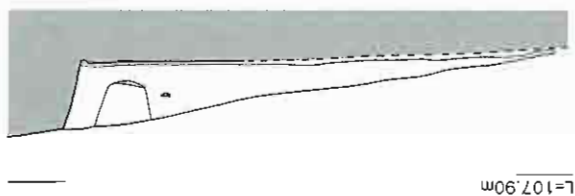
カマドは北壁中央に付設されており、住居跡の外に張り出す形で作りつけられている。床面を窪ませており、床面、壁面は被熱により赤褐色に変色し、硬化していた。カマド埋土を確認すると、火床面上層に大量の焼土、炭を含み約10cmの厚さで堆積していた第4層が天井部の崩落壁と考えられ、使用后すぐに廃棄されたものと思われる。カマド両側にはピット状の落ち込みが見られ、袖石の抜き取りとも考えられる。カマド西側には屋内土坑が付設されており、深さ約10cmを測る。また、住居跡西側には床面の一部に火床面と考えられる焼土の飛散が見られ、あるいはカマドの作り替えの可能性が考えられる。

出土遺物 (第35図、図版12)

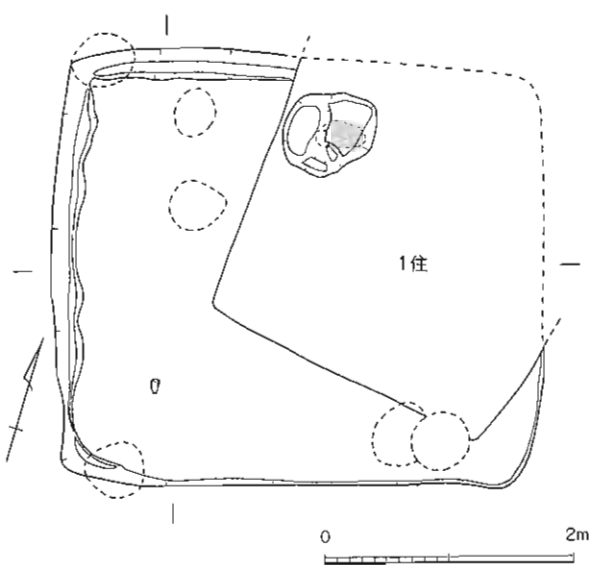
1から4は須恵器坏蓋である。1は嘴状の口縁部を呈し口縁端部を内側に折り曲げる。2~4は口縁部断面が三角形を呈している。5~8は須恵器坏である。このうち6~8は高台付の坏である。6はやや高台



第35図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3.1/4)



L=107.90m



第36図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

2号竪穴住居跡

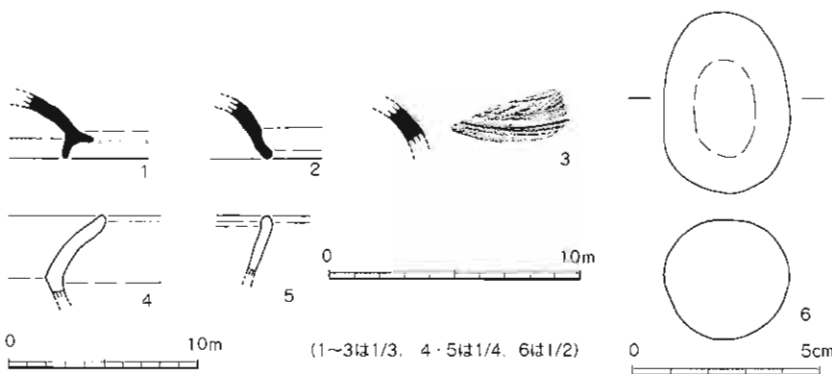
(第36図、図版8)

調査区の北東側で検出した住居跡である。1号掘立柱建物、1号竪穴住居跡、2号掘立柱建物に切られる。1号竪穴住居跡に切られるため正確な規模は不明であるが、確認面での規模は南北方向で3.5m、東西方向で3.9m、床面までの深さ約53cmを測り、長方形を呈する。住居跡の北と東側には周溝が巡らされる。主柱穴は確認されなかった。

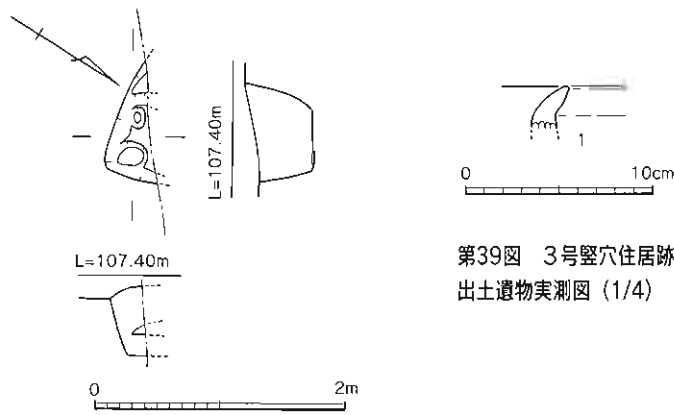
カマドは住居跡の北壁中央に付設されており、1号竪穴住居跡の貼床下部に浅い落ち込みが検出された。一部赤褐色に変色した火床面が確認されたことから、これをカマドと判断した。1号竪穴住居跡の構築の際に破壊を受けていたものと考えられる。

出土遺物 (第37図、図版12)

1、2は須恵器坏蓋である。1に関してはあるいは坏身の可能性も考えられる。3は甗であ



第37図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3.1/4)

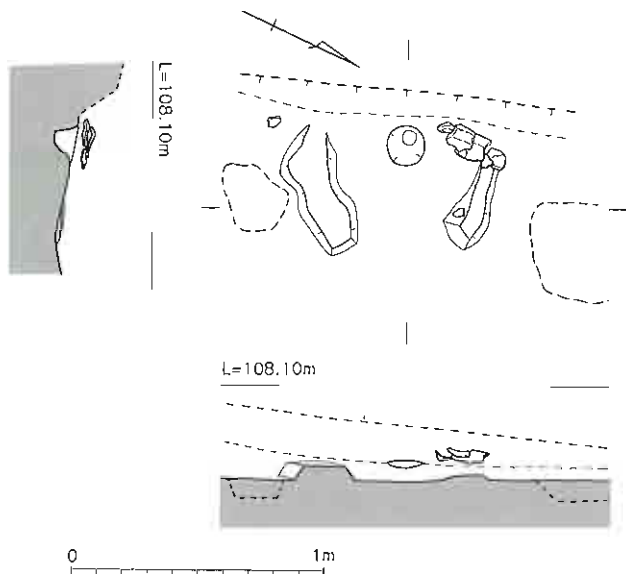


第39図 3号竪穴住居跡
出土遺物実測図 (1/4)

第38図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第40図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第41図 4号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

る。体部外面に沈線を巡らせ、その間に刺突文が施される。4、5は甕の口縁である。4は頸部で屈曲し、口縁部はやや外反する。5は口縁端部をやや内湾させる。6は投弾で、長さ4.8cm、幅3.4cm、厚さ約3.1cm、安山岩製である。

3号竪穴住居跡 (第38図、図版8)

調査区中央北側で検出された住居跡である。大部分が調査区外にかかっているため詳細は不明である。床面までの深さ約54cmを測る。

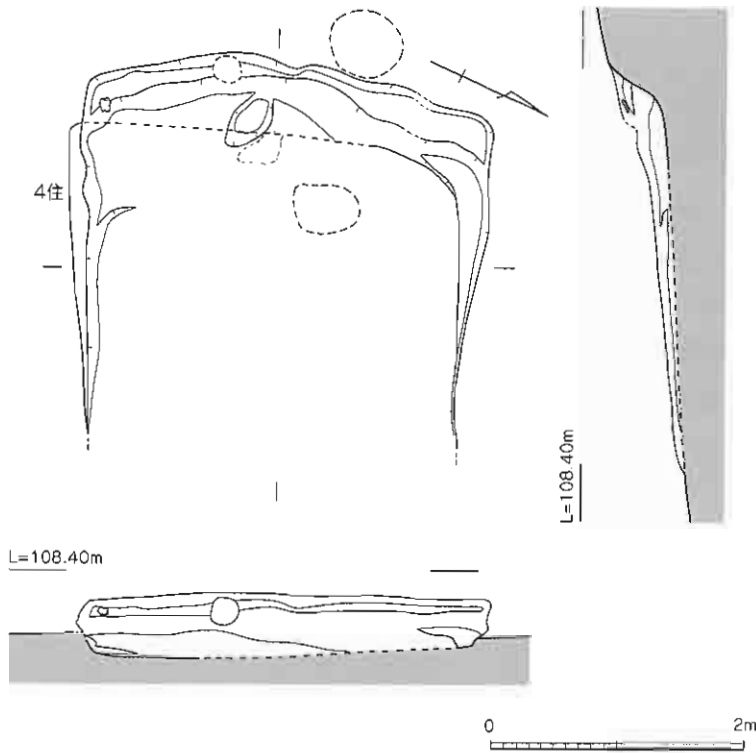
出土遺物 (第39図、図版13)

土師器の甕の破片である。詳細な時期を決定するのは難しいが、小型の甕の口縁と考えられ、8世紀以降と思われる。

4号竪穴住居跡 (第40図、図版7)

調査区西側で検出され北東側は大きく削平を受けており、3号掘立柱建物に切られる。遺構検出当初、5号住居と殆ど重なって切りあっていたため、1軒の住居跡として掘り下げたが、床面まで検出した段階で、北西側に不明瞭な段が部分的に形成されていること、その段側に赤褐色の硬化面が広がっていたことから、住居跡がもう1軒存在すると判断した。そこで、カマドが一部残存している手前側を4号住居跡、4号に切られてカマドが殆ど残存していない住居跡を5号住居跡として報告する。確認面での規模は北東側が削平を受けているため明瞭ではないが、南北方向で約3.1m、床面までの深さ約36cmを測り、正方形を呈するものと考えられる。支柱穴は確認されなかった。

カマドは西壁のやや南よりに付設されており、上面は破壊されていたが、袖の一部のみ検出できた。袖間隔は約



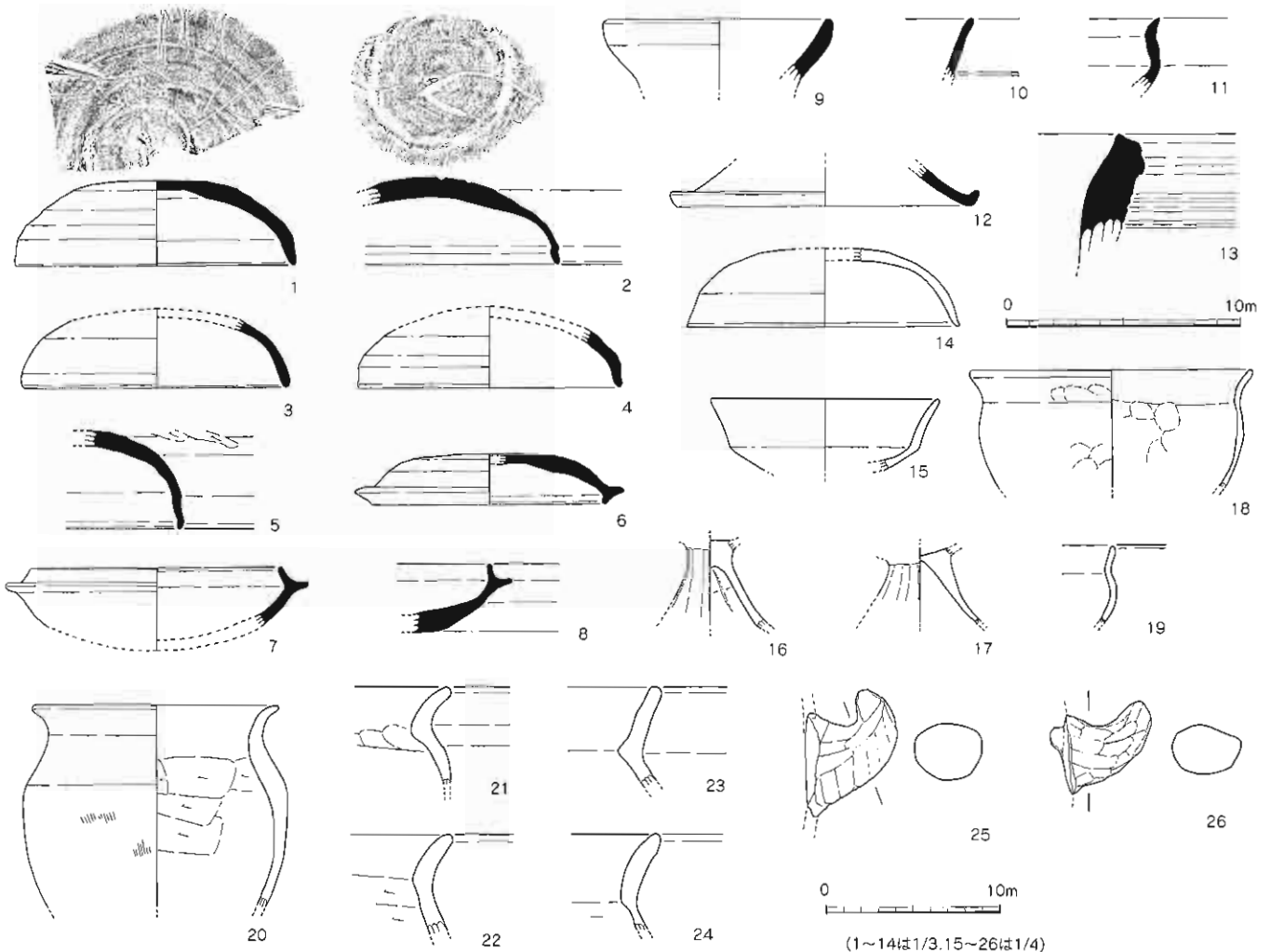
第42図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

60cmを測る。両袖の奥には支脚の抜き取り痕が見られたが、火床面は検出できず、僅かに焼土の飛散が確認される程度であった。このことから、この住居は長期間使用されなかったものと思われる。また、このカマド周辺には甕の破片が散乱していた。

出土遺物は5号住居跡と一括で取り上げており、どちらの所属が明確に区別することが出来ないため、5号住居跡の出土遺物とあわせて紹介する。

5号竪穴住居跡 (第42図、図版7)

調査区西側で検出され北東側は大きく削平を受けており、4号竪穴住居跡、3号掘立柱建物に切られる。



第43図 4・5号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

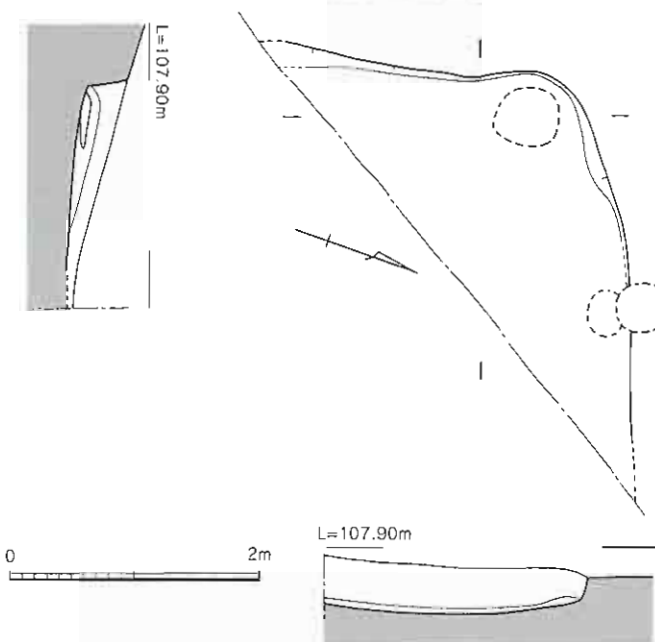
確認面での規模は北東側が削平を受けているため明瞭ではないが、南北方向で約3.3m、床面までの深さ約43cmを測り、正方形を呈するものと考えられる。支柱穴は確認されなかった。住居跡西側には段を持つ。

カマドは破壊されており、焼土の硬化面のみが住居跡西壁中央に確認された。

出土遺物 (第43図、図版13)

遺物の取り上げ段階で4、5号住居跡を一軒の住居と考えていたため一括して紹介する。1～13は須恵器、14～26は土師器である。

1～6は須恵器坏蓋である。1は外面にヘラ記号が施される。2は口縁部に段を持ち、やや外反させる。天井部にはヘラ記号が施される。3は天井部にかけて緩やかに屈曲し、4は口縁部付近で稜を持つ。5は体部から口縁部を垂直方向に屈曲させ、口唇部を内側にやや屈曲させる。天井部にかけて調整ヘラケズリの痕跡が見られる。6はかえりを持つが、かえりのつくりは甘く、受け部と口縁部に明瞭な段が見られない。7、8は須恵器坏身である。いずれも口縁部にかえりを持つ。7はやや口縁部が内側に入り、8はほぼ垂直方向に立ち上がる。9はやや厚く口縁部は内湾する。横瓶の口縁部か。10は甕の口縁部か。口縁部から頸部にかけて沈線が施される。11は口縁部を一旦屈曲させて立ち上げ、やや外反する。高杯か。12は高杯の脚である。端部をやや外側に折り曲げる。13は甕の口縁部である。口唇部はやや肥厚させ、口縁下部に沈線が施される。14は土師器坏蓋である。端部をやや外反させる。15～17は高杯である。15は高杯の坏部で、一旦稜を持って立ち上がり、口縁部は外反する。5号住居跡中央にて検出された。16、17は高杯の脚部である。内外ともにヘラケズリで、17はやや全体に外に開く。17は5号住居跡南西壁側から出土している。18、19は鉢である。18はカマド付近にて出土しており、内外に指頭圧痕が残り、19はやや小型の鉢である。20～24は甕である。20はカマドから出土しており、一旦頸部をすぼませてから緩やかに外反する。外面ハケ、内面ケズリ。21～24は頸部に一旦稜を持ち、緩やかに外反する。頸部は内面ケズリにより作出される。21はカマド付近から出土している。25、26は把手である。いずれもケズリにより作出される。26には接合部分が残存する。甕、あるいは甔と思われる。どちらも住居跡中央から出土している。



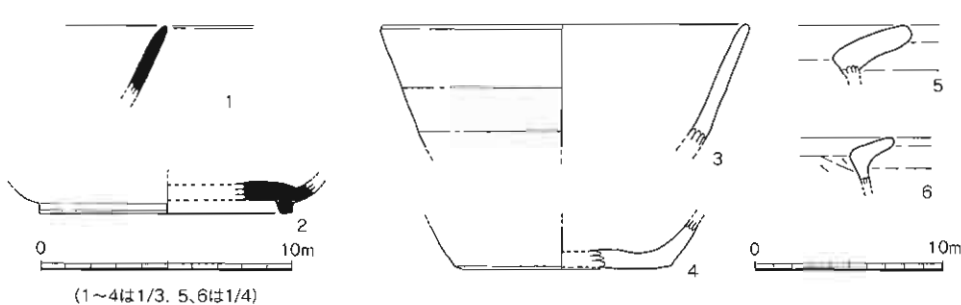
第44図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

6号竪穴住居跡 (第44図、図版9)

調査区南西で検出された住居跡で、7、8、9、10号住居跡を切り、4、5号掘立柱建物に切られる。住居跡の大半は調査区外にかかっているため、詳細は不明であるが、床面までの深さは約45cmを測り、ほぼ方形プランを呈するものと思われる。カマドは調査区外のいずれかの方向につけられていたものと考えられる。支柱穴は確認されなかった。

出土遺物 (第45図、図版14)

1は須恵器坏身の口縁部である。2は須恵器高台付の坏身である。3、4は土師器

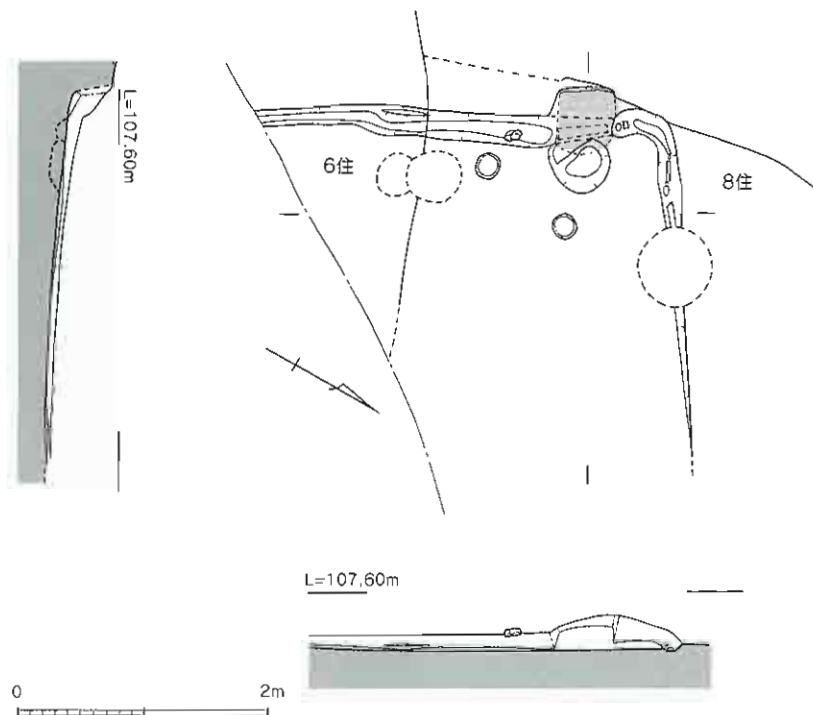


第45図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3.1/4)

坏身で、3はやや大きめの坏身で、4は高台のない坏身底部である。5、6は土師器甕の口縁部である。

7号竪穴住居跡

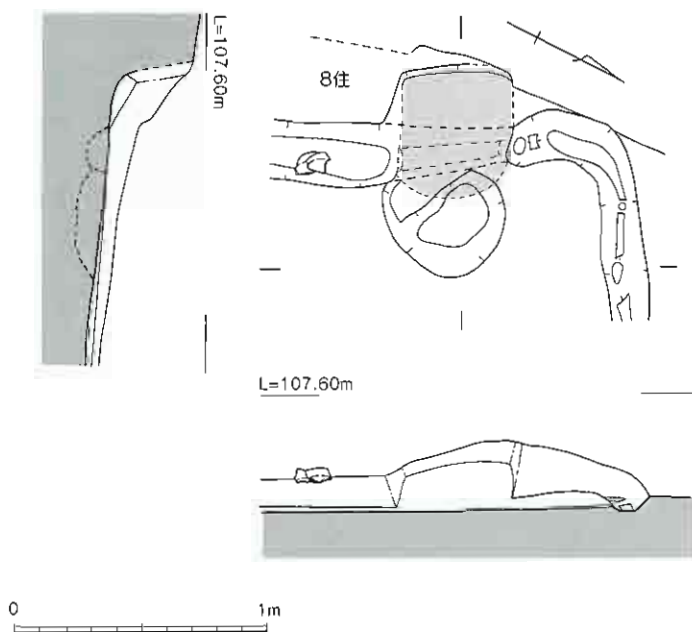
(第46図、図版9)



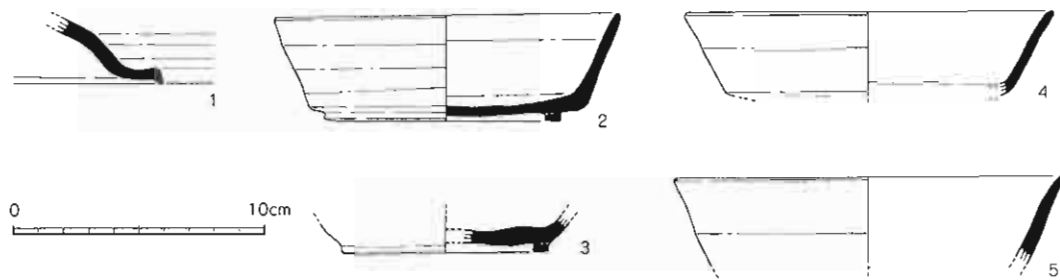
第46図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

調査区南西で検出された住居跡で、6、8、9号竪穴住居跡、4、5号掘立柱建物に切られ、10号竪穴住居跡を切る。調査区外に一部かかっており、北東側が削平を受けているため正確な規模は不明であるが、方形プランを呈するものと思われる。確認面からの規模は床面まで約12cmである。支柱穴は確認されなかったが、住居跡壁際には周溝が巡っており、特にカマド付近まで周溝は続いている。

カマドは住居跡北西隅に付設されており、8号住居跡のカマドと切りあっている。当初、このカマドは8号住居跡のカマド1つのみであると考えていたが、カマド内に浅い段がつき、赤褐色の被熱硬化面が7号住居床面まで続いていたことから、カマドが同一地点できりあい、8号住居跡のカマドが7号のカマドを切って破壊していると判断した。当初1つのカマドであると考えていたため8号の火床面を確認していないが、7号との段差は非常に浅かったため、おそらく7号と8号の火床面のレベル差は殆どないものと思われる。また、この7号住居のカマドの下部には土層で確認した結果(第47図)、周溝が巡っていることが確認



第47図 7号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)



第48図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

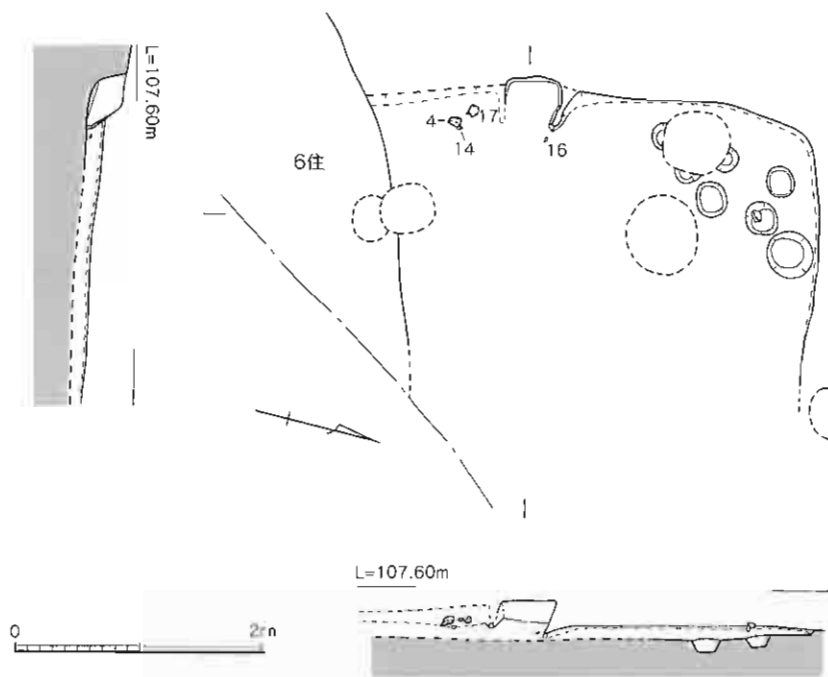
された。おそらく、当初カマドはこの位置とは別の方向に付設されていたが、作り直しにより、この位置に付設されたものと考えられる。その際に、周溝の一部を埋め、その上にカマドを作ったものと思われる。ただ周溝埋土の直上の火床面はそれほど硬化しておらず、第11層中に若干の硬化が確認されるのみであったことから、おそらく長期間の使用はされていないものと思われる。カマドの規模等の正確なプランは不明で、袖等は確認されなかった。

出土遺物 (第48図、図版14)

1は須恵器坏蓋で、口縁部付近で一旦水平方向に屈曲し、端部を下方につまみ出す。2、3は須恵器高台付の坏身である。2はカマド付近より出土した。高台はやや内側につけられている。3はやや緩やかに立ち上がる。4、5は須恵器坏身である。

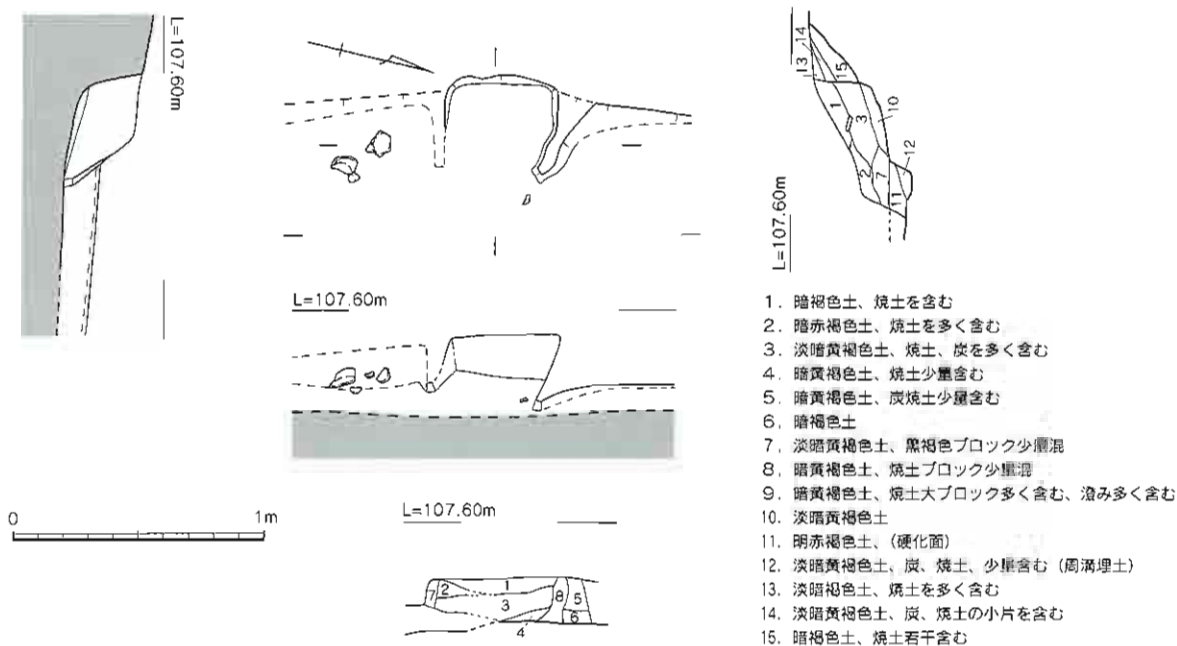
8号竪穴住居跡 (第49図、図版9)

調査区南西で検出された住居跡で、6号竪穴住居跡、4、5号掘立柱建物に切られ、6、7、9号竪穴住居跡を切る。6号竪穴住居跡に切られ、東側は削平を受けているため正確な規模は不明である。確認面での床面までの規模は約24cmを測り、方形をなすものと思われる。当初9号住居跡との正確な切り合いを把握することが出来ず、一部掘りすぎている部分がある。支柱穴等は確認されなかった。

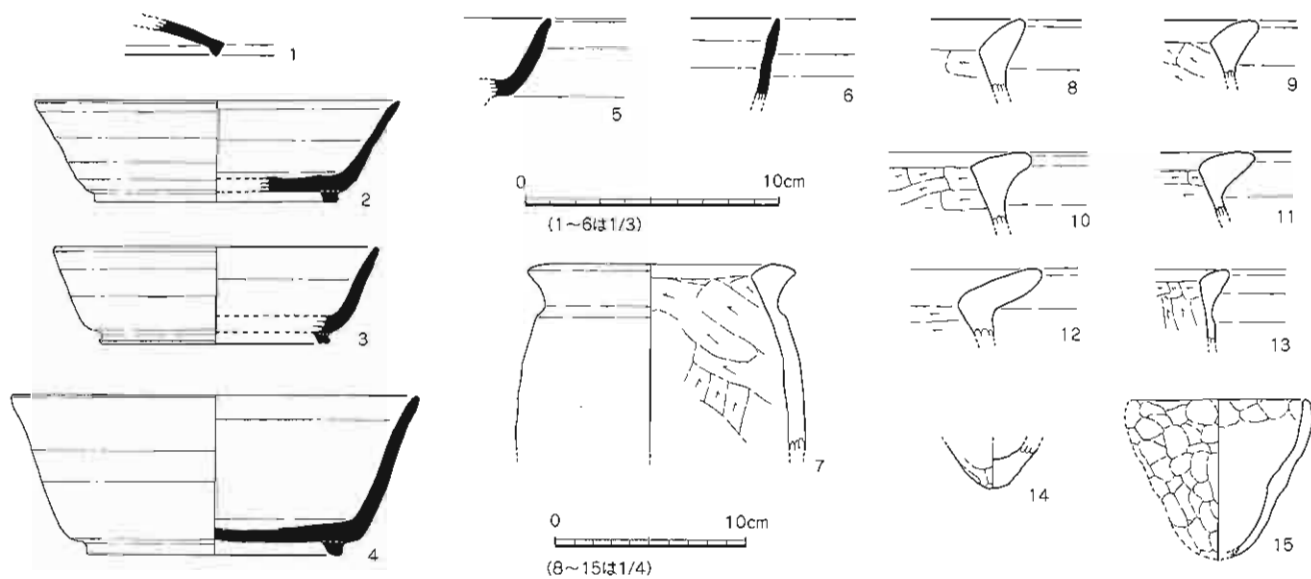


第49図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマドは西側壁中央に付設されており、7号住居跡のカマドと同じ箇所に行われている。火床面は7号住居跡の火床面と明瞭に区別することが出来なかったため、記録にとどめることが出来なかったが、おそらく第11層の上面に若干の硬化面が確認されることから、この面が8号住居跡の火床面と考えられる。両袖間の幅は約42cmを測る。支脚、袖石等は確認されなかった。しかし、カマドの左側周辺には袖石や天井石に使用されていたと考えられる凝灰岩の加



第50図 8号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

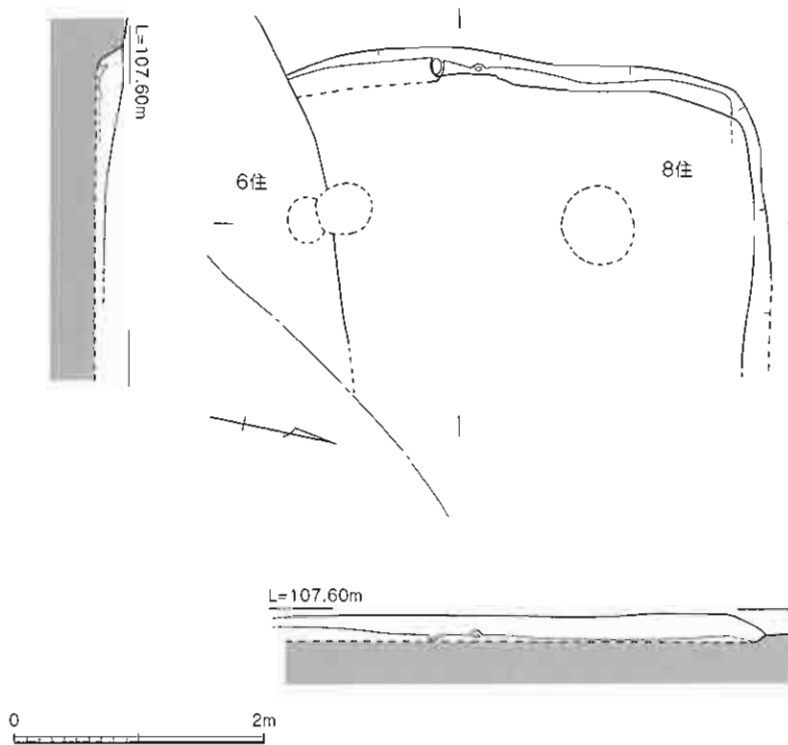


第51図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2.1/3.1/4)

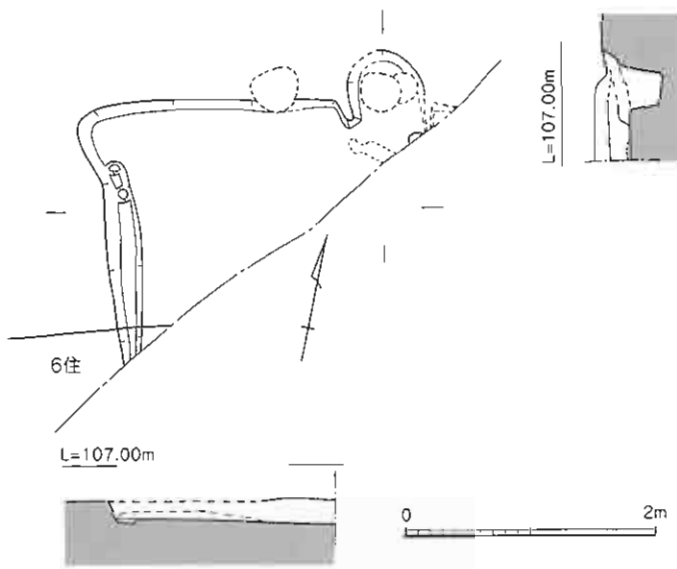
工石が散乱しており、あるいはこのカマドに使用されたものの可能性も考えられる。また、カマド左側周辺には土器が散乱していた。

出土遺物 (第51図、図版14、15)

1は須恵器蓋である。口縁部断面三角形を呈する。2～5は須恵器高台付の坏身である。2は口縁部をやや外に開き、3は緩やかに立ち上がる。4はカマド周辺から出土した。やや大型で、口縁部が若干外に開く。5は高台の接合部分が若干残存していることから、高台付の坏身と考えられる。6は平瓶等の口縁部か。7～13は土師器甕の口縁部である。7はカマド周辺より出土した。内面へラケズリで、外面には頸部に指ナデによる段がつく。8～11は頸部が厚くなり、胴部をケズリにより薄く作出する甕である。12は口縁部がやや



第52図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第53図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

外に伸びるタイプの甕である。13は小型の甕の口縁部である。14、15は手捏土器である。これらはカマドの周辺部から出土した。いずれも小型であり、外面に指頭圧痕が多く残存している。16はカマドの火床面直上から出土した刀子である。最大幅1.6cm、最大厚3.7mmを測る。17は刀子の基部破片である。最大は2.4cm、最大厚5mmを測る。

9号竪穴住居跡 (第52図、図版9)

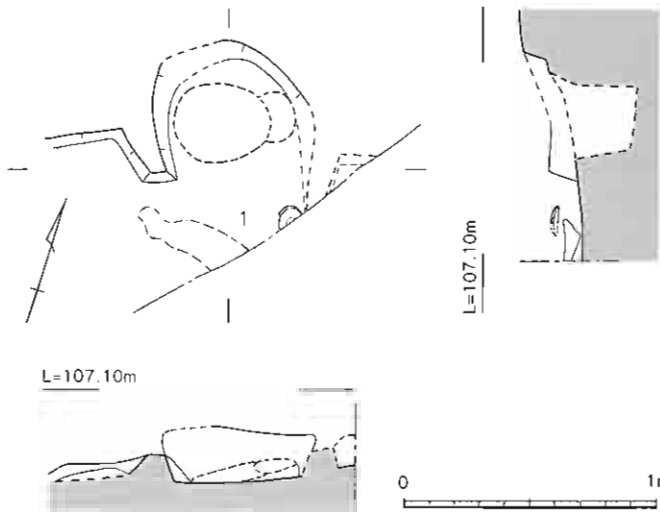
調査区南西で検出された住居跡で、6、7、8号竪穴住居跡、4、5号掘立柱建物に切られる。7号住居跡に切れ、北東側が削平を受けているため正確な規模は不明であるが、方形プランを呈するものと思われる。確認面から床面までの深さは約20cmである。支柱穴は確認されなかった。また、カマドは確認されておらず、8号住居跡に切れ大半を破壊されているため詳細は不明である。遺物の出土は無かった。

10号竪穴住居跡 (第53図、図版9)

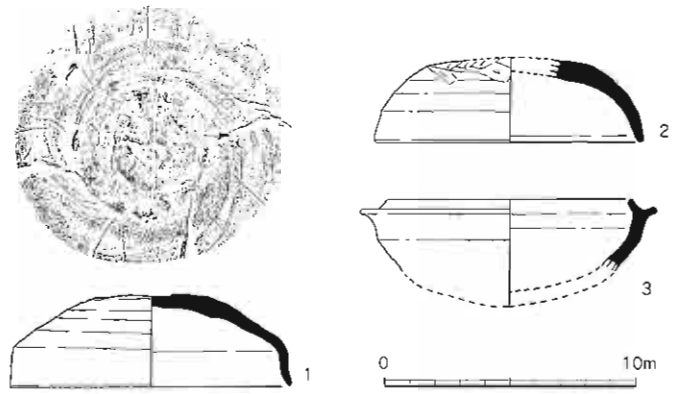
調査区南西で検出された住居跡で6、7、8号竪穴住居跡、4、5号掘立柱建物に切られる。大半が調査区外にかかるため正確な規模は不明であるが、方形プランを呈するものと思われる。確認面からの床面までの深さは約17cmを

測る。住居跡西壁には周溝が巡る。支柱穴は確認されなかった。

カマドは住居跡北壁中央に付設され、やや外に張り出す形で作られる。住居跡には袖が確認され、両袖間の幅は51cmを測る。カマドの手前には赤褐色の被熱硬化面が確認され、火床面と考えられる。カマドの中心部はピットに切られており、破壊を受けている。このピットからは凝灰岩の加工石が見られ、あるいはカマド構築材が後に流れこんだ可能性も考えられる。



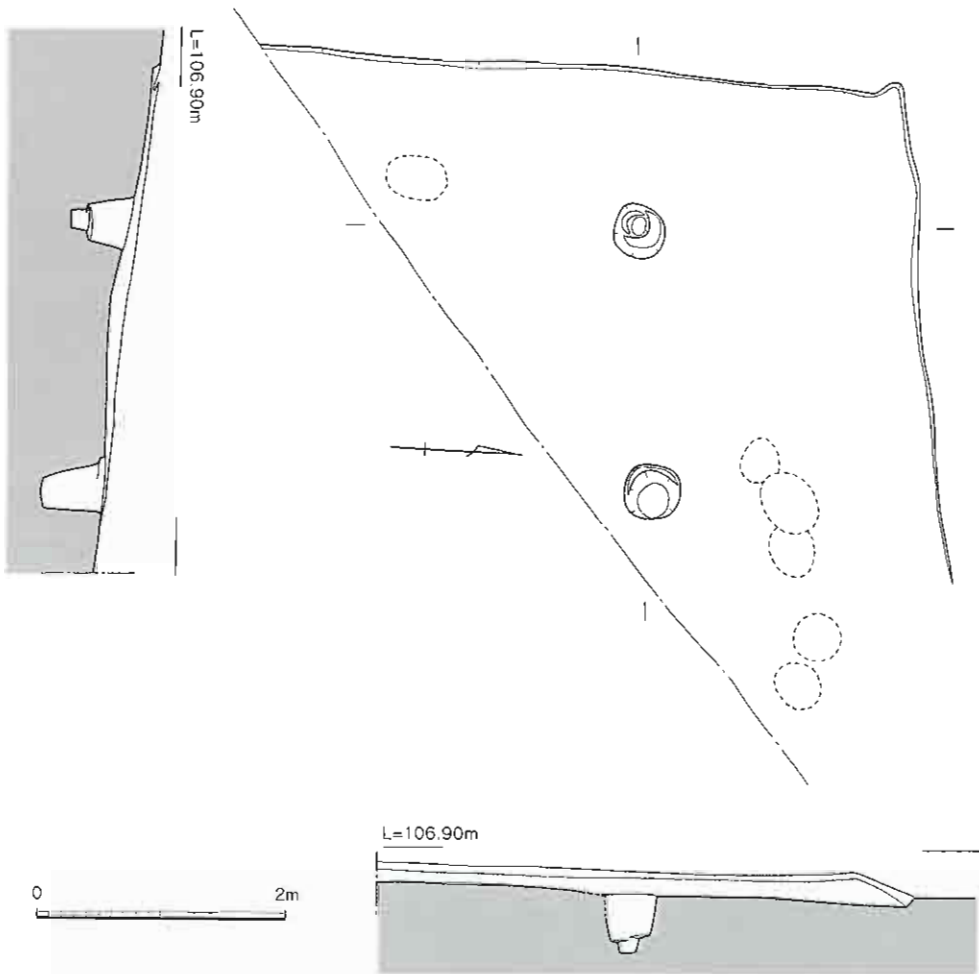
第54図 10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第55図 10号竪穴住居跡出土遺物 (1/3)

出土遺物 (第55図、図版15)

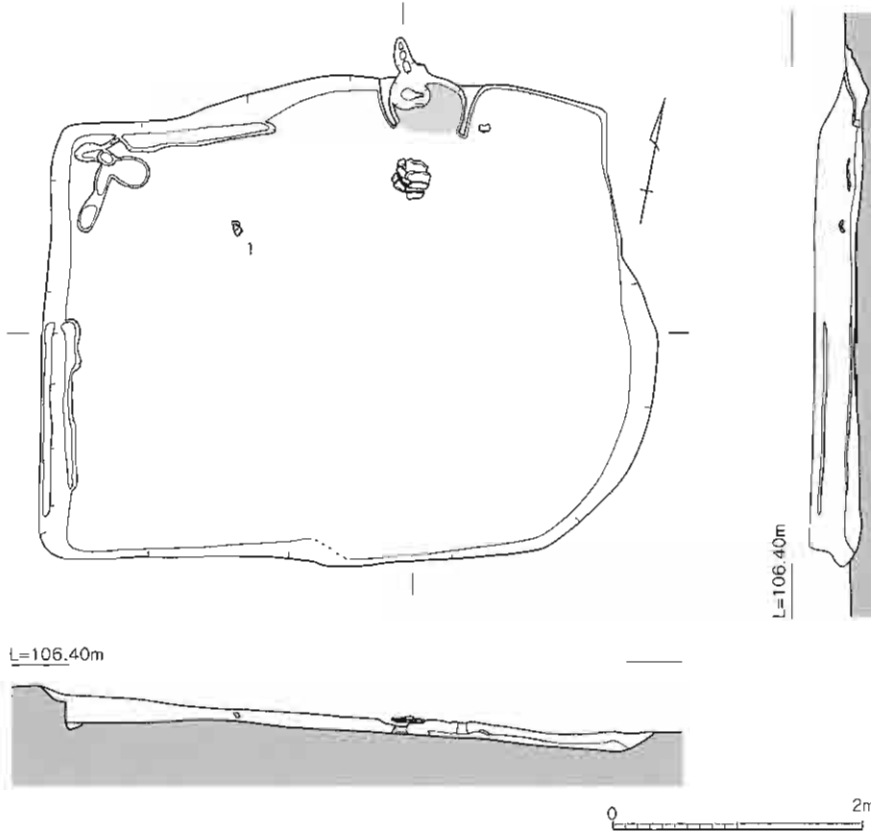
1、2は須恵器坏蓋である。1はカマド付近から出土した。天井部と口縁部の境で稜を持ち、口唇部をやや外反させる。天井部外面にはヘラ記号が施される。2は天井部に調整ヘラケズリの痕跡が残る。3は須恵器坏身である。口縁部は短く、やや内傾する。



第56図 11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

11号竪穴住居跡 (第56図、図版9)

調査区中央南側で検出された住居跡である。大半が調査区外にかかり、東側が削平を受けているため詳細は不明であるが、方形を呈するものと思われる。確認面から床面までの深さは約10cmを測る。カマドは調査区内では確認されなかったことから、南側及び東側にあるものと思われる。支柱



穴は2本確認された。支柱穴間の距離は心々距離で約2.2mを測る。出土遺物は図示できるものは無く、土器小片のみが出土した。そのなかで、内面青海波状タタキ、外面平行タタキの須恵器甕胴部小破片がみられ、また、他の住居跡に見られない支柱穴が見られることから、古墳時代に属するものと思われる。

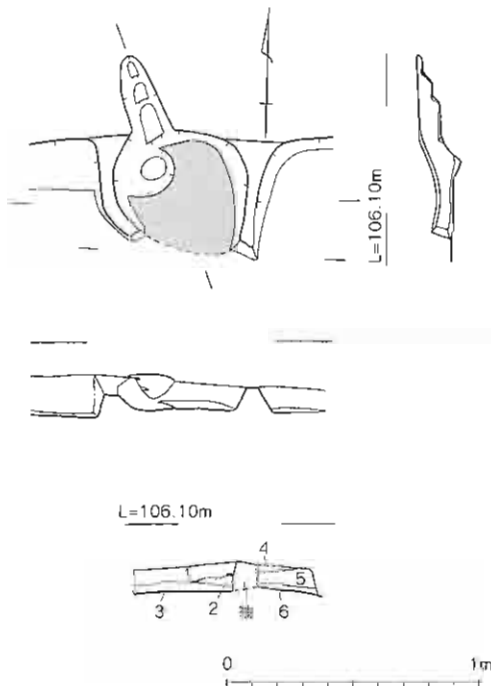
12号竪穴住居跡

(第57図、図版10)

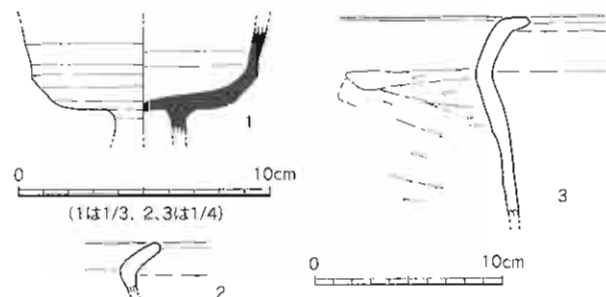
調査区東側で検出された住居跡である。確認面での規模は東西方向で約4.5m、南北方向で約3.9

m、床面までの深さ約30cmを測り、長方形を呈する。南東隅が隅丸状になり、コーナーが明確ではないが、これはおそらく壁面の崩落によるものと思われる。支柱穴は確認されなかったが、北西、及び西側壁沿いには周溝が巡る。

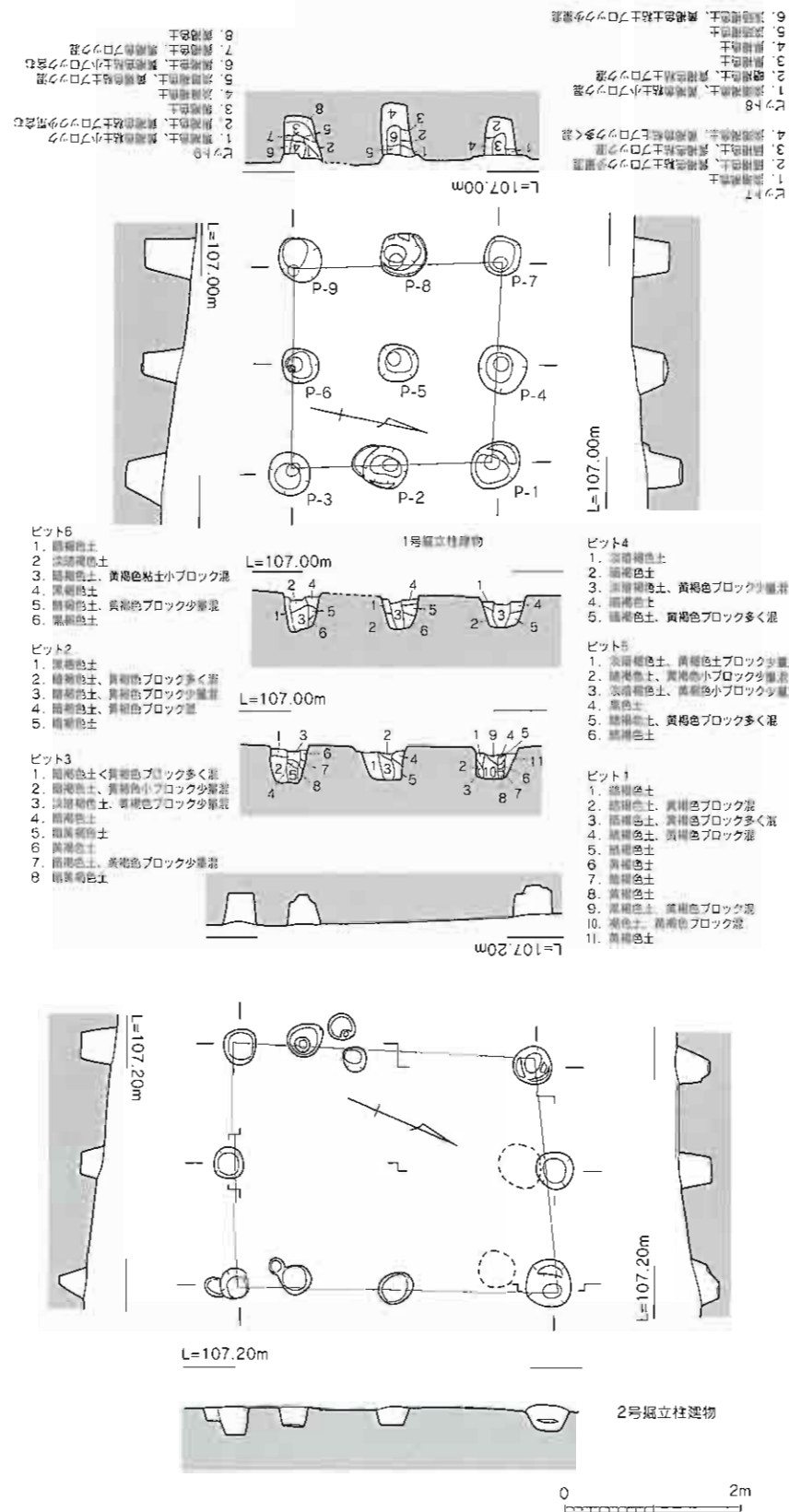
カマドは北壁のやや東よりに付設され、煙道が残る。煙道は主軸から西側に傾いて作られ、長さ約33cmが残存する。両袖も確認され、支脚、袖石等は確認されず、暗褐色土に赤褐色土を混ぜた土で構築されていた。両袖間の幅は最大



第58図 11号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第59図 12号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3,1/4)



第60図 1、2号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

おり、梁行西側の中間には柱が1本欠けている。心々距離で南北長軸約3.6m、東西短軸約2.8mを測る。検出面での柱穴の掘方は約32~49cmの円形を呈し、深さは深いもので約33cmを測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

で約54cmを測る。火床面はカマド全体に広がっていたが、被熱硬化の具合は低く、短期間の使用であったと思われる。カマド正面には土師器の破片が散乱していた。
出土遺物 (第59図、図版15)

1は住居跡北西から出土した須恵器高杯である。胴部に段を持つ。2、3は土師器甕である。3は内面にケズリを持ち、口縁部を大きく外反させる。

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物跡

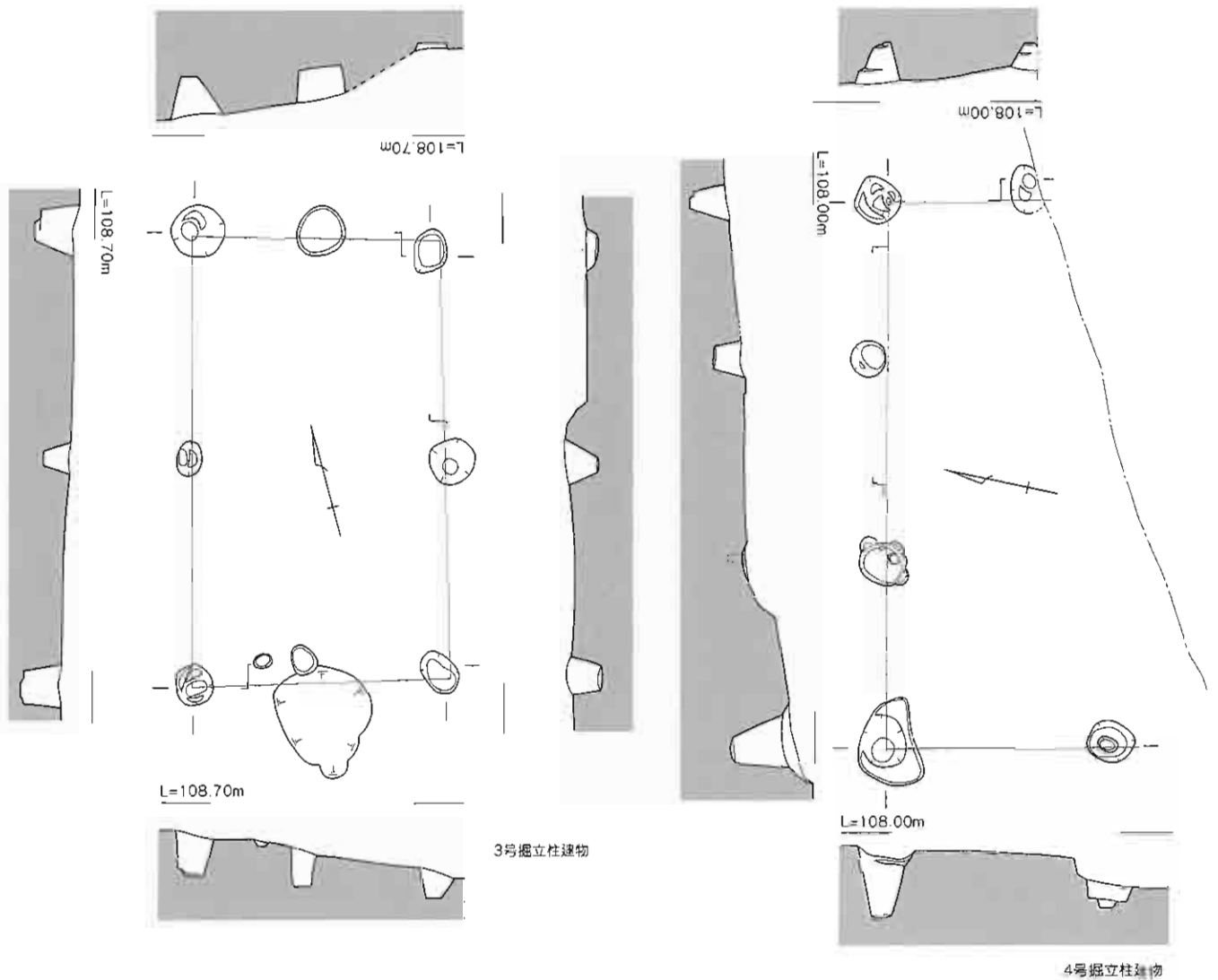
(第60図、図版10)

調査区の東側で検出されたほぼ正方形を呈する2間×2間の総柱建物である。1、2号竪穴住居跡、2号掘立柱建物を切る。ピットには柱痕が検出され、柱痕間の距離は約1.1~1.2m、建物長の心々距離は各方向約2.3mを測る。検出面での柱穴の掘方は約41~56cmの円形を呈し、深さは一番深いもので約68cmを測る。柱穴からは土師器の口縁部破片が出土している。

2号掘立柱建物跡

(第60図、図版10)

調査区の東側で検出された南北方向に軸をとる2間×3間の建物である。2号竪穴住居跡を切り、1号竪穴住居跡、1号掘立柱建物に切られる。梁行方向は3間だが、南側の柱穴間の間隔が狭くなって

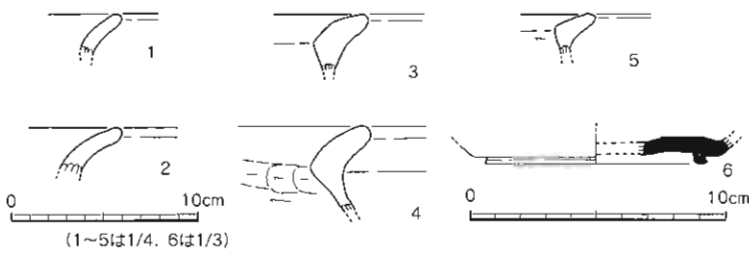


0 2m

3号掘立柱建物（第61図、図版11）

調査区の西側で検出され南北方向に軸をとる2間×2間の建物である。4、5号竪穴住居跡を切る。梁行方向の柱穴間の距離は約2.7m、桁行方向の柱穴間の距離は1.4mを測り、心々距離で南北長軸約5.3m、東西短軸約2.8mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30~63cmの円形を呈し、深さは深いもので約48cmを測る。柱穴からは土師器の口縁部などが出土しているとともに、建物壁体で使用されたと考えられる土塊も出土している。この土塊にはスサが抜けたと思われる痕跡も見られる。（写真5）

第61図 3、4、5号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第62図 柱穴出土遺物実測図 (1/3.1/4)



写真5 3号掘立柱建物出土土塊

4号掘立柱建物 (第61図、図版11)

調査区の西側で検出され東西方向に軸をとる建物であるが、調査区外にかかっているため詳細は不明である。6、7、8、9号竪穴住居跡を切る。柱穴間の距離は約2.2~2.6m、心々距離で東西方向約6.4mを測る。検出面での柱穴の掘方は約42~50cmの円形を呈し、深さはもっとも深いもので約68cmを測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

5号掘立柱建物 (第61図、図版11)

調査区西側で検出された建物であるが、調査区外にかかっているため詳細は不明である。6、7、8、9、10号住居跡を切る。柱穴間の距離は約2.1mを測る。柱穴からの遺物の出土はなかった。

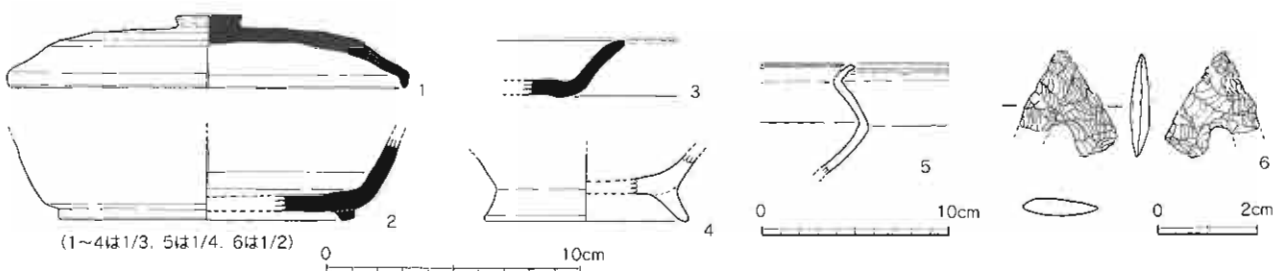
柱穴出土遺物 (第62図、図版15)

1は1号掘立柱建物P9より出土した土師器甕の口縁部である。2~4は3号掘立柱建物P8より出土した土師器甕の口縁部である。3、4には内面にケズリが施される。5はP5より出土した土師器甕の口縁部である。6はP9より出土した須恵器高台付の坏身底部である。

3. その他の遺物 (第63図、図版16)

1~4は包含層より出土した。1は須恵器坏蓋でツマミを有し、口縁部は端部を下方に折り曲げる。2は須恵器高台付の坏身である。3は須恵器皿である。口縁部はやや緩やかに外反する。4は土師器椀である。高台は外側に開く。

5、6は縄文時代の所産と考えられる遺物である。5はP5より出土した浅鉢で、外面は黒色磨研が施されていたものと思われるが、摩滅が著しい。頸部を外に張り出して稜を持ち、口縁部は内傾させた後、外反させる。口唇部には内外に沈線を施す。晩期の所産か。6は10号竪穴住居跡より出土した黒曜石製の石鏃である。両面とも押圧剥離により調整が施される。最大長2.1cm、最大幅1.9cm、最大厚4mmを測る。流れ込みと思われる。



第63図 その他の出土遺物実測図 (1/2.1/3.1/4)

第4節 小 結

大行事遺跡の調査結果について以下にまとめる。

今回の調査では主に古墳時代後期から古代の竪穴式住居跡12軒、掘立柱建物5棟が検出された。これらの遺構は出土遺物から6世紀後半と8世紀後半の2つの時期に分けられる。2、3、4、5、10、12号竪穴住居跡は6世紀後半に属し、1、3、6、7、8号竪穴住居跡は8世紀後半に属すると考えられる。10号竪穴住居跡に関しては出土遺物もないため、切り合い関係から、8世紀後半代以前のどの時期か明確ではないが、11号竪穴住居跡に関しては、日田市内で支柱穴を持つ住居跡は6世紀後半までしかみられず、またこの住居の規模が古代の住居よりも大きいことから、少なくとも6世紀後半以前に属するものと思われる。掘立柱建物は1、3号掘立柱建物が8世紀代に属し、2号掘立柱建物は、主軸が3号掘立柱建物とほぼ同じである点から、8世紀後半に属す可能性が高い。4、5号掘立柱建物に関しては、切り合い関係から、少なくとも8世紀後半以降で、特に4号掘立柱建物に関しては主軸方向が2、3号掘立柱建物と大きく異なることから8世紀後半よりも新しい可能性が考えられる。

以上のように大行事遺跡の集落群の時期は考えられる。そこで、大行事遺跡の集落の変遷についてまとめる。古くは縄文時代晩期からこの谷地の利用が始まるが、本格的に集落が出来るのは、古墳時代後期に至ってからである。その後、7世紀代には集落の利用が一旦なくなり、8世紀後半に再び集落として利用されると考えられる。8世紀後半以降この地に集落は見られなくなるが、包含層から9～10世紀代の土器が出土していることから、4、5号掘立柱建物のように建物群が地点を変えて営まれる可能性が考えられる。以上のような集落の変遷が辿れるが、今回調査した部分はこの谷地の一部であることから、詳細な集落の展開については今後の調査を待つて検討する必要がある。

さて、今回の調査成果では、古墳時代後期から古代の集落がこの狭い谷地一帯に存在する可能性が明らかになった。周辺にはこれまでの調査例は見られないが、この谷地形の北側には古墳時代後期の集落が存在する葛原遺跡が所在しており、この一帯の狭い谷地全体が集落として利用されていた状況が次第に明らかになりつつある。有田川を上った求来里川流域には尾漕遺跡、長迫遺跡等の集落遺跡が大規模に展開しており、これらの遺跡は古墳時代後期～古代まで継続している。本遺跡周辺においても同様に、この時期まで集落が大規模に展開していた可能性は高い。有田川流域では概ね6世紀後半から集落が大規模に展開するようになり、7世紀代に至って、一旦集落の利用が見られなくなり、8世紀代に入って再び集落が営まれるようになるという傾向がある。本遺跡においても同様な傾向が当てはまる可能性は高く、しかも、これらの遺跡の殆どが狭い谷地や丘陵地の緩斜面に立地するという特徴でも一致している。おそらく有田川の氾濫を避けて集落を営むにはこれらの立地が適切であったのだろう。いずれにしても、これらの点から、本遺跡周辺の有田川、花月川の合流点付近にも、狭い谷地などの緩斜面に古墳時代後期及び、古代の集落が大規模に展開していたと考えられ、これらの集落の展開は有田川流域一帯で見られていたものと思われる。

また、本遺跡には横穴墓群が隣接している。集落から目と鼻の先の位置であり、横穴墓から集落を見下ろすことが出来る。少なくとも本編V章から、この横穴墓群は5世紀後半代前後には成立していたこととなり、この時期からの墓域の形成と集落の立地との関係も注目される。6世紀後半までこの横穴墓が継続していたとすると、集落に非常に近い位置に墓域が形成されていたことになる。

有田川対岸には5世紀後半～8世紀まで継続する佐寺横穴墓群、夕田横穴墓群等が見られ、これらの横穴墓の周辺にも本遺跡同様に集落が同様に展開していた可能性が充分考えられよう。これらの点に関しては今後の調査の課題であるが、本遺跡が、集落と墓域の立地の1例を提示したことは貴重な成果であると考えられる。

《参考文献》

『平成6～11年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1996～2001

『平島遺跡D地点・塔ノ本古墳・祇園原遺跡2次・長迫遺跡C地点・長迫遺跡D地点・尾漕遺跡6次』

日田市教育委員会 2001

『尾漕遺跡』 日田市教育委員会 2001

『尾漕遺跡2・5次』 大分県教育委員会 2000

『日田糸里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡』 大分県教育委員会 1997

『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』 大分県教育委員会 1998

『夕田遺跡群』 大分県教育委員会 1999



大行事遺跡の発掘調査に参加された方々

第3表 大行事跡跡出土遺物観察表①

※表中には略記号を用いる。

種別 縄文…縄文土器 弥生…弥生土器 土師…土師器 須…須恵器

胎土 a…石英 b…長石 c…角閃石 d…雲母 e…赤色粒子 f…黒色粒子 g…白色粒子

図	番号	出土位置	種別	器種	法量(%)は元元残存量			調		胎土	焼成	色調	
					口径	低径	高さ	外	内			外	内
36	1	1住	須	蓋	-	-	-	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	b	不良	淡灰白色	淡灰白色
	2	1住	須	蓋	-	-	-	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	淡青灰色	淡青灰色
	3	1住	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	4	1住	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	黒灰色	黒生色
	5	1住	須	坏	-	-	-	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	6	1住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	7	1住	須	坏	19.0	-	-	回転ナデ、底部:回転ヘラ切り	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	8	1住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	不良	淡灰色	淡灰色
	9	1住	須	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	10	1住	須	皿	13.9	-	(2.2)	ヘラ切り、回転ナデ後不定方向ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	11	1住	土師	坏	-	19.8	-	回転ナデ	回転ナデ	b,d	不良	淡黄褐色	淡黄褐色
	12	1住	土師	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ	a,b,c,d	良好	暗褐色	暗褐色
	13	1住	土師	甕	-	-	-	ハケ	指頭庄痕、ケズリ	a,b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	14	1住	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ケズリ	a,b,c,d,e	良好	黄褐色	黄褐色
38	1	1住	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ後	a,b	良好	暗青灰色	淡青灰色
	2	1住	須	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	緑灰色	緑灰色
	3	1住	須	ハソウ	-	-	-	刺突文、ナデ	ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	4	2住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	5	2住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	a,b,c,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
40	1	3住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	a,b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
44	1	4,5住	須	甕	12.0	-	(3.6)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ後不定方向ナデ	b,f	良好	淡青灰色	淡青灰色
	2	4,5住	須	甕	-	-	-	ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ後調整ナデ	a,b	良好	暗灰赤褐色	暗灰赤褐色
	3	4,5住	須	甕	11.2	-	-	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	b,c,d	良好	青灰色	青灰色
	4	4,5住	須	甕	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	淡青灰色	淡青灰色
	5	4,5住	須	甕	-	-	-	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ後不定ナデ	b	良好	暗灰色	青灰色
	6	4,5住	須	甕	11.6	-	(2.1)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	a,b	不良	白灰色	白灰色
	7	4,5住	須	坏身	10.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b,d	良好	暗赤褐色	暗赤褐色
	8	4,5住	須	坏身	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	不良	青灰色	青灰色
	9	4,5住	須	提瓶	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	10	4,5住	須	ハソウ	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	11	4,5住	須	高坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b,f	良好	淡灰色	淡灰色
	12	4,5住	須	高坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b,f	良好	灰白色	灰白色
	13	4,5住	須	甕	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	14	4,5住	土師	甕	11.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	不良	淡赤褐色	淡赤褐色
	15	4,5住	土師	高坏	13.2	-	-	ナデ	ナデ	b,d,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	16	4,5住	土師	高坏	-	-	-	ケズリ	ケズリ	b	良好	淡赤褐色	淡赤褐色
	17	4,5住	土師	高坏	-	-	-	ケズリ	ナデ	b	良好	淡赤褐色	淡赤褐色
	18	4,5住	土師	鉢	16.1	-	-	ナデ、指頭庄痕	ナデ、指頭庄痕	b,d	不良	淡黄褐色	淡黄褐色
	19	4,5住	土師	鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	b	良好	淡赤褐色	淡赤褐色
	20	4,5住	土師	甕	14.2	-	-	ナデ、タテハケ	ナデ、ケズリ	a,b,c	良好	淡黄褐色	淡黒褐色
	21	4,5住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、指頭庄痕	a,b,c	良好	淡黒褐色	淡黄褐色
	22	4,5住	土師	甕	-	-	-	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ、ケズリ	a,b,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	23	4,5住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	24	4,5住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	25	4,5住	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ケズリ	a,c,d,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	26	4,5住	土師	把手	-	-	-	ケズリ	ケズリ	a,b	不良	淡黄褐色	淡黄褐色
46	1	6住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	淡青灰色	淡青灰色
	2	6住	須	坏	-	10.0	-	回転ナデ	回転ナデ後調整ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	3	6住	土師	坏	14.5	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b,c,d,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	4	6住	土師	坏	8.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b,c	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	5	6住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c	良好	赤褐色	赤褐色
	6	6住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	a,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
49	1	7住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	淡黄褐色
	2	7住	須	坏	13.8	-	4.25	回転ナデ、底部:回転ヘラ切り未調整	回転ナデ後不定方向ナデ	b	良好	淡青灰色	淡青灰色
	3	7住	須	坏	-	8.2	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	4	7住	須	坏	14.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	5	7住	須	坏	15.4	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色

第4表 大行事遺跡出土遺物観察表②

図	番号	出土位置	種別	器種	法規(cm)			調整		胎土	焼成	色調	
					口径	低径	器高	外 面	内 面			外	内
52	1	8住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	2	8住	須	坏	(14.5)	-	4.0	回転ナデ、底部:ヘラ切り	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	3	8住	須	坏	(12.8)	(9.1)	(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	4	8住	須	坏	(16.2)	-	(6.3)	回転ナデ、底部:ヘラ切り未調整	回転ナデ後調整ナデ	a,b	良好	淡青灰色	淡青灰色
	5	8住	須	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	6	8住	須	掛瓶	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	7	8住	土師	甕	(15.2)	-	-	ナデ、ハケ	ナデ、ケズリ	a,b,c	良好	淡赤褐色	暗褐色
	8	8住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	a,b,c,d	良好	赤褐色	赤褐色
	9	8住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	a,b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	10	8住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	a,b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	11	8住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ケズリ	a,b,c	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	12	8住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c,d	良好	赤褐色	赤褐色
	13	8住	土師	小型甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c,d	良好	赤褐色	赤褐色
	14	8住	土師	手捏土器	-	-	-	指頭圧痕	ナデ	a,b,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	15	8住	土師	手捏土器	-	-	-	指頭圧痕	ナデ	a,b,e	不良	淡黄褐色	淡黄褐色
56	1	10住	須	蓋	11.0	-	3.7	ヘラ切り未調整、回転ナデ	回転ナデ後調整ナデ	a,b	良好	暗黒灰色	暗灰褐色
	2	10住	須	蓋	(10.6)	-	-	不定方向ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	3	10住	須	坏	(9.6)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
60	1	11住	須	高坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
	2	11住	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c	良好	淡褐色	淡褐色
	3	11住	土師	甕	-	-	-	ナデ、ハケ	ナデ、ケズリ	a,b,c,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
63	1	1号掘立P-9	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	2	3号掘立P-8	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	b,c,d,e	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	3	3号掘立P-8	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c,d	良好	赤褐色	赤褐色
	4	3号掘立P-8	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	5	P-7	土師	甕	-	-	-	ナデ	ナデ、ケズリ	a,b,c,d	良好	淡黄褐色	淡黄褐色
	6	P-9	須	坏	-	(8.6)	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	青灰色	青灰色
64	1	包層	須	蓋	(15.6)	-	(2.9)	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	a,b	良好	灰白色	灰白色
	2	包層	須	杯	-	(11.8)	-	回転ナデ	回転ナデ	a,b	不良	灰白色	灰白色
	3	包層	須	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	b	良好	青灰色	青灰色
	4	包層	土師	桶	-	(8.0)	-	回転ナデ	ナデ、回転ナデ	b	良好	赤褐色	赤褐色
	5	P-5	縄文	浅鉢	-	-	-	黒色磨研	黒色磨研	a,b	良好	黒褐色	黒褐色

大行事遺跡写真図版



① 大行事遺跡遠景（葛原遺跡を望む）



② 大行事遺跡完掘状況

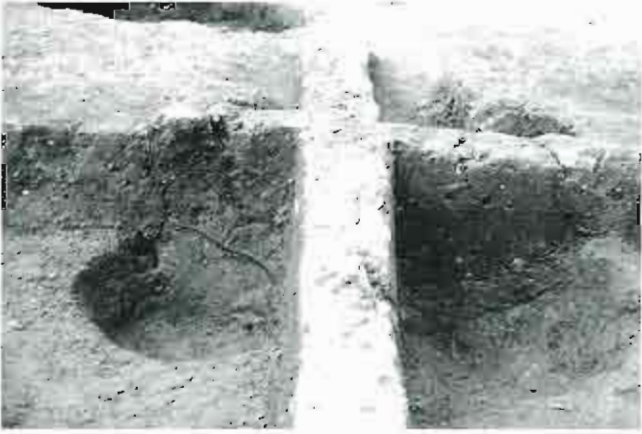
図版8



① 1号竪穴住居跡（南から）



② 1号竪穴住居跡カマド（南から）



③ 1号竪穴住居跡カマド横土層



④ 1号竪穴住居跡カマド縦土層



⑤ 2号竪穴住居跡（南から）



⑥ 3号竪穴住居跡



⑦ 4、5号竪穴住居跡（東から）



⑧ 4号竪穴住居跡カマド（東から）



① 6、7、8、9号竪穴住居跡（東から）



② 6、7、8、9号竪穴住居跡カマド（真上から）



③ 7、8号竪穴住居跡カマド（東から）



④ 7、8号竪穴住居跡カマド横土層



⑤ 7、8号竪穴住居跡カマド縦土層



⑥ 10号竪穴住居跡（北から）



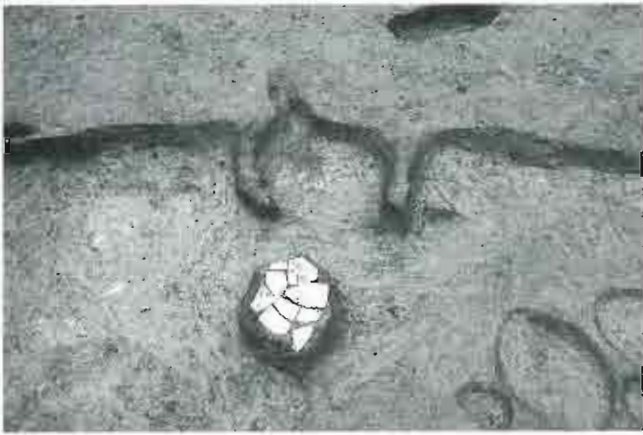
⑦ 11号竪穴住居跡（北から）



① 10号竪穴住居跡カマド



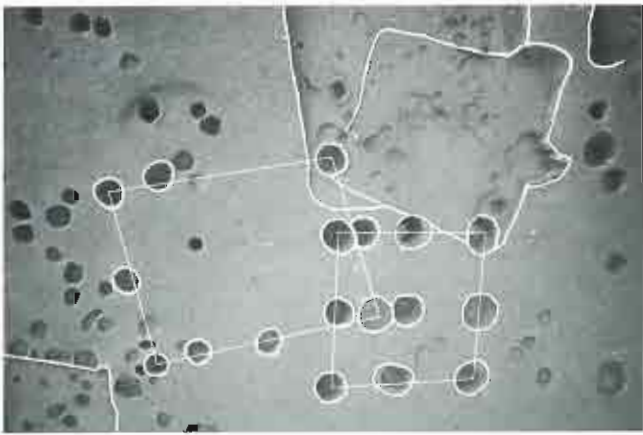
② 12号竪穴住居跡



③ 12号竪穴住居跡カマド



④ 12号竪穴住居跡カマド土層



⑤ 1、2号掘立柱建物



⑥ 1号掘立P-1土層



⑦ 1号掘立P-2土層



⑧ 1号掘立P-3土層



① 1号掘立P-4土層



② 2号掘立P-5土層



③ 1号掘立P-6土層



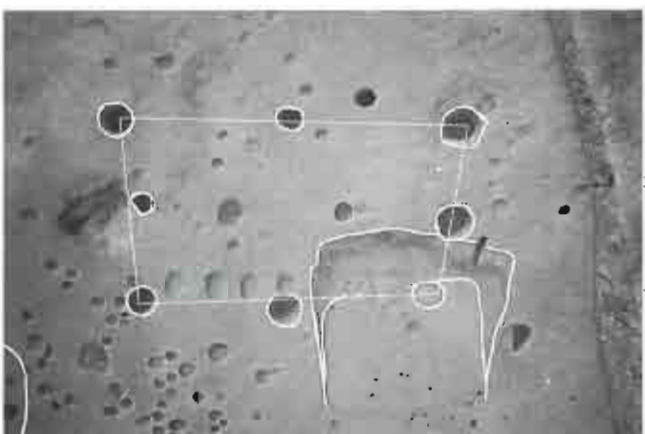
④ 1号掘立P-7土層



⑤ 1号掘立P-8土層



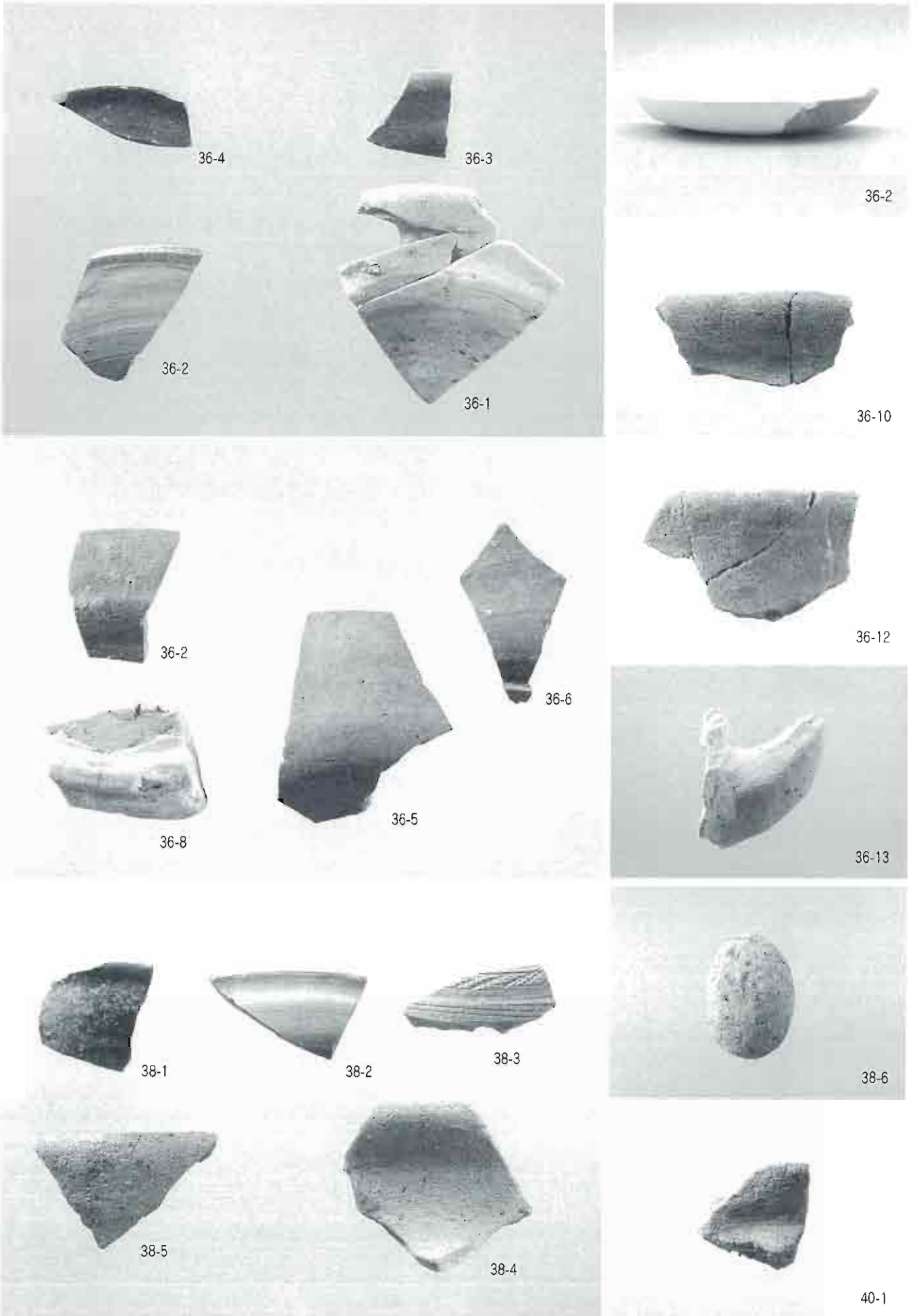
⑥ 1号掘立P-9土層



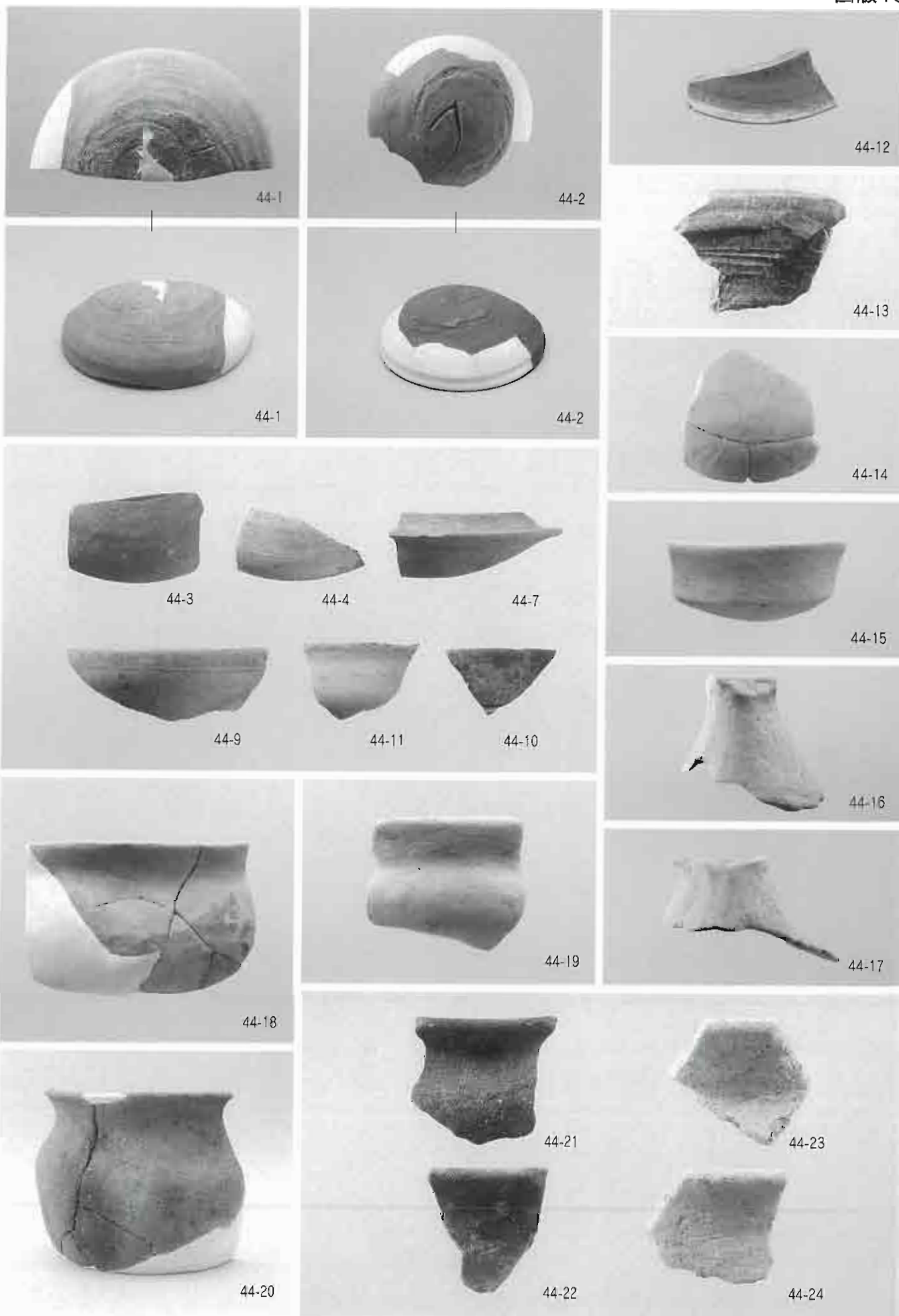
⑦ 3号掘立柱建物



⑧ 4、5号掘立柱建物

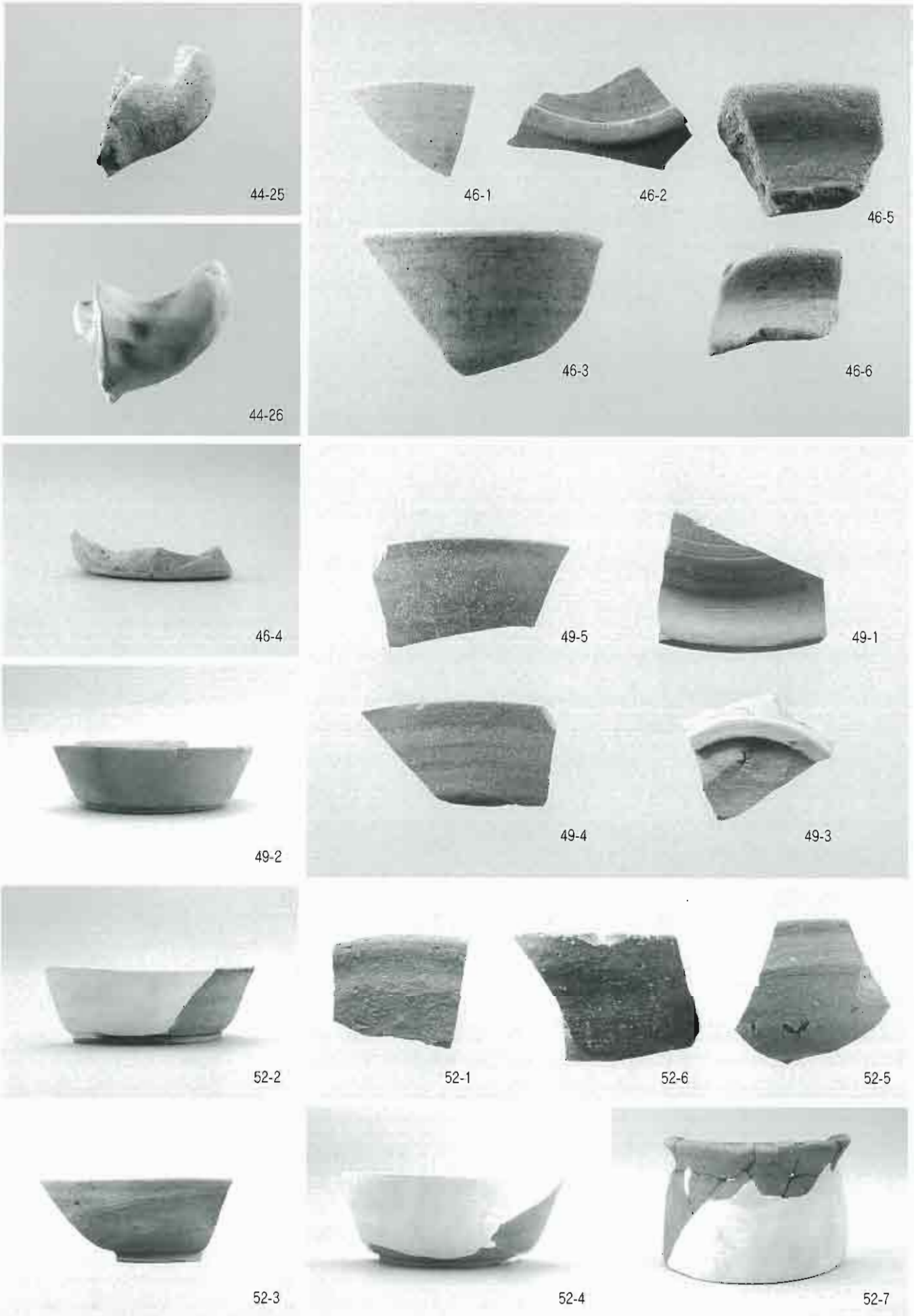


※遺物の番号は全て挿図番号と一致する (ex…第36図の1は36-1と標記する)

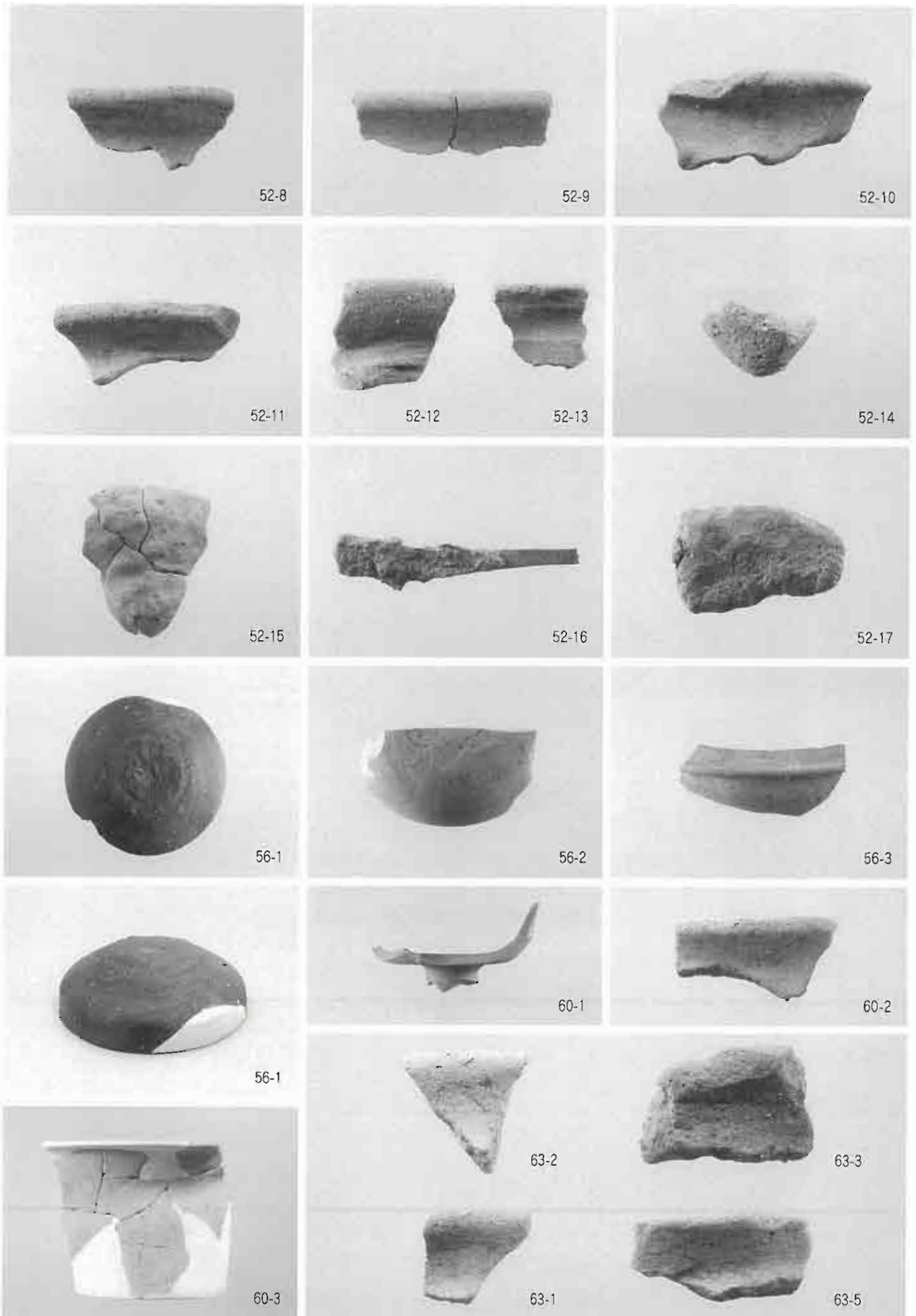


※遺物の番号は全て挿図番号と一致する

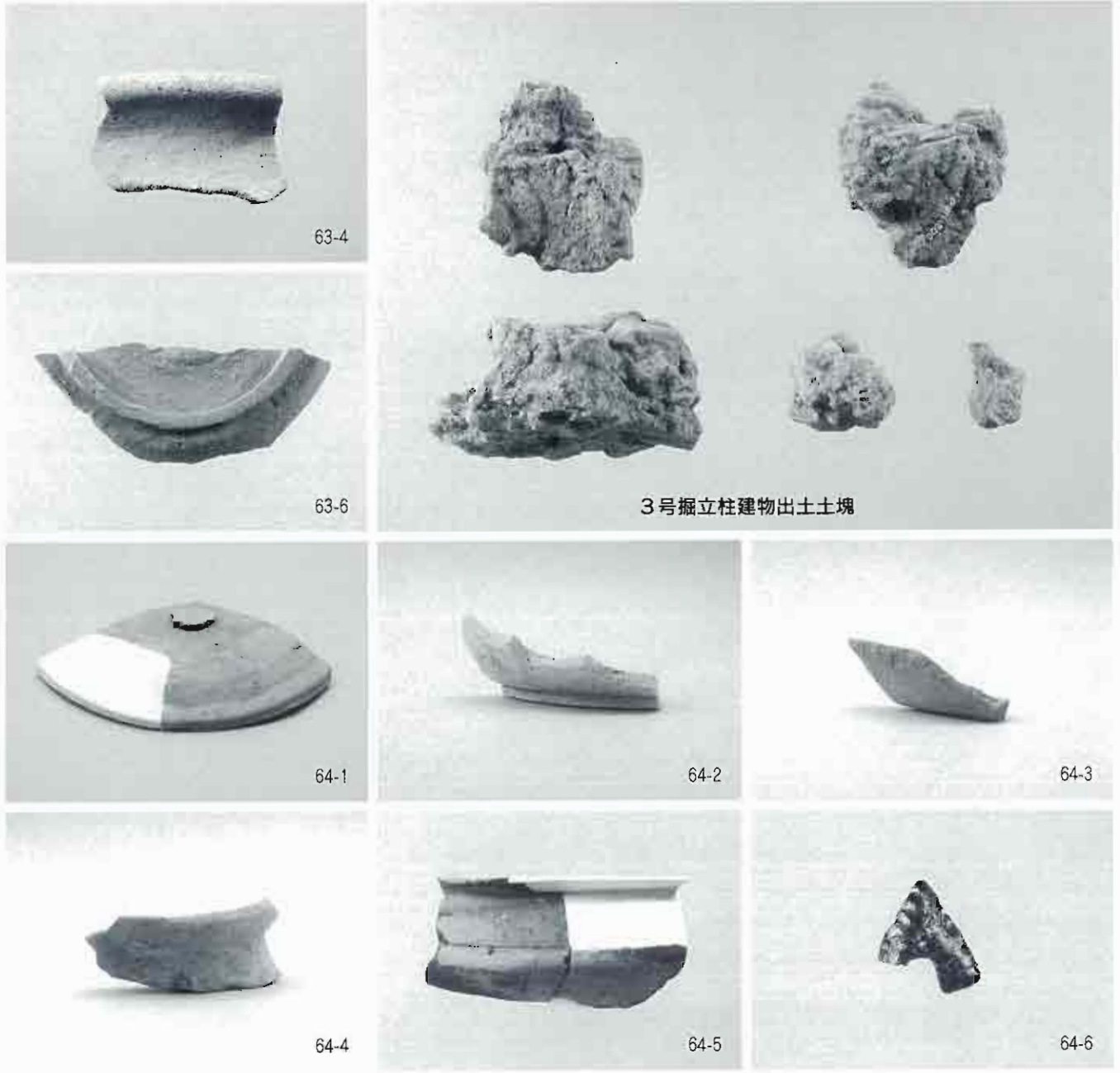
図版14



※遺物の番号は全て挿図番号と一致する



※遺物の番号は全て挿図番号と一致する



※遺物の番号は全て挿図番号と一致する

付編 大行事横穴墓群

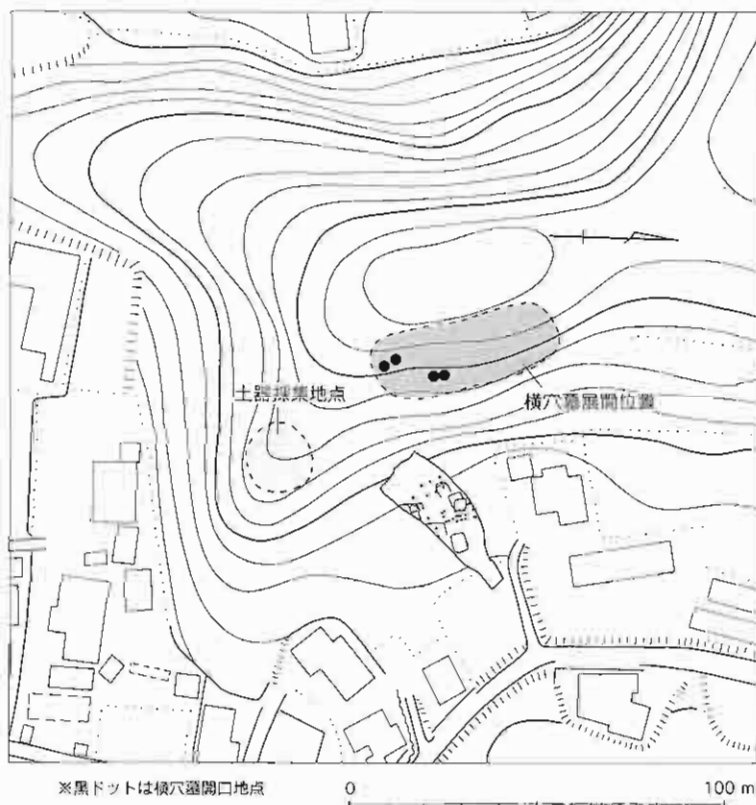
第V章 付編 大行事横穴墓群について

大行事横穴墓群は、大行事遺跡の調査中に発見された横穴墓群である。遺跡西側の丘陵斜面に横穴墓らしき穴が開口しているものが発見されたため、周辺の斜面を踏査したところ、これと同様な穴が開口している箇所が発見された。内部は一部農業用倉庫として、近年加工されているものもみられたが、開口部らしき箇所が多数みられたため、これらを横穴墓と判断し、周知遺跡に新規登録を行った。

第1節 横穴墓の位置と現状

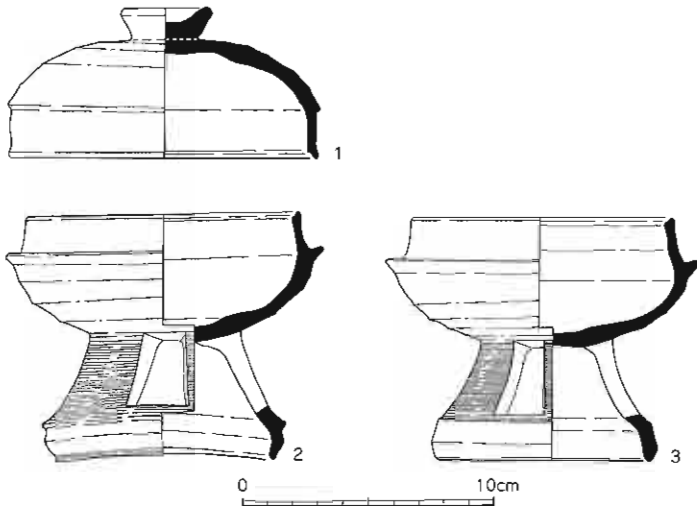
この横穴墓群は日田市大字西有田字平等寺1194他に所在し、日田盆地東部の有田川と花月川の合流点付近に形成される入り組んだ丘陵地に位置する。横穴のある丘陵は石松川右岸の独立丘陵で、長軸約500m、短軸約200mと北西から南東方向に細長く伸びる。頂部はやや平坦な台地形を呈し、標高は約131.5m、沖積地との比高差約35mを測る。この丘陵は中世日田を治めた群老の一人である石松氏の居城跡との推測がなされている。

横穴墓はこの丘陵の南東側の鞍部斜面に位置しており、この鞍部からは有田川沿いに広がる沖積地を一望できる好所でもある。横穴墓はこの斜面を巡るようにして確認された。特に北東側の斜面沿いに横穴墓一部開口が5箇所発見され、その他この開口地点周辺部及び、斜面上方に凝灰岩の割り貫かれたような痕跡が削平を受けた状態でみられた。完全に開口している横穴の内部形態でも、一部玄室隅と思われる箇所が隅丸形状に残存していた以外は、大半が後世に農業用倉庫として内部を加工していたため、詳細の把握は出来なかった。



第64図 大行事横穴墓周辺地形図 (1/2000)

また、この横穴群から約40m南西側の丘陵鞍部にある栗畑からは、須恵器が出土している。この栗畑の所有者の話では、栗畑の開墾時に切り株を除去したところ、切り株の下に大きな穴が空いており、その中に須恵器が入っていたということである。また、その他開墾時には赤色顔料が塗られたらしき石材も出土したとのことであった。この付近には開口部等は確認されなかったが、現況では大きく窪んだような箇所もみられ、これが横穴墓であった可能性も十分考えられる。この時出土した須恵器を土地の所有者の日野正行氏が採集されており、須恵器高杯2点、坏蓋1点、ハマグリと思われる貝殻が1点出土したことが判明した。な



第65図 大行事横穴墓採集遺物 (1/3)



写真6 大行事横穴墓採集の貝

お、この資料は平成13年5月に日野氏が日田市教育委員会文化課に寄贈され、市埋蔵文化財センターにて保管されている。

第2節 横穴墓採集の遺物 (第65図、写真6)

横穴墓から出土採集された3点の土器はいずれも須恵器でほぼ完形である。1は須恵器坏蓋で、天井部中央に中央部が窪んだツマミを有し天井部と口縁部の境に稜が見られる。口縁端部は細くやや外反する。外面は天井部が回転ヘラケズリ、口縁部が回転ナデ、内面は回転ナデである。色調は青灰色を呈し、胎土は石英、長石を含む。焼成は良好。口径12.4cm、器高5.9cmを測る。2は須恵器高杯で、1とセットになると思われる。坏部底は比較的丸く、受部は上方に伸びる。口縁部は内傾し、端部をやや窪ませる。脚部はややゆがみがあるものの、ハの字形に緩やかに外反し、脚端部付近で稜を持ち、内湾する。脚体部には台形のスカシ窓が3つ見られる。坏部は体部外面ヘラケズリ、内面回転ナデである。脚部は体部外面カキ目、内面回転ナデ。色調は青灰色を呈し、胎土は石英、長石を含む。焼成は良好。口径10.8cm、底径8.7cm、器高9.7cmを測る。3は須恵器高杯である。坏部底は比較的丸く、受部は上方に伸びる。口縁部は内傾し、端部をやや窪ませる。脚部はハの字形に緩やかに外反し、脚端部付近で稜を持ち、内湾する。脚体部には台形のスカシ窓が3つ見られる。坏部は体部外面ヘラケズリ、内面回転ナデである。脚部は体部外面カキ目、内面回転ナデ。色調は青灰色を呈し、胎土は石英、長石を含む。焼成は良好。口径10.2cm、底径8.3cm、器高9.6cmを測る。その他、ハマグリと思われる貝殻も出土している (写真6) おそらく高杯に入っていたものと思われる。

第3節 まとめ

大行事横穴墓は従来横穴墓の存在が知られていなかった有田川左岸にみられた。この横穴墓周辺には6世紀代後半と8世紀後半の集落が発見された大行事遺跡があり、集落と墓域が隣接して存在するひとつの例を提示している。この横穴墓から出土した遺物は小田編年II-Aに相当するものと考えられ、少なくとも5世紀後半にはこの横穴墓群が形成されていたものと考えられる。

有田川を挟んだ対岸には佐寺横穴墓群、夕田横穴墓群などの横穴墓群が見られ、これらのうち佐寺横穴墓群は6世紀後半、夕田横穴墓群は5世紀後半から築造が開始され、6世紀初頭で一旦築造

を止め、その後、6世紀末～8世紀前半まで横穴墓群が形成される。このことから、有田川右岸では5世紀後半に築造が開始され、6世紀後半を中心としてその後8世紀まで築造されるようであり、この状況は有田川左岸においても当てはまる可能性は高い。現時点で大行事横穴墓群の時期変遷の検討は出来ないが、採集された遺物からすると、夕田横穴墓群の成立時期と一致しており、それ以外にも開口する横穴墓が幾つか展開していることから、同様に8世紀代まで継続された可能性は充分考えられる。と、すると、大行事遺跡で見られる古代の住居跡との関係についても、これら横穴墓被葬者の集落の可能性も考えられよう。これらの具体的検討については今後の調査に期待したい。

《参考文献》

「夕田横穴墓群」 『夕田遺跡群』 大分県教育委員会 1999

「佐寺横穴墓群」 『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』 大分県教育委員会 1997



写真7 横穴墓現況写真①



写真8 横穴墓現況写真②



写真9 横穴墓現況写真③



写真10 横穴墓現況写真④



写真11 須恵器採取地点現況写真 ①



写真12 須恵器採取地点現況写真 ②



52-15



52-16



52-17

写真13 採集遺物写真

第Ⅵ章 総括

広域農道日田地区有田工区整備事業に伴って平成10～12年度に発掘調査を行った内ノ下遺跡、大行事遺跡の成果について報告を行った。ここでこれらの成果について簡単にまとめることとする。

内ノ下遺跡では主に弥生時代中期から後期の集落が所在したことが確認された。特に弥生時代の住居跡の存在は注目される。これまでの調査成果では弥生時代の集落は後迫遺跡、吹上遺跡など主に台地上に立地するものが多く、後期に入ってから平島遺跡A・B区、徳瀬遺跡、三和教田遺跡など、沖積微高地上に大規模集落が見られるようになることが明らかとなっている。これに対し、近年の調査から、大規模集落が展開する台地の縁辺部の緩斜面や沖積地に弥生時代の集落が見られることが明らかになりつつある。本遺跡での調査成果に関しても、対岸の台地上には前期末から後期末にかけての集落が営まれ、この地域の中心集落と考えられる佐寺原遺跡が所在しており、台地上に位置する集落の眼下に広がる沖積地の利用という点を考えてゆく上でも貴重な資料を提示しているといえる。

また、中世後期に属すると考えられる溝の存在は、後背台地上に所在すると考えられている石松氏の居城跡との関係から考えても興味深い資料と言えよう。

大行事遺跡では、古墳～古代の集落跡の存在が確認され、この狭い谷地を利用して集落が展開していたことが明らかになった。周辺には横穴墓の存在が確認されており、集落と墓域の関係を探る上での一つのパターンを提示している。日田市内での調査例ではこの時期の集落は緩斜面に位置することが多く、沖積地を利用する例はあまり見られない。このことから、沖積地が単なる居住地として以外の利用が行われるようになったことも想定されよう。

以上の調査成果から、有田川と石松川との合流点付近に展開していた遺跡の状況が明らかになりつつある。この地域の入り組んだ地形と花月川へと広がる沖積地がどのように利用されていたのか今後は注意して調査にあたる必要がある。

報 告 書 抄 録

ふりがな	うちのしたいせき・だいぎょうじいせき
書名	内ノ下遺跡・大行事遺跡
副書名	県営日田地区広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	渡邊隆行・吉田博嗣
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちのしたいせき 内ノ下遺跡	おおいたけんひたしおおあぎ 大分県日田市大字 にしありたあぎうちのした 西有田字内ノ下 1305-1ほか	44204-6				19981217~19990326	1600㎡	広域農道
だいぎょうじいせき 大行事遺跡	おおいたけんひたしおおあぎ 大分県日田市大字 にしありたあぎひらうじ 西有田字平等寺 1193-4ほか	44204-6	651064			20000828~20001120	450㎡	広域農道

所要遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うちのしたいせき 内ノ下遺跡	集落	弥生時代~中世	竪穴住居跡 1軒、竪穴遺構 2基 土坑 4基、溝 8条	弥生土器、土師質土器、石造物	
だいぎょうじいせき 大行事遺跡	集落	古墳時代~古代	竪穴住居跡 12軒 掘立柱建物跡 5棟	土師器、須恵器、石器、鉄器	

内ノ下遺跡・大行事遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書
第33集

平成14年3月1日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1

印刷 尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8

